



山科本願寺跡
発掘調査総括報告書

2022年3月

京都市文化市民局

山科本願寺跡
発掘調査総括報告書

2022年3月

京都市文化市民局

例 言

- 1 本書は、京都市山科区西野山階町に所在する山科本願寺跡で実施した発掘調査の報告書である。調査は山科本願寺の範囲内容確認を目的とし、国庫補助事業として実施した。
- 2 本書は、平成30年～令和3年度にかけて実施した23・24・25・27次の4次にわたる調査成果を報告するものである。なお、平成30年～令和2年度の調査概要については、既に各年度の『京都市内遺跡発掘調査報告』で報告しており、本書はその報告内容に基づくものの、一部見解を修正した箇所もある。過去の報告内容と今回の記載が異なる場合、本書の内容をもって令和4年3月31日時点における最新の見解とする。
- 3 一連の調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が主体として実施し、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所の支援を受けた。
- 4 本書に掲載した写真の撮影は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託し、遺構・遺物の一部は調査担当者が行った。
- 5 本書で使用した遺物の名称及び形式・型式、段階は、一部を除き、平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要』第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、2019 に準拠する。

750	840	930	1020	1110	1170	1260	1350	1410	1500	1590	1680	1740	1800	1860
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B	A B C	A B C	A B C	A B C	A B	A B	A B

- 6 本書で使用した土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』2016年度版に準じる。
- 7 本書中で使用した方位及び座標の数値は、世界測地系 平面直角座標系VIによる（ただし、単位（m）を省略した）。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。なお、調査における基準点の設置は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託した。
- 8 本調査の出土遺物、調査図面、写真ほか調査に係る記録は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
- 9 本書で使用した地図は、本市都市計画局発行の都市計画基本図（縮尺1/2,500）「山科」「安祥寺」を調整したものである。
- 10 本書は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 馬瀬智光、奥井智子が執筆・編集し、全体の調整を奥井が行った。執筆分担は目次に記した。なお表紙には、「山科古図」（京都府立洛東高等学校蔵）を使用している。

本文目次

I. はじめに	1 (奥井)
II. 遺 跡	
1. 地理的環境	9 (奥井)
2. 歴史的環境	10 (奥井)
3. 周辺の調査	16 (奥井)
附 1・2次調査について	33 (奥井)
III. 発掘調査の成果	
1. 遺 構	47 (奥井)
(1) 宗主空間北側 (23次駐車場部分)	47
(2) 現存土塁 (23次測量部分・24次調査)	52
(3) 御影堂想定範囲 (25・27次調査)	61
2. 遺 物	70 (奥井)
(1) 宗主空間北側 (23次駐車場部分)	70
(2) 現存土塁 (23次測量部分・24次調査)	73
(3) 御影堂想定範囲 (25・27次調査)	73
3. まとめ	78 (奥井)
IV. 総 括	
1. 「御本寺」について 現状と展望	81 (奥井)
2. 奥田家の山科本願寺での普遍的価値について	89 (馬瀬)
3. 山科本願寺の城郭史的位置付け 現状とこれから	94 (馬瀬)

図 版 目 次

- 図版 1 山科本願寺跡 23 次 遺構
- 1 23 次 1 区全景（東から）
 - 2 23 次 1 区断割り西壁断面（北東から）
- 図版 2 山科本願寺跡 23 次 遺構
- 1 23 次 2 区全景（北西から）
 - 2 23 次 2 区断割り東壁断面（北西から）
- 図版 3 山科本願寺跡 23 次 遺構
- 1 23 次 土坑 1・2 半裁状況（北東から）
 - 2 23 次 柱穴 33 断面（北西から）
 - 3 23 次 柱穴 40 断面（南から）
 - 4 23 次 土坑 42 検出状況（南から）
 - 5 23 次 調査区と現存土塁（東から）
- 図版 4 山科本願寺跡 23 次 遺構
- 1 23 次 現存土塁切り通し東側オルソ写真（西から）
 - 2 23 次 現存土塁切り通し西側オルソ写真（東から）
- 図版 5 山科本願寺跡 23 次 遺構・遺物
- 1 23 次 現存土塁切り通し西面（北東から）
 - 2 23 次 現存土塁切り通し西面遺物出土状況（東から）
 - 3 23 次 出土遺物 1（69～74）
 - 4 23 次 出土遺物 2（62）
 - 5 23 次 図版 6 土坑 42 出土遺物報告番号対応図
- 図版 6 山科本願寺跡 23 次 遺物
- 1 23 次 土坑 42 出土遺物（19～68）
- 図版 7 山科本願寺跡 24 次 遺構
- 1 24 次 1 区土塁断面 1（北西から）
 - 2 24 次 1 区土塁断面 2（北西から）
 - 3 24 次 1 区土塁基底部断面（北西から）
- 図版 8 山科本願寺跡 24 次 遺構
- 1 24 次 3 区土塁検出状況（南東から）
 - 2 24 次 3 区土塁検出状況（北西から）
 - 3 24 次 3 区土塁濠断面状況（北西から）
 - 4 24 次 2 区検出状況（北西から）

- 図版9 山科本願寺跡24次 遺構
- 1 24次 1区土塁断面オルソ写真（西から）
 - 2 24次 3区土塁断面オルソ写真（西から）
- 図版10 山科本願寺跡25次 遺構
- 1 25次 調査区遺構検出状況（北東から）
 - 2 25次 拡張区1遺構検出状況（東から）
- 図版11 山科本願寺跡25次 遺構
- 1 25次 調査区東壁及び断割り断面状況（南西から）
 - 2 25次 井戸17断面状況（東から）
- 図版12 山科本願寺跡25次 遺構
- 1 25次 調査区西壁断面状況（北東から）
 - 2 25次 調査区西壁断面状況（北東から）
 - 3 25次 調査区遺構検出状況（北東から）
 - 4 25次 整地土断面及び井戸検出状況（南東から）
 - 5 25次 井戸17北肩検出状況（南東から）
 - 6 25次 土坑8断面状況（南東から）
 - 7 25次 土坑9断面状況（南から）
 - 8 25次 拡張区2整地土検出状況（北西から）
- 図版13 山科本願寺跡27次 遺構
- 1 27次 1区全景（南から）
 - 2 27次 土坑1（北から）
 - 3 27次 土坑1断面状況（北から）
 - 4 27次 柱穴4断面状況（北から）
- 図版14 山科本願寺跡27次 遺構
- 1 27次 柱穴6断面状況（北から）
 - 2 27次 土坑7断面状況（北から）
 - 3 27次 1区西壁断面状況（南東から）
 - 4 27次 1区西壁断面状況（東から）
 - 5 27次 2区全景（北から）
- 図版15 山科本願寺跡27次 遺構
- 1 27次 2区西壁断面状況（南東から）
 - 2 27次 2区西壁断面状況（東から）
- 図版16 山科本願寺跡27次 遺構
- 1 27次 2区西側拡張区（北東から）
 - 2 27次 2区西側拡張区断面状況（北東から）

3 27次 土坑22遺物出土状況（東から）

4 27次 3区全景（北東から）

5 27次 3区西壁断面状況（南東から）

図版17 山科本願寺跡27次 遺物

1 27次 土坑7出土遺物

2 27次 土坑22出土遺物

図版18 山科本願寺跡

1 調査地と史跡指定地土塁（南西から）

2 奥田家北側残存土塁（北東から）

図版19 山科本願寺跡

1 史跡公園（北から）

2 史跡公園残存土塁と奥田家西側の残存土塁（南東から）

図版20 山科本願寺跡

1 各調査地と残存土塁（南西から）

2 23・25・27次調査地（南西から）

図版21 山科本願寺跡 絵図

1 山科古図（京都府立洛東高等学校蔵）

2 野村本願寺古屋敷之図（光照寺蔵）

図版22 山科本願寺跡 絵図

1 山科本願寺旧迹論地図（大谷大学博物館蔵）

図版23 山科本願寺跡 絵図

1 山科本願寺旧跡図（大谷大学博物館蔵）

2 山科本願寺旧迹絵図（大谷大学博物館蔵）

図版24 山科本願寺跡 絵図

1 山科本願寺旧跡図（大谷大学博物館蔵）

2 山科本願寺旧迹之図（大谷大学博物館蔵）

図版25 山科本願寺跡 絵図

1 「墳墓図」トレース図（『奥田家文書』）

2 「普請願書 明和6年（端裏書）」トレース図（『奥田家文書』）

図版26 山科本願寺跡 絵図

1 「普請願書 天明5年（小屋普請）」トレース図（『奥田家文書』）

2 「普請願書 寛政10年（土蔵普請）」トレース図（『奥田家文書』）

挿 図 目 次

1. はじめに

図1	調査地配置図（1：8,000）	1
図2	各調査地と近隣調査（1：1,200）	2
図3	23次 調査前全景（南から）	3
図4	23次 調査地と土塁の関係（南東から）	3
図5	23次 調査風景（南西から）	3
図6	23次 埋め戻し風景（北東から）	3
図7	23次 埋め戻し風景（南西から）	3
図8	23次 土塁調査風景（南西から）	3
図9	24次 重機掘削風景（南西から）	4
図10	24次 埋め戻し風景（北から）	4
図11	24次 測量風景（東から）	4
図12	24次 写真撮影風景（北西から）	4
図13	25次 調査前全景（南から）	4
図14	25次 重機掘削風景（東から）	4
図15	25次 調査風景（南東から）	5
図16	25次 写真撮影風景（東から）	5
図17	25次 測量風景（南から）	5
図18	25次 埋め戻し風景（北東から）	5
図19	27次 調査前全景（南東から）	5
図20	27次 重機掘削風景（南から）	5
図21	27次 調査風景（南西から）	5
図22	27次 調査風景（北東から）	5
図23	27次 調査風景（南西から）	6
図24	27次 測量風景（南西から）	6
図25	27次 ボランティア受入風景（北西から）	6
図26	27次 ボランティア受入風景（南西から）	6
図27	27次 ボランティア受入風景（南から）	6
図28	27次 大学集中講義風景（北東から）	6
図29	27次 埋め戻し風景（南から）	6
図30	27次 復旧完了風景（南東から）	6

II. 遺 跡

図31	調査地位置図	9
図32	山科盆地地形図及び調査地位置図（1：5,000）	9
図33	明治22年「醍醐村」大日本帝国陸地測量部假製図（1：20,000）	14
図34	昭和11年製版京都市都市計画図「山科」（1：20,000）	14
図35	昭和47年 京都府遺跡地図（山科本願寺部分抜粋）	14
図36	昭和47年 京都市遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図37	昭和49年改訂 京都市遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図38	昭和61年改訂 京都府遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図39	平成15年改訂 京都市遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図40	平成19年改訂 京都市遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図41	平成28年改訂 京都市遺跡地図（山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋）	15
図42	1次調査平面図（1：1,500）	16
図43	1・2次調査間土塁測量図：山科本願寺跡北西隅から西辺部現存土塁（1：2,500）	17
図44	1・2次調査間土塁測量図：山科本願寺跡北東隅 山科公園内現存土塁（1：2,500）	17
図45	2次調査平・断面図（1：200）	17
図46	15次調査調査区配置図（1：1,000）	20
図47	15次調査各調査区平面図（1：300）	20
図48	15次調査1区南壁断面図（1：100）	20
図49	御本寺内主要遺構配置図（1：4,000）	22
図50	立会調査71（83RT061）調査地点図（1：5,000）	23
図51	立会調査71（83RT061）I - 6区遺構確認地点図（1：1,500）	23
図52	立会調査71（83RT061）I - 6区b断面図（1：80）	23
図53	立会調査44（86RT010）調査区配置図（1：800）	24
図54	立会調査44（86RT010）平・断面図（1：100）	24
図55	立会調査55（88RT005）石組溝平面図（1：100）	25
図56	立会調査55（88RT005）東壁断面図（1：50）	25
図57	試掘調査12（89RT021）石組溝平・断面図（1：100）	26
図58	試掘調査12（89RT021）東壁断面図（1：50）	26
図59	立会調査55・試掘調査12石組溝平面図（1：500）	26
図60	試掘調査16（96S473）調査区配置図（1：1,000）	27
図61	試掘調査14（96S273）調査区配置図（1：1,200）	27
図62	試掘調査14（96S273）調査区断面図（1：50）	27
図63	試掘調査6（04S170）調査区配置図（1：1,000）	28
図64	試掘調査6（04S170）調査区断面図（1：100）	29

図65	試掘調査5 (05S208) 調査区配置図 (1:1,000)	30
図66	試掘調査5 (05S208) 各調査区北壁断面図 (1:100)	30
図67	試掘調査8 (08S103) 調査区配置図 (1:600)	30
図68	試掘調査8 (08S103) 西壁土層断面図 (1:100)	31
図69	試掘調査7 (12S342) 調査区配置図 (1:500)	31
図70	試掘調査7 (12S342) 各調査区平・断面図 (1:100)	32
図71	2次調査平面図 (1:200)	33
図72	2次調査石室出土の土師器皿の法量分布	34
図73	17次調査土坑2134出土土師器皿口径分布	34
図74	2次調査石室1・2平・断面図 (1:50)	35
図75	2次調査石室出土 墨書土師器皿 (1:2)・金箔付土師器皿 (1:4)	36
図76	既往調査位置図 (1:4,000)	37
図77	発掘調査位置図 (1:4,000)	38
図78	試掘調査位置図 (1:4,000)	40
図79	詳細分布 (立会) 調査位置図 (1:4,000)	42

Ⅲ. 発掘調査の成果

図80	23次 調査地位置図 (1:2,400)	47
図81	23次 調査区平面図 (1:80)	48
図82	23次 各遺構断面図 (1:50)	49
図83	23次 調査区断面図 (1:80)	50
図84	23・24次 調査地位置図 (1:1,200)	52
図85	23次 土塁地形測量平面図及び23・24次各調査区配置図 (1:250)	53
図86	23次 土塁東側断面図 (1:100)	54
図87	23次 土塁西側断面図 (1:100)	55
図88	24次-1区 東壁断面図 (1:50) 及び土塁東壁断面模式図 (1:300)	56
図89	24次-1区 北・南壁断面図, 24次-2区東壁断面図 (1:50)	57
図90	24次-3区 東壁断面図 (1:100)	59
図91	24次調査と平成19年度試掘調査の合成図 (1:200)	60
図92	25・27次 調査地位置図 (1:2,400)	61
図93	25次 平面図 (1:80)	62
図94	25次 断面図1 (1:50)	63
図95	25次 断面図2 (1:50)	64
図96	27次 平面図 (1:100)	66
図97	27次 調査区壁断面図1 (1:50)	67

図98	27次 調査区壁断面図2 (1:50)	68
図99	27次 各遺構断面図 (1:50)	69
図100	25・27次 調査平面図 (1:300)	69
図101	23次 出土遺物1 (1:4)	71
図102	23次 出土遺物2 (1:4)	72
図103	23次 出土遺物3 (1:4)	73
図104	24次 出土遺物 (1:4)	73
図105	25次 出土遺物 (1:4, 79・109のみ1:2)	74
図106	27次 出土遺物 (1:4)	76

IV. 総括

図107	井口氏復元案 (1:6,000)	81
図108	岡田・浜崎氏復元案 (1:15,000)	81
図109	岡田・浜崎氏復元案重ね図 (1:10,000)	82
図110	御本寺内遺構配置図 (1:3,000)	83
図111	御本寺推定範囲 (1:10,000)	84
図112	御影堂想定範囲 (1:2,000)	85
図113	山科本願寺合成公図 (1:2,000)	85
図114	奥田家【第1期】 (1:1,000)	89
図115	奥田家【第2期】 (1:1,000)	89
図116	奥田家【第3期】 (1:1,000)	90
図117	奥田家【第4期】 (1:1,000)	90
図118	奥田家【第5期】 (1:1,000)	90
図119	奥田家【第6期】 (1:1,000)	90
図120	土塁断面比較図 (1:400)	95
図121	京都市内城郭 堀の幅と深さの相関図 (左図は、聚楽第跡, 伏見城跡【指月城期・木幡山城期】のデータを除く)	96

表 目 次

II. 遺 跡

表 1	山科本願寺関連年表 1	11
表 2	山科本願寺関連年表 2	12
表 3	発掘調査一覧表	39
表 4	試掘調査一覧表	41
表 5	詳細分布（立会）調査一覧表 1	43
表 6	詳細分布（立会）調査一覧表 2	44
表 7	詳細分布（立会）調査一覧表 3	45

III. 発掘調査の成果

表 8	遺構概要表（23次駐車場部分）	47
表 9	遺構概要表（23次測量部分・24次）	52
表 10	遺構概要表（25次）	61
表 11	遺構概要表（27次）	65
表 12	遺物概要表（23次）	70
表 13	遺物概要表（24次）	73
表 14	遺物概要表（25次）	74
表 15	遺物概要表（27次）	75

I. はじめに

本報告書は、京都市科区西野山階町に所在する山科本願寺跡において、平成30年度から令和3年度まで4年にわたり実施してきた発掘調査（23～25・27次調査）の総括報告書である。

山科本願寺は文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖である蓮如上人により造営が開始された寺院である。本願寺の主要堂舎のある「御本寺」、法主の家族や坊官達の屋敷のある「内寺内」、寺に関わる職人や商人などの町衆の居住区である「外寺内」と呼ばれる寺内町が存在し、その周囲には区画や防御機能を持った土塁や堀を巡らしていたことが文献や絵図などから明らかになっている。現在でも山科中央公園内には「内寺内」と「外寺内」を区画する土塁の一部が遺存しており、平成14年（2002）に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定されている（図1）。

京都市では平成22年度から26年度にかけて、阿弥陀堂や御影堂などの主要堂舎が想定される「御本寺」内で重点的に範囲確認調査を行い、山科本願寺に伴う建物や柵、溝、井戸、園池、石風呂、焼土、整地土、さらに山科本願寺造営以前に遡る可能性のある堀を確認し、また現存する土塁の調査も行い、構築の状況を明らかにした。これらの調査成果を基に、平成28年（2016）に史跡に追加指定され、また「史跡山科本願寺跡及び山科本願寺南殿跡」と名称変更した。なお追加指定範囲については、令和3年（2021）3月に、史跡山科本願寺跡公園として仮整備を行った。このように、御本寺内の様相が明らかになりつつあるが、主要堂舎などの特定には至っていない。

このため、京都市では「御本寺」内での範囲確認調査などを継続して行い、山科本願寺の主要部の様相解明及び保護に取り組んでいる。今回報告する調査は、「御本寺」の北西部にあたり、史跡指定地の北側に位置し、平成22年度から平成26年度にかけて行われた山科本願寺の中核となる御本寺内の調査（16～21次調査）と同様に、御本寺北西部の様相把握を目的とした調査である。いずれの調査地も民有地であることから、所有者との協議を行い、調査条件の整った場所から、順次調査した。16～21次調査では、御本寺内でも宗主一族の居住施設や寺の実務施設で、一般門徒には広く解放されない空間であると考えられる遺構配置が確認できたことを受け、御影堂や阿弥陀堂などの公的空間が、これら私的

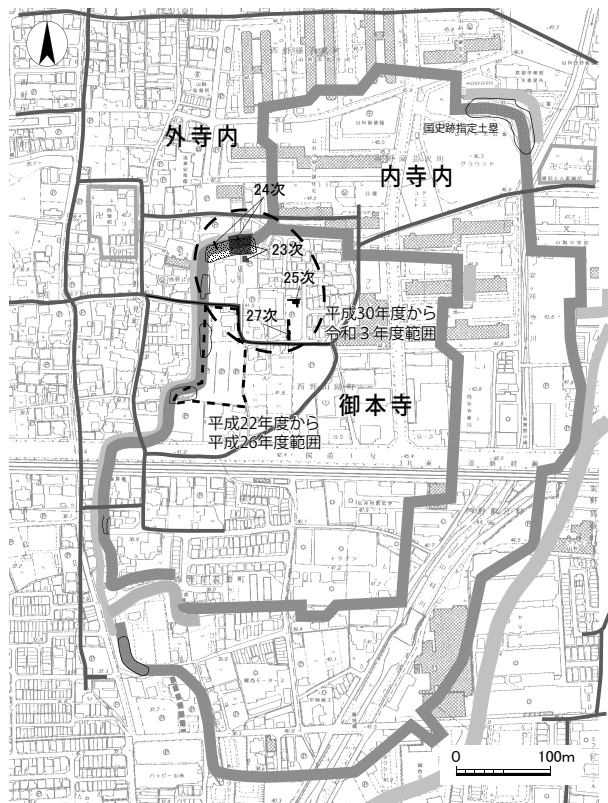


図1 調査地配置図（1：8,000）

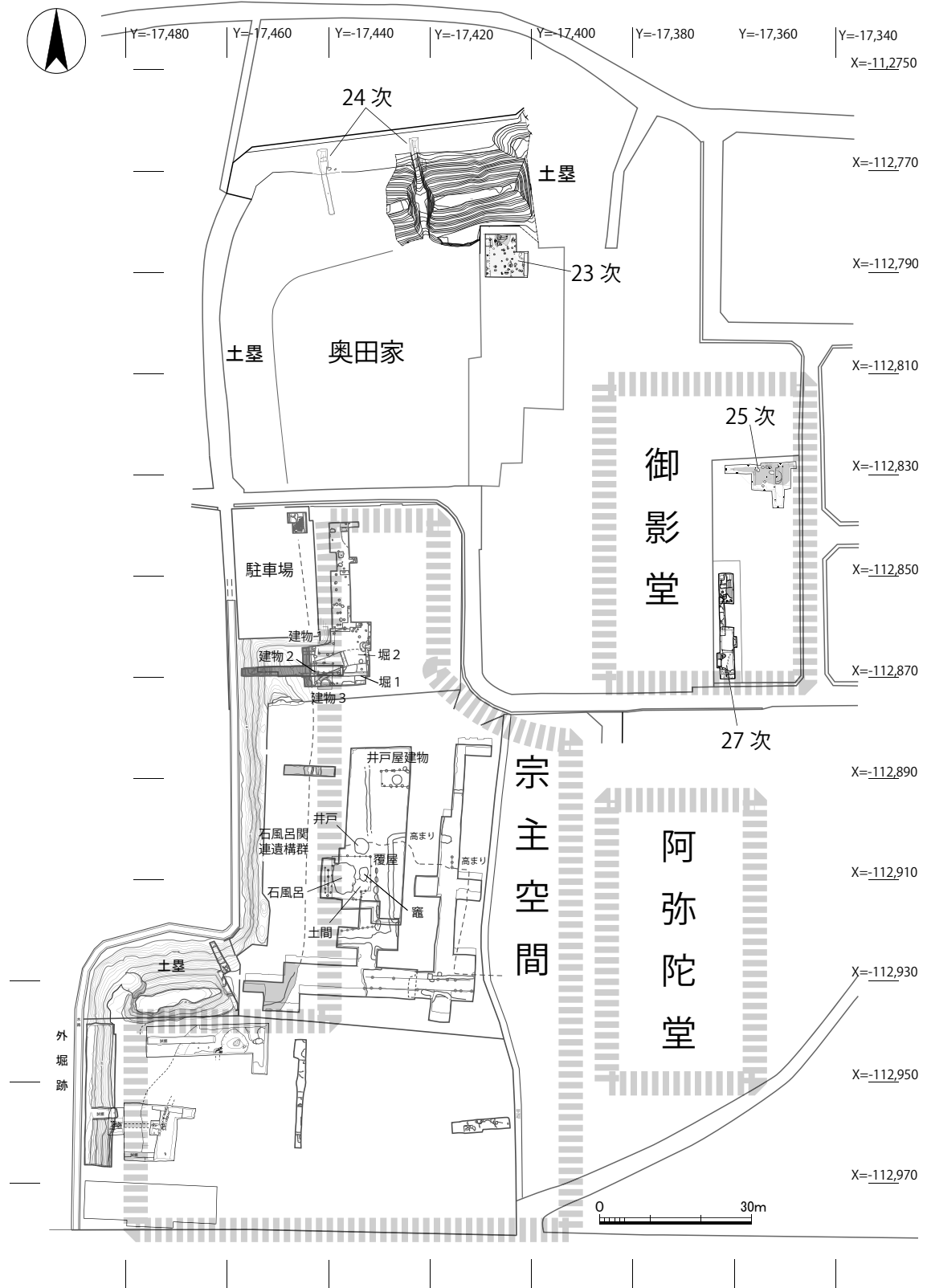


図2 各調査地と近隣調査 (1:1,200)

な空間（宗主空間）の東側に展開していると想定された（図2）。この想定を受け、平成30年度から、現状把握している宗主空間の北側の土地利用や御影堂の確認を主目的とする調査を行った。この範囲には、「景観重要建造物」（100選）に指定及び「京都を彩る建物や庭園」に選定（代1

-047号) されている奥田家住宅が現存している。特に奥田家の敷地は北辺と西辺を土塁に囲まれており、建物の主部の建築年代は元禄15年(1702)とされている。現存する土塁を取り込んだ主庭園と茅葺の主屋をはじめ上ノ蔵、下ノ蔵、正面には土塀を巡らせた重厚な長屋門を備えた造りになっている。山科本願寺を囲む土塁は、近代の開発によりその姿を消してきたが、奥田家の敷地内では代々、継続的に管理されていたことから破壊を免れ、その姿を良好に留めている。この現存する御本寺北西部の屈曲部の土塁の現況及び構造の把握も調査目的の一つである。

23次調査では、宗主空間の北側の土地利用及び土塁の構造把握を目的とした。調査区は駐車場



図3 23次 調査前全景(南から)



図4 23次 調査地と土塁の関係(南東から)



図5 23次 調査風景(南西から)



図6 23次 埋め戻し風景(北東から)



図7 23次 埋め戻し風景(南西から)



図8 23次 土塁調査風景(南西から)



図9 24次 重機掘削風景（南西から）



図10 24次 埋め戻し風景（北から）



図11 24次 測量風景（東から）



図12 24次 写真撮影風景（北西から）



図13 25次 調査前全景（南から）



図14 25次 重機掘削風景（東から）



図15 25次 調査風景（南東から）



図16 25次 写真撮影風景（東から）



図17 25次 測量風景（南から）



図18 25次 埋め戻し風景（北東から）



図19 27次 調査前全景（南東から）



図20 27次 重機掘削風景（南から）



図21 27次 調査風景（南西から）



図22 27次 調査風景（北東から）



図23 27次 調査風景（南西から）



図24 27次 測量風景（南西から）



図25 27次 ボランティア受入風景（北西から）



図26 27次 ボランティア受入風景（南西から）



図27 27次 ボランティア受入風景（南から）



図28 27次 大学集中講義風景（北東から）



図29 27次 埋め戻し風景（南から）



図30 27次 復旧完了風景（南東から）

部分と土塁部分に分かれる（図2）。調査の結果、駐車場部分では山科本願寺期の柵列や土坑のほか、山科本願寺造営以前に遡る可能性のある遺構を確認した。土塁部分では地形測量と断面観察を行い、土塁の現状記録と構築方法を確認した。また土塁の構築土の上位層からは山科本願寺期でも後半の遺物を確認している。

24次調査では、23次調査に引き続き土塁の様相を明らかにするため、土塁北側の裾及び外濠南肩の調査を行った（図2）。なお、同調査地北隣接地で行われた試掘調査成果（表4-2、-3）を検討し、土塁及外堀の規模を明らかにすることができた。また既存調査成果も踏まえ、国道一号線より北側の御本寺西側の御本寺と外寺内が接する土塁の状況を把握することができた。

25次調査は、現在の御影堂想定範囲（図2）の東辺中央部に調査区を設定した。この想定範囲内での発掘調査は今回が初の事例となる。しかし御影堂と考えられるような建物に関わる明確な痕跡は確認できず、山科本願寺期の整地土や土坑、井戸などを確認した。

27次調査は、25次調査に引き続き御影堂想定範囲（図2）の調査を行った。今回は御影堂南辺中央部に調査区を設定した。江戸時代から近代の土坑群を確認したのみで、御影堂と考えられるような建物に関わる明確な痕跡や山科本願寺に関わる遺構は確認することはできなかった。

今回報告する一連の調査回数（当課の調査番号）・調査地・調査期間・調査面積は下記の通りである。

23次調査（18A007）：山科区西野山階町 37-2, 37- 6 地内	2018年12月3日～27日	717 m ²
		※（71 m ² +土塁部分地形測量 646 m ² ）
24次調査（19A008）：山科区西野山階町 36-2, 38-1, 51	2019年12月9日～19日	30 m ²
25次調査（20A001）：山科区西野山階町 44	2020年6月1日～30日	64 m ²
27次調査（21A007）：山科区西野山階町 44	2021年8月30日～9月29日	56 m ²

近隣住民向けの説明会や一般向けの現地説明会については、調査地が狭小で安全対策がとれない、天候不順や新型コロナウイルス感染拡大予防などの要因から過去3年間、開催することができなかった。このため各調査期間中は、調査速報を現場事務所や現場の安全対策用フェンスなどに掲示した。また随時、現地で遺構の説明や出土遺物に触れてもらう機会を個別に設けた。この他、自治会主催の集まりなどに出向き、スライドを用いて報告するなど、周知に努めた。令和3年度は新型コロナウイルス感染拡大防止措置を取りながら、インターンシップ2名の受け入れや大学集中講義の学外授業の受け入れなども行った。

整理作業は当該年度ごとに行い、当該年度及び次年度の『京都市内遺跡発掘調査報告』にその概要を掲載している。今回の総括報告書を作製するにあたり、23～25次調査を主目的ごとに区分し報告した。結果、遺構名などに特段の混乱は認められないため、遺跡番号、遺構種別表記などの再付与は行わないこととした。御影堂想定範囲である25次調査、27次調査の遺物報告時に

は混乱を避けるため、次数+遺構名を付与した。遺物の報告番号については、既存報告を踏襲せずに、振りなおした。23～25次調査までの既報告内容は以下の報告書を参照されたい。なお、27次調査については、令和3年度に調査を実施したため、本報告以外の報告はない。

23次調査：「山科本願寺跡（23次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局，2020。

24次調査：「山科本願寺跡（24・25次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局，2021。

25次調査：「山科本願寺跡（24・25次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局，2021。

現地調査および整理作業に際しては多くの方々から御指導・御教示，ご協力をいただいた。記して深謝申し上げます。

一瀬和夫（京都橘大学），伊藤淳史（京都大学），大谷大学博物館，奥田高文，奥田富士子，奥田真知子，京都府立洛東高等学校，光照寺，千葉 豊（京都大学），辻 康男（株式会社パレオ・ラボ），中嶋恵二（西野学区自治連合会長），西村佳子，平尾政幸（関西文化財調査会）

（敬称略，五十音順）

Ⅱ. 遺 跡

1. 地理的環境

調査地は京都府京都市山科区西野山階町に所在する。山科区は京都市の東南部にあたり、京都盆地とは東山山系を挟んで東側に位置する山科盆地の主要部を占める。山科盆地は西側を東山・桃山丘陵、北側を比叡山南部の如意ヶ嶽、東側を醍醐山地に囲まれ、南側に開いた地形である。盆地内には、北東部から中央に向かって、音羽川、四ノ宮川、安祥寺川が流れ、複合扇状地が形成されている。これらすべての河川が盆地南部で合流した後、山科川として南下する。盆地西側にある旧安祥寺川の流域や山科川の兩岸一帯は極めて低湿な平野が広がっており、北東部が高く南が低い、高低差のある盆地であり、山科盆地は京都盆地を縮小したかのような構造であるといえる。

調査地は、山科盆地の中央部やや西寄りに位置し、四ノ宮川、音羽川、安祥寺川などにより形成された扇状地の南西端にあたる。北側には京と東国を結ぶ旧東海道（現三条通）があり、また東海道から分岐する奈良街道や渋谷街道が通る交通の要衝であった。遺跡の東を限る山科川は醍醐、六地藏を経て、宇治川と合流する。そして、宇治川・木津川・桂川は合流し、淀川となり、大阪湾にまで通じ、水運の面からも利便性の高い立地であるといえる。

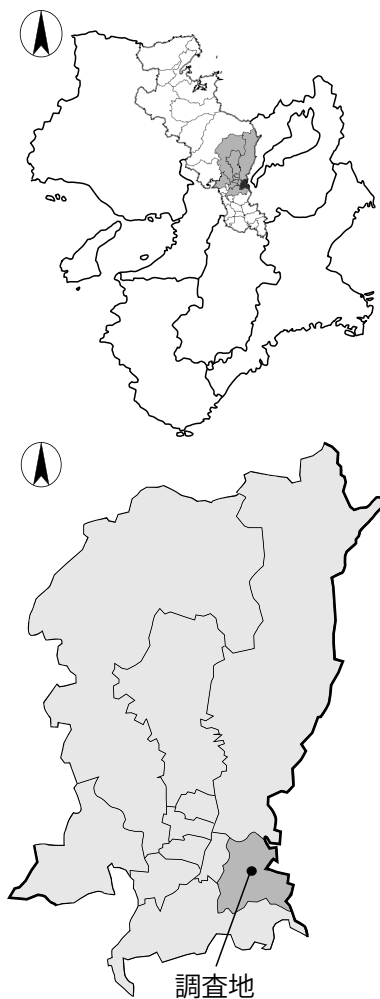


図31 調査地位置図

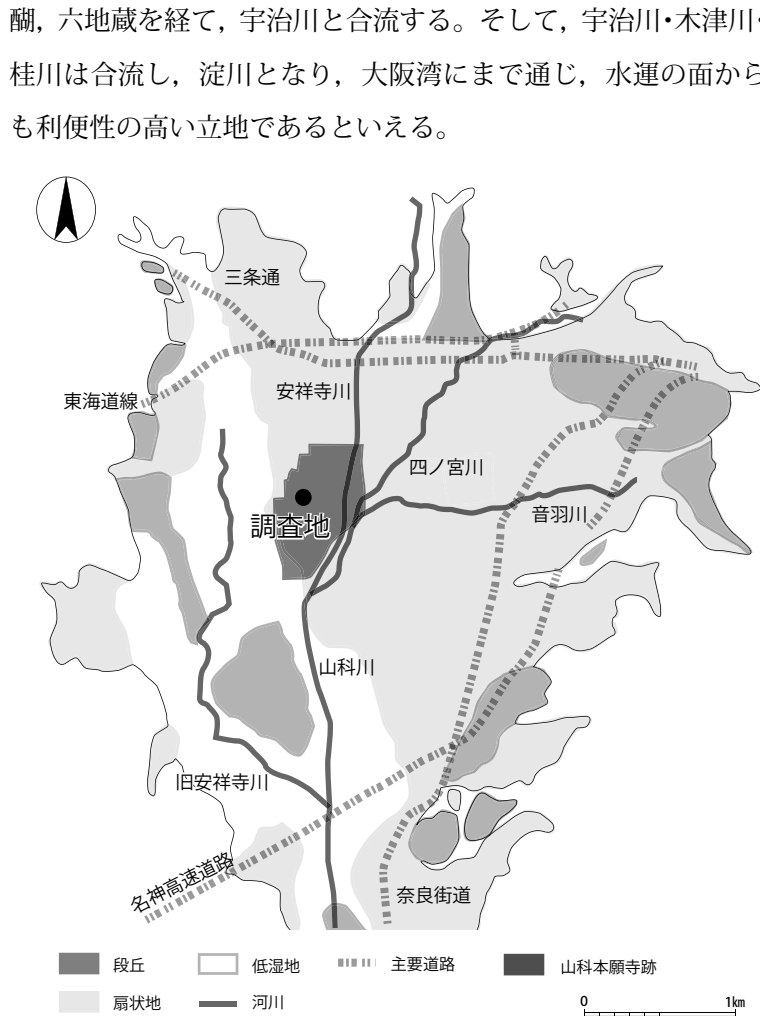


図32 山科盆地地形図及び調査地位置図（1：5,000）

2. 歴史的環境

山科本願寺造営前

山科盆地には、山科本願寺成立以前にも数多くの遺跡が確認されている。古くは、盆地南側の山科川と旧安祥寺川に挟まれた中臣遺跡で旧石器時代に遡るナイフ形石器や石核、剥片、縄文時代早期の押型文土器が確認されているが、その密度は希薄である。縄文時代晩期になると、掘立柱建物や土器棺墓が確認でき、晩期の土器棺墓と弥生時代前期の土器も確認される。また盆地北側に位置する安朱遺跡でも土器棺墓を確認することができる。

弥生時代中期には中臣遺跡で方形周溝墓がつくられるようになり、後期から古墳時代初頭にかけて遺跡の規模が拡大し、多数の竪穴建物や土器が確認されている。また中臣遺跡の北側、山科本願寺跡の南側に重複する左義長町遺跡でも弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物や土坑が確認されている。古墳時代前期から中期にかけては遺跡の存在が希薄であるが、古墳時代後期から飛鳥時代にかけては再び中臣遺跡で竪穴建物の数が増加する。中期後半には中臣遺跡で木棺直葬の方墳が築造され、その後、後期には盆地西側に位置する東山丘陵やその山裾に稲荷山古墳や中鳥井古墳、旧安祥寺川と山科川にはさまれた段丘の南西斜面地に中臣十三塚や宮道古墓（宮道朝臣列子墓）などの群集墳が築かれ、盆地東側の山裾にも大宅古墳、向山古墳、醍醐古墳群などの群集墳が築かれている。山科盆地内では、これまで中臣遺跡を代表するように、生活の場として山科川右岸での土地利用が活発に行われ、古墳時代後期には山裾に墓域が形成され始めたことがわかる。7世紀半ばには山科という名称は「山科野」などとして史料にみられ、遊獵の地として示されており、まだまだ未開発地が多かったことがうかがえる。奈良時代には奈良街道に沿うように遺跡が形成され、大塚遺跡では集落、大宅廃寺では金堂や講堂が確認される。

平安時代になると東海道や東山道の要所となり、安祥寺下寺、勸修寺、随心院、醍醐寺などの寺院が次々に造営されるほか、中臣遺跡では引き続き集落が形成される。特に寛平8年（896）に没した藤原胤子を追悼して建立された勸修寺は、山科盆地内に多くの寺領を有する大寺院となり、延喜5年（905）には定額寺となっている。平安時代末期に後白河法皇が山科新御所を営んだことを契機に、莊園支配の本所は院となった。鎌倉時代には、冷泉教成（後の山科家）に伝領され、山科小野庄となっている。これを理由に、山科家は山科一帯の領主的な立場を主張するものの、南北朝期には醍醐寺三宝院が莊園内の一部の地頭職を得ている。ただ、山科の地は、「山科七郷」と呼ばれる農民集団が自治する土地である。その生活は、農耕が主であるが、「京」近郊である立地を生かし、特産物をはじめとする商業も発達し、これにより農民が力を蓄えることが可能となり、郷が成立したと推測できる。明確な時期は不明であるが、14世紀中頃の「園城寺文書」には「山科七郷」という名前を確認することができ、この頃には既に「郷」が確立していたことがわかる。一般的な農民として耕作に従事するとともに、領主であった山科家が朝廷と密接な関係であったことから、朝廷警護にも従事していた武装農民でもあったとされる。この山科七郷に関わる遺跡範囲は現集落と重複していると想定できるため、発掘調査などの考古学的成果に乏し

表1 山科本願寺関連年表1

応永22年	(1415)		七世存如の嫡子として蓮如、生まれる。
長祿元年	(1457)		蓮如、本願寺八世宗主となる。
文明3年	(1471)		蓮如、越前吉崎に坊舎を構える。
7年	(1475)		蓮如、越前吉崎御坊を去る。
9年	(1477)		応仁・文明の乱終息。
10年	(1478)	1月	蓮如、野村柴の庵に居す。馬屋新造。【山科本願寺造営開始】 (この年、大津近松にて越年)
11年	(1479)	1月	整地と作庭を始める。
		3月	向所を新造。
		4月	堺の古坊を移し、寝殿をつくりはじめる。
		8月	庭できる。
		12月	御影堂建設用材柱50余本など、山科につく。
12年	(1480)	1月	三帖敷の小御堂を作る。
		2月	御影堂造作事始め。
		3月	御影堂、棟上の祝。
			ひわだ大工をよんで御影堂の檜皮葺はじめる。
		8月	仮仏壇を設けて、絵像の御影をうつす。 整地。
		10月	日野富子、本願寺参詣。
		11月	大津にあった根本御影を野村にうつし、山科ではじめて報恩講を催す。
		12月	吉野で阿弥陀堂用大柱20余本をあつらえる。
13年	(1481)	1月	寝殿の大門柱立。
		2月	阿弥陀堂の事始め。
		4月	阿弥陀堂棟上。
		6月	仮仏壇をつくって、本尊をすえる。
14年	(1482)	1月	御影堂大門の事始め。 阿弥陀堂の橋隠の柱を用意。 阿弥陀堂の四方の柱も立つ。 大門の地形をならす。 四壁の内に排水用の小堀を南北に掘る。 門前の両所に橋をかける。
		4月	冬のたき火所だった四門の小棟を改築。
		5月	寝殿の天井をはる。
		6月	阿弥陀堂の仏壇をつくりなおす。
		7月	仏壇に奈良塗師をやとい、ぬらせる。
		9月	仏壇ぬり終る。
15年	(1483)	5月	河内誉田の野中之馬という瓦師をよんで、大葺屋をつくり、 西山の土で瓦を焼く。
		8月	阿弥陀堂に瓦を葺き終わる。
長享2年	(1488)		加賀一向一揆おこる。
延徳元年	(1489)		山科南殿を造営する。 実如、九世宗主となる。蓮如、隠居。
明応6年	(1497)		大坂石山坊舎完成。
8年	(1499)	2月	蓮如大坂から山科南殿に戻る。御影堂参詣。御堂周囲の土居を見学。
		3月25日	蓮如没す、85歳。
永正元年	(1504)		將軍足利義澄が本願寺へ立ち寄る。
永正13年	(1516)		証如誕生。
永正14年	(1517)		山科本願寺より山(小山)へ新道造り始める。

表2 山科本願寺関連年表2

永正17年 (1520)		本願寺の庭や座敷が美麗超過と評される。
大永5年 (1525)		九世宗主実如没す。証如、十世宗主となる。
天文元年 (1532)	8月24日	証如が畠山義宣を攻め、堺で自害させる。 法華宗徒や六角氏などの攻撃により焼亡。【山科本願寺陥落】
2年 (1533)		証如、石山坊舎を本寺と定める。本願寺大坂へ移転。
5年 (1536)	3月 7月	大工棟梁、山科柱立の儀目出として千疋来。 天文法華の乱。
12年 (1543)		顕如、誕生。
元亀元年 (1570)		織田信長との石山合戦開始。
天正8年 (1580)		本願寺顕如、信長と和睦。石山本願寺退去。 その後、紀伊鷲森・和泉貝塚・大坂天満と移転を繰り返す。
14年 (1586)		豊臣秀吉の朱印状をもって山科に寺領を回復する。
19年 (1591)		本願寺、京都七条堀川（現西本願寺）へ移転。
慶長7年 (1602)		東本願寺別立。このときから東西本願寺となる。
享保年間 (1716~1736)		東西本願寺がそれぞれ山科別院を建立。

(西川幸治「都市史の中の中世寺院」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集 1985年を一部改変)
く、鎌倉時代以降の様相は明らかでない。その他、鎌倉時代は中臣遺跡や安朱遺跡で小規模な集落が確認できる程度である。また室町時代に入ると、文献上で確認される四手井城跡が存在する。

山科本願寺期

山科本願寺は、文明10年(1478)に浄土真宗中興の祖・蓮如上人によって造営が開始された寺院である。蓮如は文明7年(1475)に越前国吉崎御坊から若狭国小浜、丹波、摂津をへて、河内国出口に移り、その後文明10年(1478)正月に河内国出口を去り、山城国山科郷の野村に移り住んだ後、山科本願寺造営に着手したとされる。山科七郷の一つである野村の地を本願寺に提供したのは、上層農民であった海老名五郎左衛門(法名は浄乗)であるとされ、同氏は、現在の西宗寺も建立したとされている。ただ、本願寺造営の選地に関しては、金森善従(道西)が野村の方角をさして、この方向に「仏法が開ける」と予言したという逸話が残っているものの、明らかではない。

造営に関しては、文明10年(1478)、和泉国堺にあった坊舎の材木を取り寄せ、厩を建設するのが最初とされる。翌11年(1479)に堺の古い坊舎の材木を取り寄せ寝殿を造り始め、築地なども造っている。文明12年(1480)には門徒から寄進された大和国吉野の材木を使用し、「御影堂」の棟上、翌13年(1481)には「阿弥陀堂」の棟上が行われ、文明15年(1483)までに「向所」「寝殿」などを含めた主要堂舎が揃ったと考えられる。御影堂が完成する直前の八月には天皇から香箱が寄進され(『御湯殿上日記』)、さらに將軍足利義尚の母である日野富子が本願寺に参詣するなど、山科本願寺は内外に周知されていた¹⁾。主要堂舎のある「御本寺」を中心に、有力末寺の坊舎が置かれた「内寺内」、門徒の居住区などがある「外寺内」が広がる3つの郭からなる寺内町が形成され、それぞれの郭を土塁と濠で囲み、要所には「折れ」を設け、自然河川を利用して防御施設とした環濠城塞都市の一面をもつ。その範囲は南北約1km、東西約0.8kmにもおよぶ。

また延徳元年（1489）には、山科本願寺から東へ約1 kmの場所に蓮如の隠居所である山科本願寺南殿も造営された。蓮如は明応8年（1499）に南殿で没している。京が応仁・文明の乱で荒廃し、まだ混乱が残るなかにも関わらず、『二水記』によると「富貴の栄うるを誇り、もっとも寺中广大無辺、莊嚴ただ仏国のごとし」と記されるほど大いに繁栄していたことがわかる²⁾。しかし、天文元年（1532）、細川晴元率いる法華宗徒、管領細川晴元の配下の近江守護職六角定頼などの連合軍による攻撃により、一夜にして焼亡した。その様子は、『経厚法印日記』に「寺中寺外一家ものこさず消失しおわんぬ」と記されている。

山科本願寺焼亡後

その後、石山本願寺へ教団の主体が移るものの、領主である三宝院に土地税を納め、山科へ戻るため人を派遣するなどし、回復を試みている。天正14年（1586）には、20石とわずかではある³⁾が豊臣秀吉の命により山科に寺領を回復するものの、本願寺が山科に戻ることはなかった。天正18年（1590）には山科郷のおよそ半分とみられる地域が豊臣秀吉の直轄領とされている。慶長6年（1601）には徳川家康により山科が禁裏御料地になるものの、秀吉に与えられた20石は引き続き本願寺領として認められていたが、慶安3年（1650）にはその場所が把握できないほど、管理が不十分な状況であった⁴⁾。江戸時代の様子をうかがい知る資料は少なく、農村であったと考えられる。しかし慶長3年（1598）に秀吉が亡くなった後の五奉行連署状に「鉄砲目あて放事、・・・山科本願寺古屋敷にて・・・」とあり、鉄砲射撃の場として利用されていたことが窺える。また元治元年（1864）年頃に幕末の政情不安から、禁裏御守衛総督の一橋慶喜は京都周辺の練兵訓練を計画した際、操練場として検分と調査の対象としたこと⁵⁾などから、山科本願寺の中心部とその他では利用状況が異なる可能性があるものの、廃絶後から幕末までこの土地が、中央政権下に置かれていたことには変わらない。

明治改元後の明治2年（1869）に、山科本願寺跡地の開墾が始まる。明治28年（1895）頃から山科地域には中規模工場が建ち始め、大正6年（1917）にはネジ製造の山科精工、大正11年（1923）には絹製品の製造加工の鐘紡絹糸工場などの大規模工場、翌年には、本格的な近代工場である鐘紡山科製糸工場が建設された。昭和に入ると急速に近代化が加速する。昭和2年（1927）には鐘紡山科工場の拡張に伴い、遺跡北側の土塁や外寺内の一部が消滅することとなった。昭和39年（1964）には東海道新幹線が開通し、これに併走する国道1号線（五条バイパス）が昭和42年（1967）に開通した。これにより山科本願寺は遺跡の中心部を南北に分断されることとなる。昭和45年（1970）の鐘紡山科工場の長浜への移転後、その広大な跡地には市営住宅の建設が始まり、山科中央公園や郵便局なども建設される。これらの再開発に伴い、山科本願寺内での本格的な発掘調査が進んでいくこととなる。昭和47年（1972）3月には京都府教育委員会により初の遺跡地図が刊行され、周知の埋蔵文化財包蔵地としての山科本願寺跡の範囲が示され、同年11月には京都市も京都市遺跡地図台帳を刊行し、同様に遺跡の周知に努めている（図35・36）⁶⁾。昭和49年（1974）には山科本願寺跡での初の本格的な発掘調査が行われ、同年の遺跡地図改訂

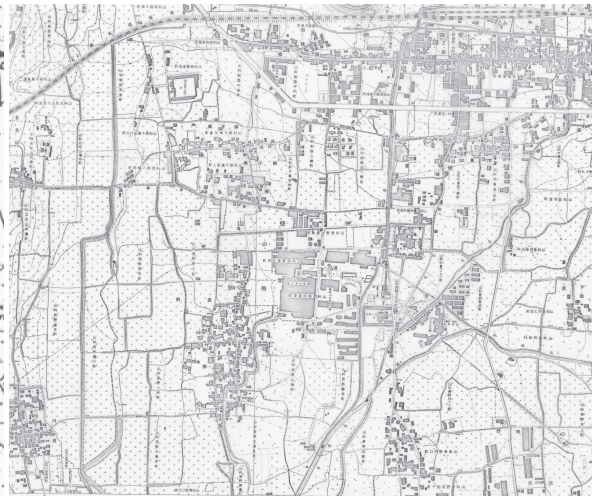
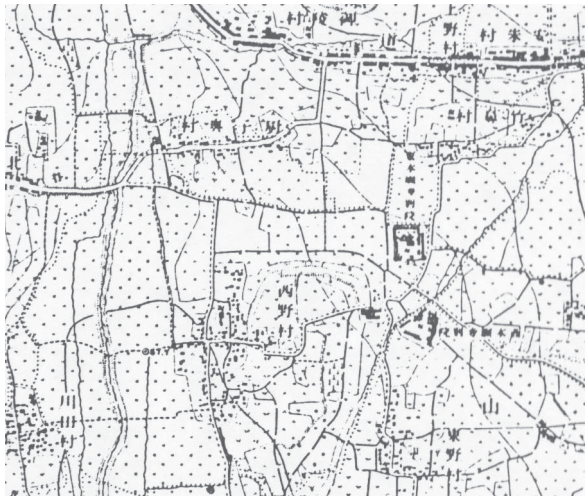


図33 明治22年「醍醐村」大日本帝国陸地測量部製図（1：20,000） 図34 昭和11年製版京都市都市計画図「山科」（1：20,000）

の際に、遺跡範囲がより詳細な範囲に修正されるなど、遺跡の理解が進む（図37）⁷⁾。遺跡の周知を図る中でも、遺跡周辺の市街地化は急速に進み、昭和51年（1976）3月の京都市文化観光資源調査会においては、山科本願寺の重要性と開発行為に伴う消失が懸念されている⁸⁾。一方で、開発行為とともに調査が進み、遺跡範囲の修正も行われている（図38）⁹⁾。平成9年（1997）から始まった大規模開発に伴う発掘調査を契機に、関西の文献史学、考古学、真宗史、城郭史、歴史地理などの研究者が集まる「山科本願寺・寺内町の歴史を学ぶ会」が発足し、また、市民による「山科本願寺・寺内町を考える市民の会」が結成され、山科本願寺・寺内町の多角的な研究・報告が積極的に行われるなど、遺跡保全への関心が高まった¹⁰⁾。契機となった発掘調査を含む多数の調査成果から山科本願寺跡の新たな知見を得ることができ、研究は進んだ一方で、土塁や濠の一部は消滅したが、現在も、国道1号線を挟んだ北側、南側で土塁や濠の一部が山科本願寺の痕跡として残っている。このうち、山科中央公園内に残る「内寺内」と「外寺内」を限る土塁と南殿跡が平成14年（2002）に「山科本願寺南殿跡附山科本願寺土塁跡」として国史跡に指定され（図39）¹¹⁾、平成28年にはこれまでの発掘調査成果を基に、「御本寺」と呼ばれる本願寺の宗主空間の南側にあたる範囲の追加指定とともに、「山科本願寺跡及び南殿跡」に名称変更を行った（図41）¹²⁾。なお追加指定範囲については、令和3年（2021）3月に、都市公園（歴史公園）として仮整備を行った。

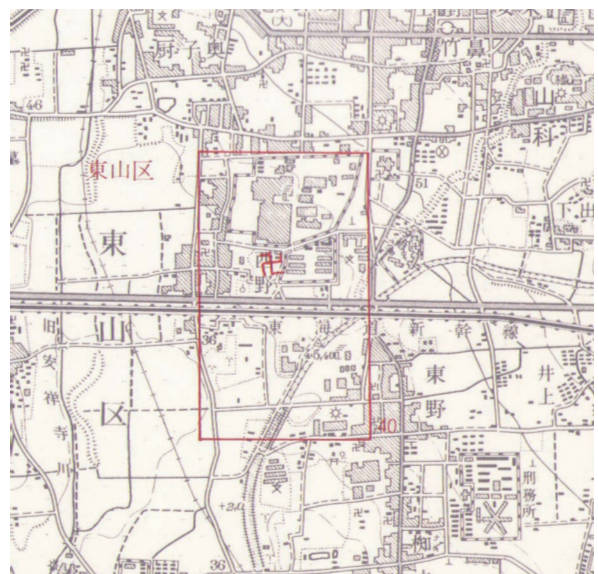


図35 昭和47年 京都府遺跡地図（山科本願寺跡部分抜粋）

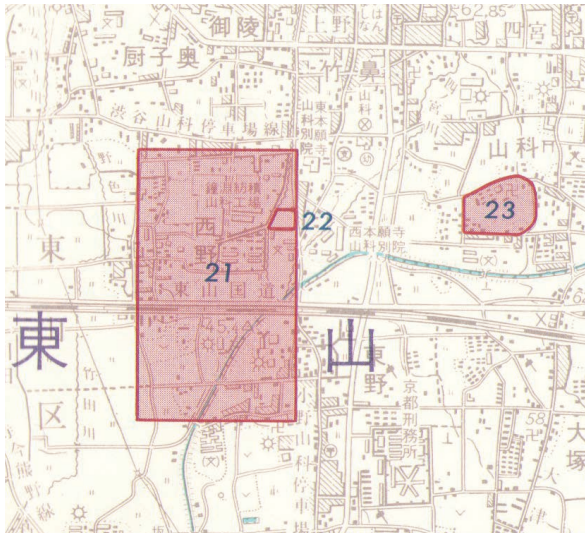


図36 昭和47年 京都市遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

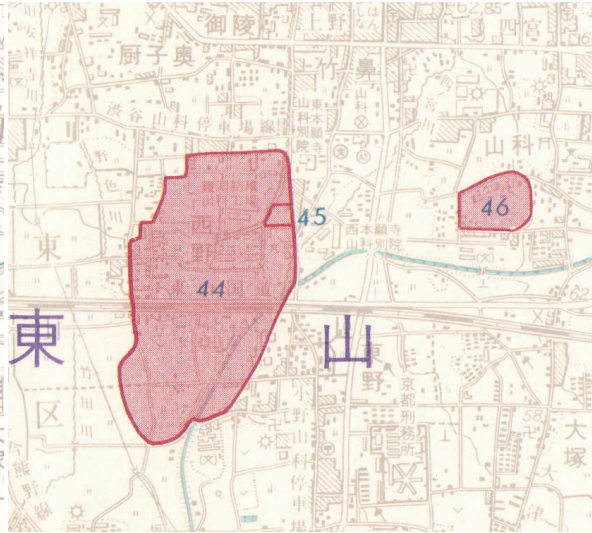


図37 昭和49年改訂 京都市遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

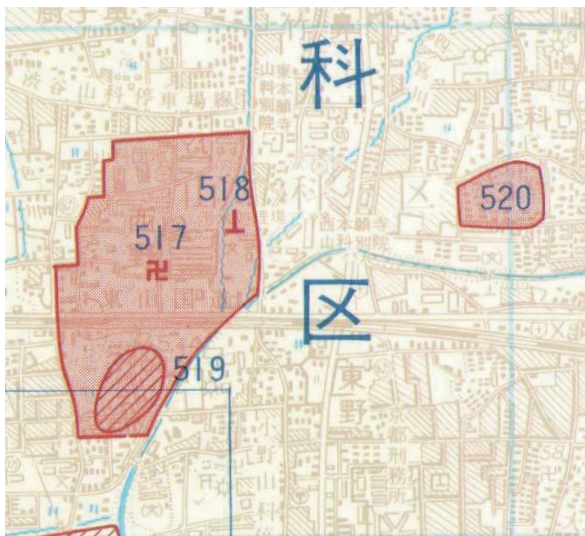


図38 昭和61年改訂 京都府遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

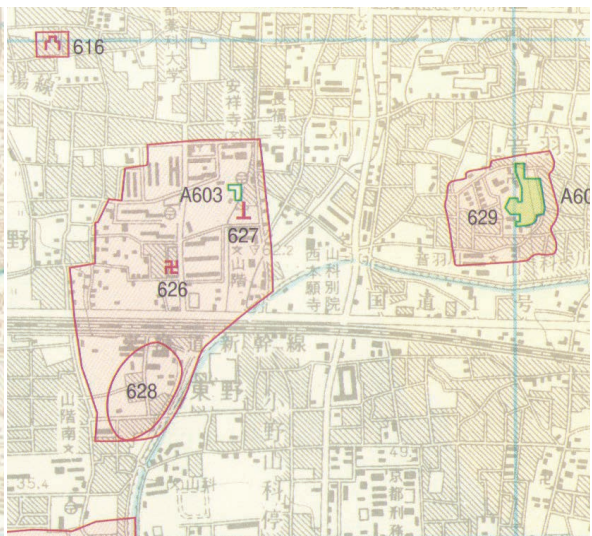


図39 平成15年改訂 京都市遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

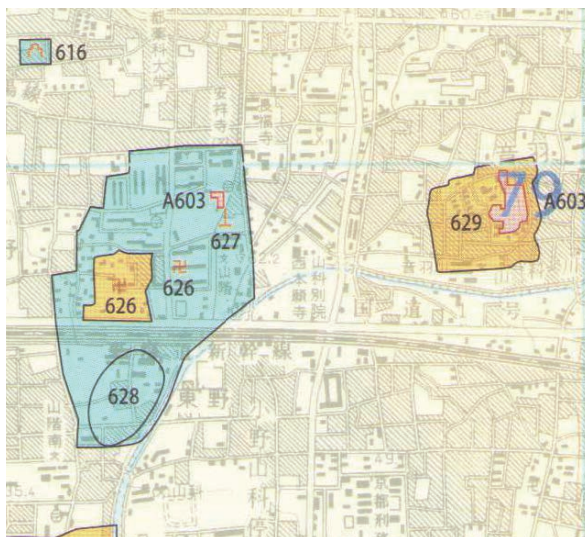


図40 平成19年改訂 京都市遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

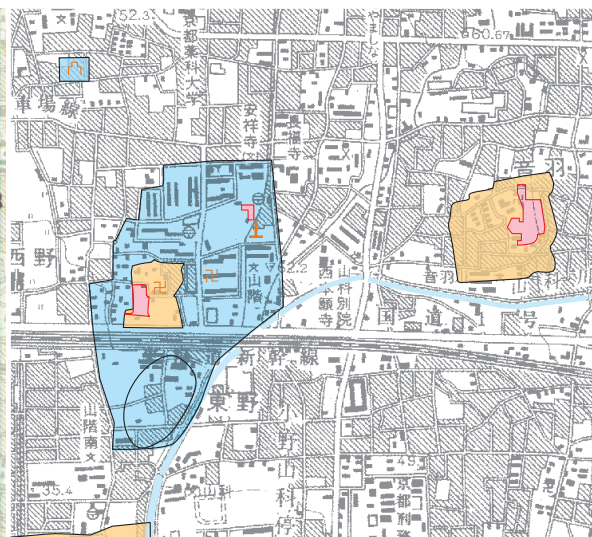


図41 平成28年改訂 京都市遺跡地図
(山科本願寺跡・山科本願寺南殿跡部分抜粋)

3. 周辺の調査

山科本願寺跡では、今回の調査を含めて27次の発掘調査と多数の試掘調査、詳細分布調査（以下、立会調査）が行われ、山科本願寺に関わる遺構や遺物が見つかった。以下では、発掘調査を軸に顕著な遺構が認められた試掘調査及び立会調査も踏まえ、これまでの調査の流れを述べる。その後、特筆すべき試掘調査及び立会調査については、概要を記す。なお、山科本願寺跡におけるこれまでの調査（2022.3報告書刊行分まで）については、概要、出典を含め、表3～7および図76～79にて示し、本文中の調査名についても、同表にて示す調査名を用いて表記している。参照されたい。

初めて山科本願寺跡が取り上げられたのは、大正15年（1926）に発行された『京都府史蹟勝地調査會報告 第七冊』の中の「第五 山科本願寺及其遺跡」での報告である¹³⁾。ここでは文献史料や古地図の検討のほか、踏査による地形把握と記録が行われている。この報告書は、大正6年（1917）に史蹟名勝及び天然記念物の保存のため、京都府知事の唱導により発足した調査会によるものであり、当時から山科本願寺跡を注視していたことが窺える。その後、昭和37年（1962）には、新幹線布設の工事中、初めての考古学的調査が行われた（立会調査49）。この調査では、石積の溝渠や道路状遺構、焼土や焼瓦、室町時代の土師器皿などが確認されている。当時厳しい

条件下での調査であったが、山科本願寺跡の遺跡を東西に横断する形で調査が行われた。瓦の出土状況から阿弥陀堂の配置想定がなされるなど積極的な考察が認められる。昭和45年（1970）には井口尚輔氏による地表面観察を主に遺構の遺存状況の調査がなされ、表採遺物の報告のほか、山科本願寺の形態や規模について復元的考察が行われている¹⁴⁾。

その後、鐘紡絹糸跡地での市営住宅建設工事に伴い、昭和48年（1973）、山科寺内町遺跡調査団による本格的な発掘調査（1次）が行われた。土塁や濠、切り通し、石列、鍛冶場遺構が確認された。翌年（1974）にはガソリンスタン

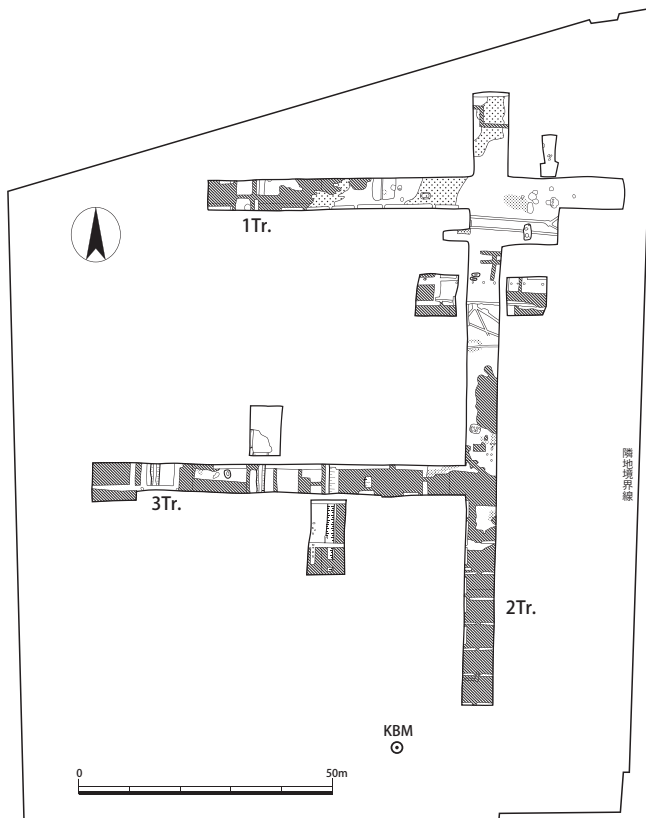


図42 1次調査平面図（1：1,500）

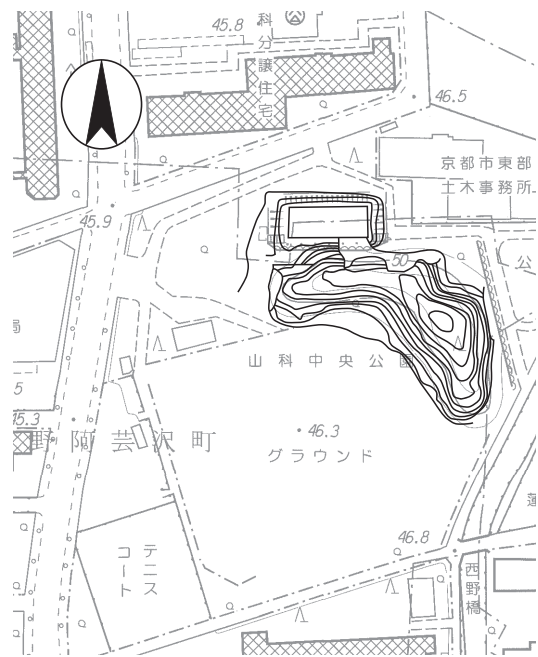
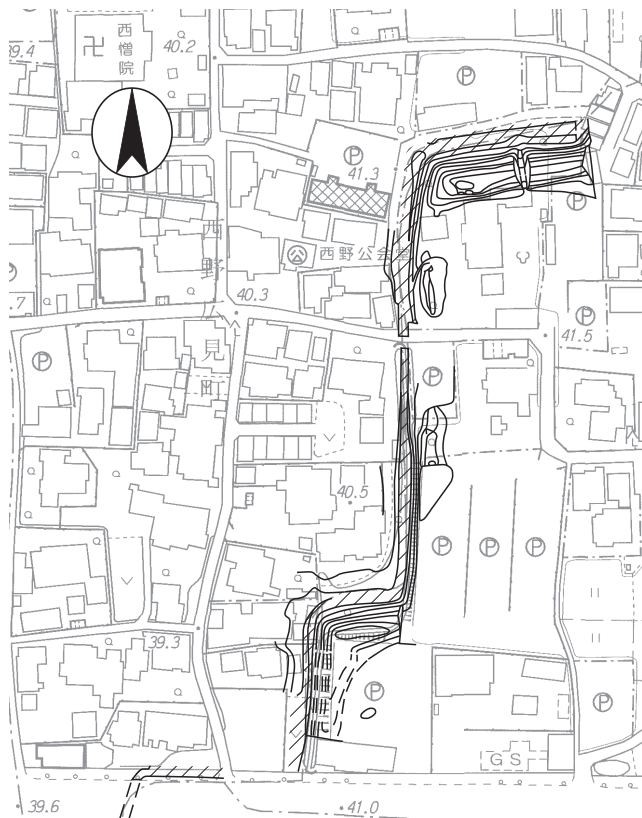


図44 1・2次調査間土塁測量図：山科本願寺跡北東隅 山科公園内現存土塁 (1:2,500)

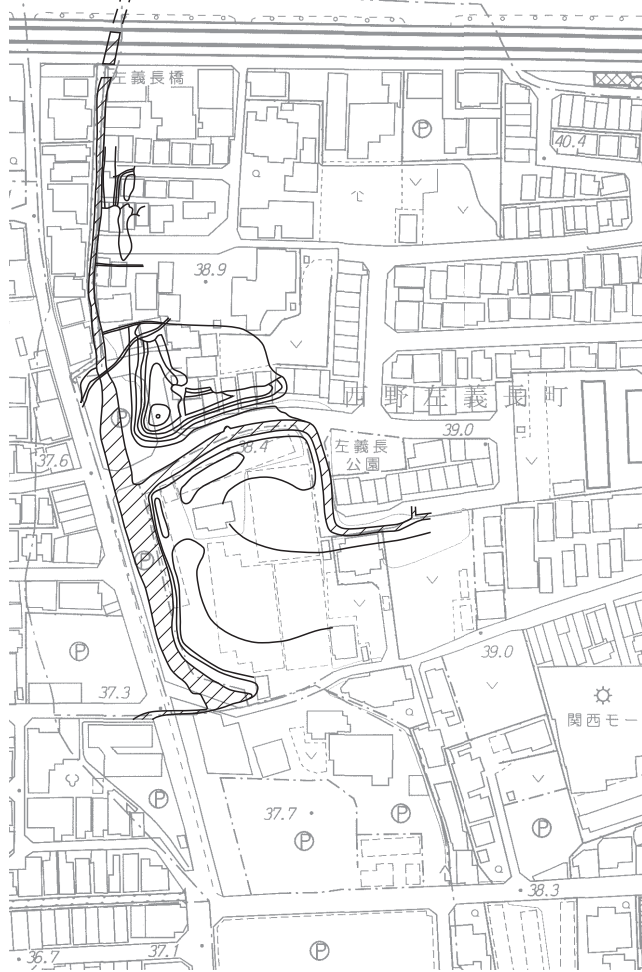


図43 1・2次調査間土塁測量図：山科本願寺跡北西隅から西辺部現存土塁 (1:2,500)

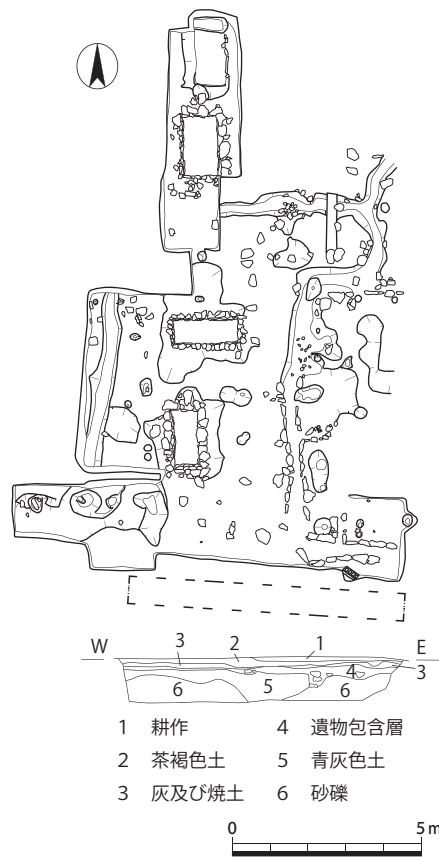


図45 2次調査平・断面図 (1:200)

ド建設に伴う発掘調査（2次）が行われ、山科本願寺焼亡時の焼土層や溝、石室群が確認された。石室からは多量の土師器皿が出土しており、その上面に焼土や炭化物が覆っていたことから、山科本願寺焼亡時の貴重な基準資料となった。また1次調査と2次調査の間には、同調査会により、当時現存していた3か所の土塁と環濠跡の地形測量調査が行われている（図43・44）¹⁵⁾。昭和51年（1976）11月に3次調査（安祥寺中学校校舎新築工事）、昭和52年（1977）に4次調査（山階小学校校舎改築工事）、昭和53年（1978）に5次調査（山科中央公園内防火貯水タンク建設）と、たて続けに行われたが、目立った遺構は確認できなかった。この他、橘女子大学考古学研究会により山科本願寺跡全体に及ぶ現状調査がなされている¹⁶⁾。

この後、昭和59年（1984）に行われた下水道工事に伴う広域調査（後述：立会調査71（83RT061））の成果により、現・西野道より以東、現・離宮道より以北に山科本願寺の寺域が広がっていることが明らかになった。また昭和61年（1986）から平成元年（1989）頃に行われた3件の調査（後述：立会調査44（86RT010）、立会調査55（88RT005）、試掘調査12（89RT021））では、瓦が多量に廃棄されている石組溝が確認された。この3件は、調査位置が近いことや構造が似ていることから、検出した石組溝はいずれも同一遺構であると考えられた。また遺構配置から本願寺内に石組溝によって区画されていた部分があったことがわかり、本願寺内の建物配置の復元につながる成果として重要視される。

平成9年（1997）には西野左義長町内の土塁が良好に遺存し、かつ、オチリ池の付近と想定される場所で宅地開発が計画されたことを契機に、数年にわたり開発が続き、結果、大規模な発掘調査（6・7・8・9次）が行われた。これらの調査では鉤型に曲がる現存土塁や濠を中心に広範囲の調査が行われた。6次調査では土塁の基底部分や濠、内部に焼締陶器甕が据えられた埋甕遺構、建物や溝、井戸のほか、建物の上面を覆う焼土層などが確認された。確認された濠の規模は、幅5m、深さ1.5mであるが、一部の幅が12m、深さ4mと規模が大きくなっており、土塁を設けない部分の防御性を高めるためのものと考えられ、土塁の出入口が設けられていた可能性が考えられている。7次調査では、南西への落込み部分を埋め立てた整地土や土塁、石組井戸、炉跡、建物、焼土層などが確認された。また土塁を断ち割り、その規模や構築方法も明らかにしている。西側土塁の下部に石組みの暗渠排水溝なども確認されている。土塁の規模や構造のほか、土塁の構築と整地が同時に行われていることを確認した。8次調査では、土塁の構造や土塁下部の暗渠排水溝、本願寺焼亡後に濠がため池（オチリ池）として改修されたことがわかり、東西方向の土塁が造成されたのち南北方向の土塁が造成されたことが、断面観察により明らかになった。9次調査では土塁と濠、土塁下部の暗渠排水溝、建物や焼土を含む土坑などのほか、寺域内の整地後に土塁が造成されていることが確認された。この6～9次調査では、土塁の規模や構造が明らかになっただけでなく、調査地周辺は「御本寺」の中でも貯蔵や手工業生産のための施設が存在していた場所であることが明らかになった。これら建物や溝などは方位が揃っていることから、造営に際し計画性がうかがえることも指摘されている。

平成17年（2005）には6～9次調査の北東部で、発掘調査（10次）が行われた。この場所は、

江戸時代に描かれた『野村本願寺古御屋敷之図』によれば、山科本願寺内寺内の「佛光寺歸尊地」あたりに推定され、『山科古図』によれば、山科本願寺御本寺の南西部に推定される場所である。調査では、山科本願寺期の整地土、堀3条と建物や井戸、土坑などが確認された。特に整地後に南北堀（堀9a、堀9b）、東西堀（堀8）、北西―南東堀（堀7）の3条の堀は短い間で開削と埋め戻しが行われ、その後本願寺期の建物や塀が造営される。整地から廃絶まで遺構の変遷から6時期に区分できるが、いずれも山科本願寺に関わるものと考えられている。調査で確認された堀は、現在確認されている絵図上では想定できない堀であり、山科本願寺の最終段階以前の様相を知る手がかりとなるものである。この調査時には、京内の類似する堀の事例とを検討し、確認した堀の性格を、外部の戦国領主や他宗派との緊張関係の高まりなどによって適時増設された防御性の高いものであると想定している。

同年（2005）には国道1号線から北側の土塁が遺存している範囲で駐車場の擁壁工事に伴う発掘調査（11・12・13次調査）が行われた。11・12次調査では土塁基底部や石組み暗渠排水溝、13次調査では、土塁の際で泉状遺構や石組溝からなる庭園遺構や小規模な炉、土取穴などが確認された。整地後に土塁が構築されていることのほか、土塁と寺域内の溝や池、整地層の関係から、3時期の変遷があり、少なくとも2回にわたって土塁を改修もしくは拡張していることが確認され、土塁の変遷の検討が必要になった調査である。また、2次調査の東隣接地で発掘調査（14次）が行われた。この調査では、池や石敷きからなる庭園遺構や礎石列などのほか、遺構埋土や遺構面を覆う焼土層が確認され、焼土層からは多量の輸入陶磁器や堆黒・蒔絵など的高级漆芸品が出土していることから、会所的な役割を持つ「御亭」が想定されている。この調査で確認された焼土層は調査区一面に広がること、埋土中に二次焼成を受けた遺物が多く存在することから、山科本願寺焼亡期の焼土層と考えられている。下層確認のため一部断割りを行った際に10～20cm下で炭化物が薄く堆積する部分が確認されていることから、この場所が、整地を伴う改変が行われていたことが確認され、山科本願寺焼亡期の焼土層とそれ以前に遡る焼土層の2種類が存在することが明らかになった。

平成18年（2006）に行われた宅地造成に伴う発掘調査（15次）は、6次調査で確認された土塁と外濠の続きと考えられる東西方向の堀状の落込み、土塁内側に建物や井戸、土坑などが確認された。土塁については上部が既に削平されていたものの、遺構の展開状況から、土塁が築かれていたものと推測できる。調査範囲の南東部分の断面観察から、地山が東から西へ落ち込む状況が確認できるため、土塁はこの調査地内で屈曲し、南行すると想定でき、御本寺南辺の土塁の様子が明らかになった。

平成21年（2009）から22年（2010）には、京都橘大学文学部文化財学科により山科中央公園内に所在する土塁の現状測量調査が行われている¹⁷⁾。

平成22年度（2010）から24年度（2012）の3年度で、「御本寺」内の遺構配置や残存状況を確認する目的で範囲確認調査（16・17・18次）を行った。16・17次調査では御本寺西辺にあたる土塁の屈曲部を調査し、土塁造成中の刀埋納遺構のほか、土塁内側では、通路状遺構や柱列、

集石遺構, 石組溝群, また対象地北東部 (16・18 次調査) に整地による 0.05 ~ 0.1 m の高まりなどが確認されている。つづく 18 次調査でも御本寺西辺にあたる土塁, 風呂関連遺構群や石組井戸, 塀などが確認されている。特に風呂関連遺構は稀有な遺構で, 文献史料と発掘調査成果が比較できる資料としても重要である。16 ~ 18 次調査では, 遺構埋土の差異などから 3 時期の遺構変遷が認められること, 現存する土塁が創建期に遡るものではなく, 永正年間 (1504 ~

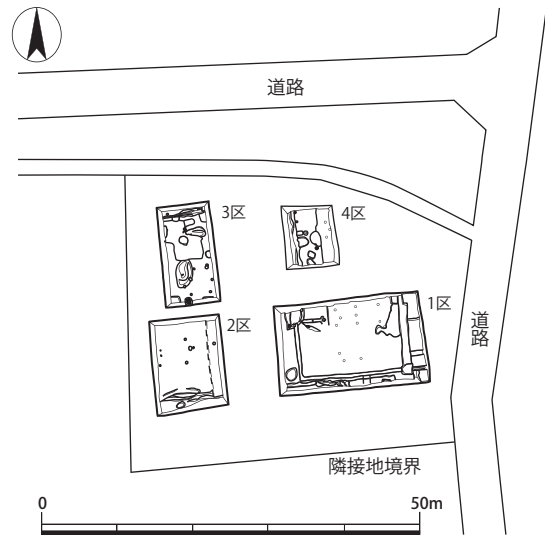


図46 15次調査調査区配置図 (1 : 1,000)

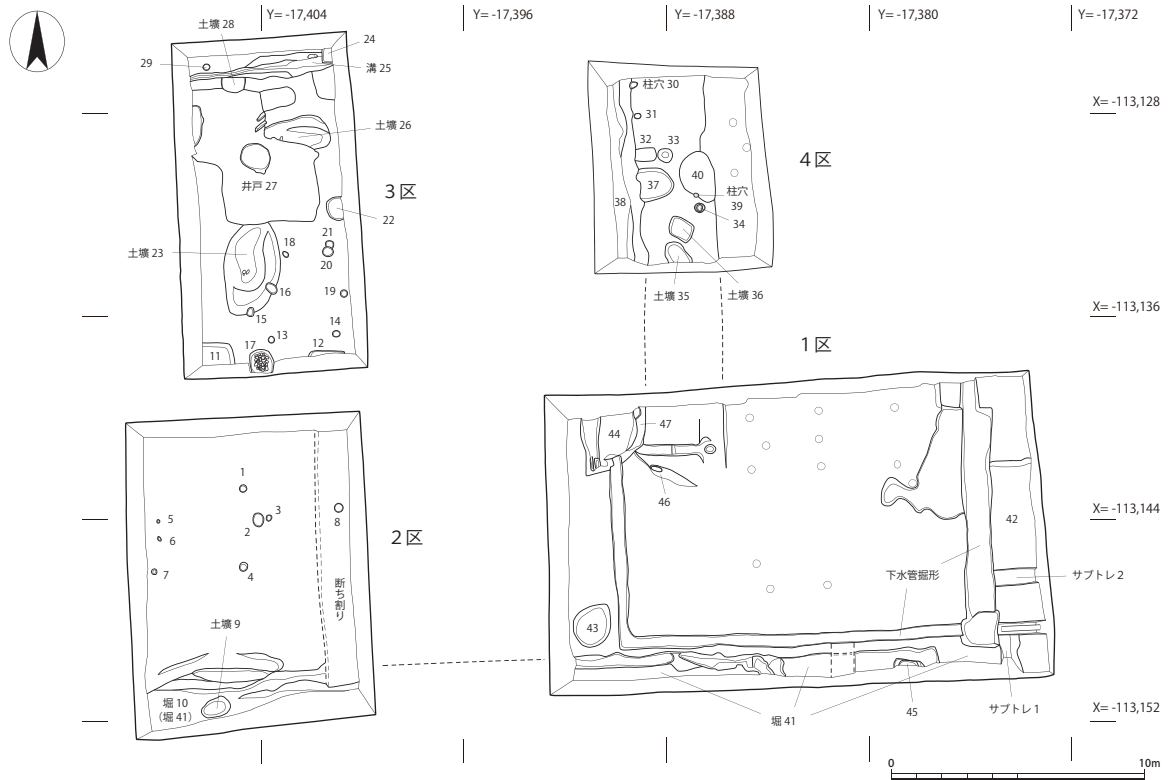


図47 15次調査各調査区平面図 (1 : 300)

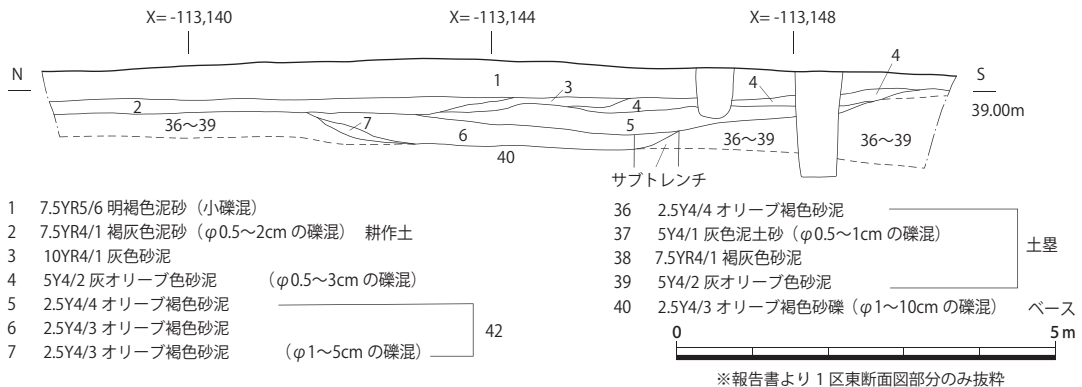


図48 15次調査1区南壁断面図 (1 : 100)

1521) 頃に構築されたと考えられること、風呂や庭などが存在することから、この場所が宗主空間である可能性が高いことが明らかになった。この場所が宗主空間であると考えられることから、御本寺の中核施設である「御影堂」や「阿弥陀堂」が16～18次調査地よりも東に位置することが想定できるようになったが、その様相は明らかではなく、正確な位置や規模の把握が新たな課題となった。

平成25・26年度(2013・2014)には、引き続き、範囲確認調査(20・21次調査)が行われた。20・21次調査では、土塁基底部や整地土、建物、堀のほか、「應仁」の墨書のある土師器皿が伴う山科本願寺造営以前に遡る可能性のある溝が確認されている。また、16～18次調査成果も踏まえ、21次調査付近では私的な空間というよりは実務的な空間であった可能性が指摘されている。

これらの成果を受け、平成30年度(2018)から令和3年度(2021)にかけて、「御本寺」の北西部にあたる部分について、引き続き、様相の把握と「御影堂」などの主要堂舎の確認を目的とした範囲確認調査(23・24・25・27次調査)を行った。

この他、平成25年(2013)に山科本願寺跡の南西隅にて宅地造成に伴う発掘調査(19次調査)が行われているが、山科本願寺の南側に重複する左義長町遺跡に関わる遺構・遺物が主で、山科本願寺期の遺構・遺物は確認されていない。

平成27年(2015)には工場建替に伴う発掘調査(22次)が行われた。調査地は御本寺の南東部にあたり、建物や柵、土坑、埋甕遺構などのほか、これらより古い時期の東西方向の堀が確認されている。いずれも山科本願寺期と考えられている。

令和3年(2021)には22次調査の北側で、工場新築に伴う発掘調査(26次)が行われている。この調査では山科本願寺期の建物や室のほか、東西方向の堀が1条確認されている。22次調査と同様に、東西方向の堀は埋め戻され、その上面に山科本願寺期の遺構が展開し、焼亡を迎えていることが確認されている。ただこの堀と周辺調査(10・22次調査)で確認されている山科本願寺期とされる堀は、現在確認されている絵図上では想定できない堀であり、山科本願寺の最終段階以前の様相を知る重要な資料である。またこの調査では、室町時代以前に遡る土壇墓や東西方向の堀が確認され、山科本願寺造営以前の様相も垣間見ることのできる貴重な調査である。この造営以前の堀と同規模の東西堀が遺構配置の上で、10次調査でも確認されているが、山科本願寺期の堀として報告されており、今後新たな視点での再検討が必要になる(図49)。

以上のように、御本寺西側一帯では、建物や柵、井戸や石組溝、風呂遺構などが確認されており、宗主一族の居住空間や本願寺の実務空間が想定でき、その東側に阿弥陀堂や御影堂などの主要堂舎が位置すると推測されている。「御本寺」を囲む土塁についても、7次調査では土塁構築と整地が同時に行われている所もあるが、10・11・12・17・20・21次調査では整地後に土塁が築かれていることが確認されている所も多く、複雑な折れをもつ土塁や濠で囲まれる山科本願寺は、創建当初から、いくつかの変遷を経て現在の姿になったことが推測できる。併せて、22・26次調査で確認されている東西方向の堀についても、本願寺造営前の様相もわずかながら確認でき、創建当初の姿を知る上で必要不可欠なものと考えられ、新たな知見を得るとともに、新たな課題も

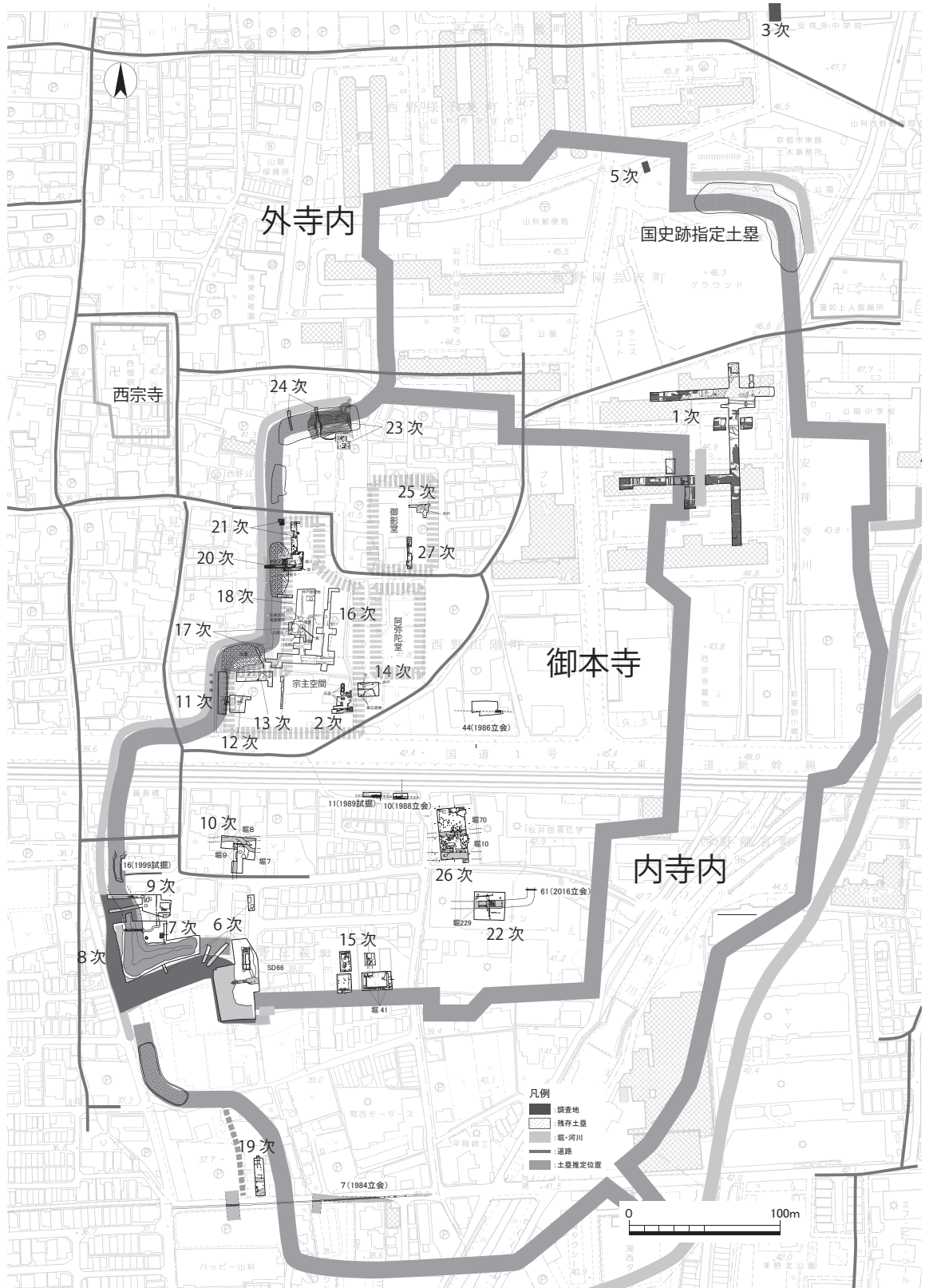


図49 御本寺内主要遺構配置図 (1:4,000)

提示されている。

以下、顕著な遺構が確認された試掘調査及び詳細分布調査（立会調査）について、その概要を述べる。なお見出しの調査名は、調査区分と各調査一覧表のNo.をあわせた表記となる。

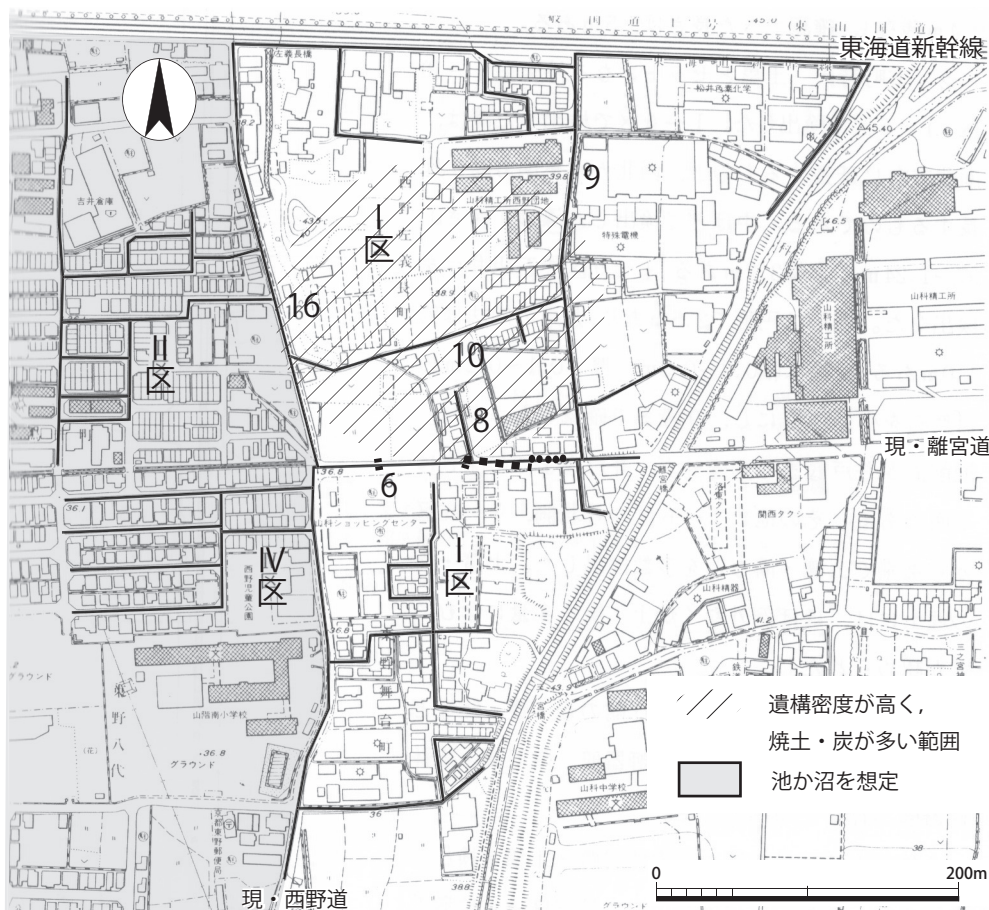


図50 立会調査71 (83RT061) 調査地点図 (1 : 5,000)

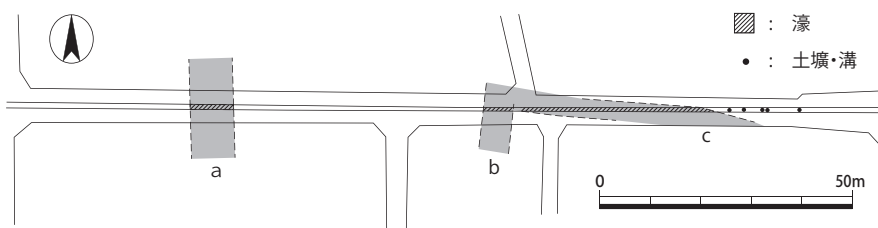


図51 立会調査71 (83RT061) I - 6区遺構確認地点図 (1 : 1,500)

立会調査 71 (83RT061)

西野離宮町から東野八代町にかけて行った公共下水道工事に伴う立会調査で、工事区間が大きく3工区 (I・II・IV区) に分かれています。この調査で現在の西野道より以西 (II・IV区) は広範囲で最近埋め立てられた池ないし沼であったこと、また現・離宮道より北に焼土や炭化物を含む室町時代後半の遺構が集中して展開することがわかった。特に現・離宮道 (I - 6区) では土壘とセットになる外濠と考えられる南北方向の濠 (a) や土壘の内溝かと思われる濠 (b)、

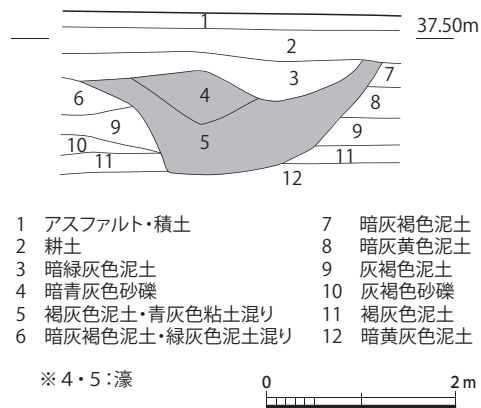
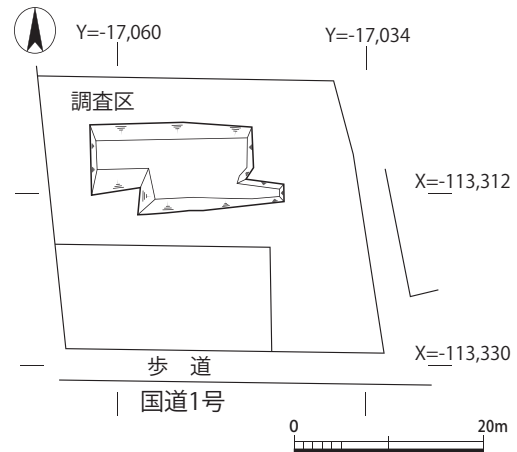


図52 立会調査71 (83RT061) I - 6区b 断面図 (1 : 80)

寺域の南限の可能性のある北西—南東方向の濠（c）が確認され、山科本願寺南西部の寺域を推測することができるようになった。

立会調査 44（86RT010）

ガソリンスタンド改築工事に伴う立会調査である。盛土、旧耕土の下、薄い焼土層を挟み、GL-1.5 ~ -1.8 mで褐灰色砂礫の地山に至る。地山上面で土坑や柱穴などのほか、幅 0.8 mの東西方向の石組溝を確認。検出長は 6 mである。溝芯はほぼ正方位を向く。確認した石組溝は 1 段ないし 2 段で、一辺 20 ~ 50 cmの河原石を据え、5 ~ 10 cmの小石を敷いていた。北辺は良好に遺存していたが、南辺は石が抜かれている所も多く、1/3 程度しか残っていなかった。掘方は 0.8 m 前後で、5 ~ 10 cmの小石を裏込めとしている。溝の埋土には多量の軒瓦や丸・平瓦のほか、炭化物や焼土が確認されている。石や出土した瓦などに、火災痕跡は直接認められなかったため、焼亡後の整理に伴うものと推測されている。また出土した瓦は、瓦当が残るものが多く、道具瓦も確認されていることから、回廊ないし築地に使用されていた可能性があると想定されている。



立会調査 55（88RT005）

店舗兼住宅の新築に伴う立会調査である。

基本層序は、盛土と旧耕土の下、にぶい黄 図53 立会調査44（86RT010）調査区配置図（1：800）

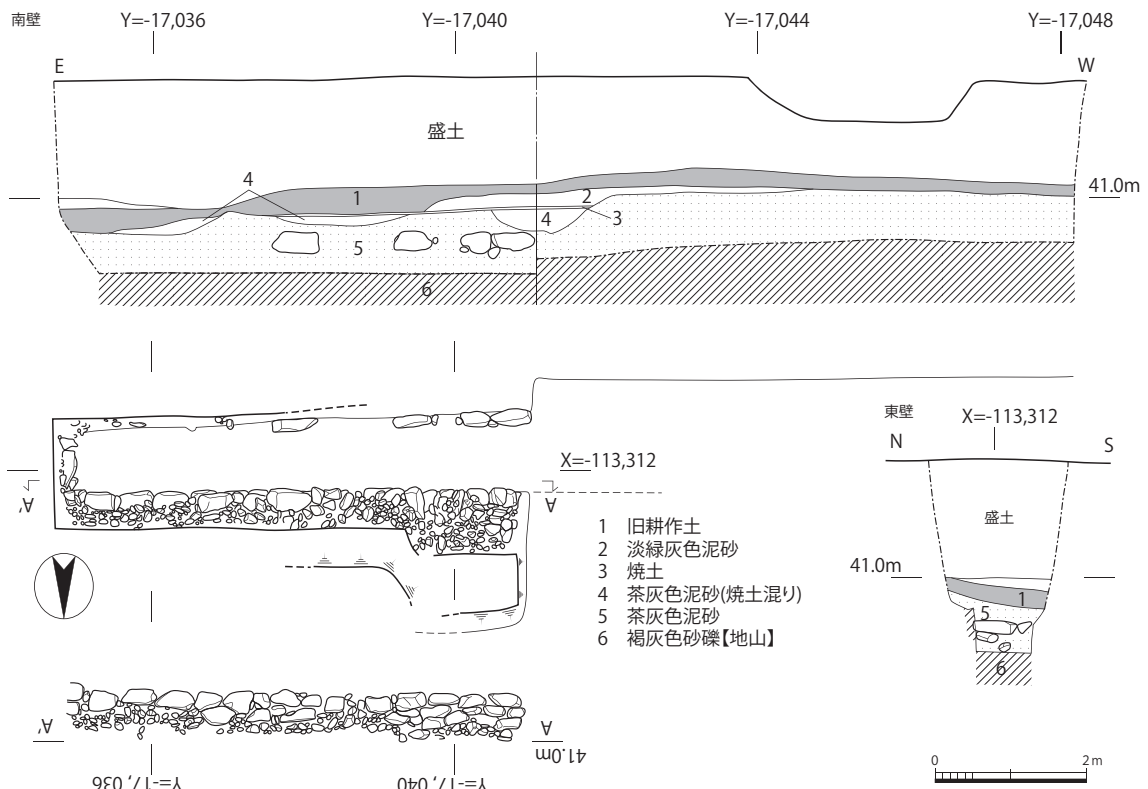


図54 立会調査44（86RT010）平・断面図（1：100）

褐色砂泥，灰黄褐色砂泥，GL-1.3 mで灰黄褐色泥砂の地山に至る。地山上面で東西方向の石組溝を確認した。幅は0.8 m，深さ0.6 m，検出長は約8 mである。溝心々は，正方位より僅かに（1°）北に振れている。石組は下段に一辺20～50 cm大の川原石を据え，上部に5～10 cmの小石が敷かれていた。石組の北辺は良好に遺存していたが，南辺は抜き取られている部分が多い。溝からは土器類や鉄製品のほか，約20箱もの瓦が出土している。また南北方向の石組溝と思われる石列を確認した。掘方は0.8 m，5～10 cmの小石を裏込めとしている。

試掘調査12（89RT021）

マンション新築に伴う試掘調査である。1988年度調査（立会調査55）で検出した石組溝の延長部が想定された場所である。基本層序は，盛土，旧耕土の下GL-0.6 mでにぶい黄褐色砂泥，-0.9 mで灰黄褐色泥砂，-1.3 mで灰黄褐色砂泥の地山に至る。地山上面で東西方向と南北方向の石組溝を確認した。東西方向の石組溝の南辺は一部調査地外になるが，北辺は良好な状態で検出されている。東西溝は，幅0.8 m，深さ0.9 mで，検出長は11.3 mである。溝心々は，正方位より僅かに（1°）北に振れている。石組は最も残存状態のよいところで3段分を確認している。南側ではほとんどの石が抜き取られており，小石が散在する程度であった。石組の最下段では一辺50～80 cmの河原石の平坦面を溝側にそろえて据え，石と石の隙間に5～10 cmの小石を裏込めとしている。南北溝は，内側で幅が0.3 m，深さ0.2 m，検出長は1 mで，更に調査区外へ続く。南端部は東西溝の掘方あたりで止まり，約0.5 mの高さで石を組む。両壁を石で組み，底部にも石が敷かれていた。このように，1988年度調査（立会調査55）で確認された東西溝が，更に西へ延びることが明らかとなった。そして新たに，南北方向の石組溝が確認された。南北溝は，東西溝に取り付いていることと，石組が切れたところが柵状になっており，東西溝に流し込む性格のものであると想定された。

南北溝からは遺物は出土しなかったこともふまえ，南北溝の上部に築地等の区画施設が構築され，敷地の内側から外側への排水施設であると考えられた。また検出した東西溝が，築地で囲ま

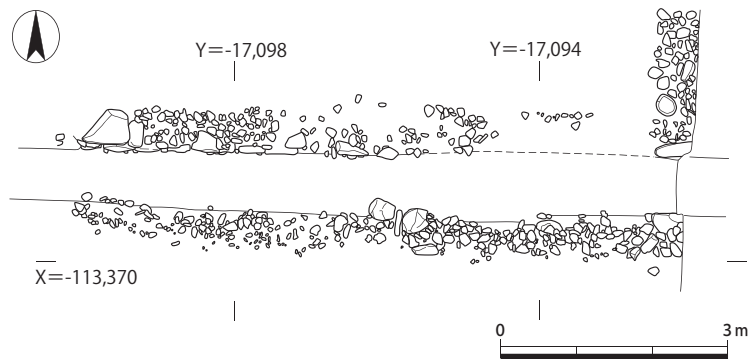


図55 立会調査55（88RT005）石組溝平面図（1：100）

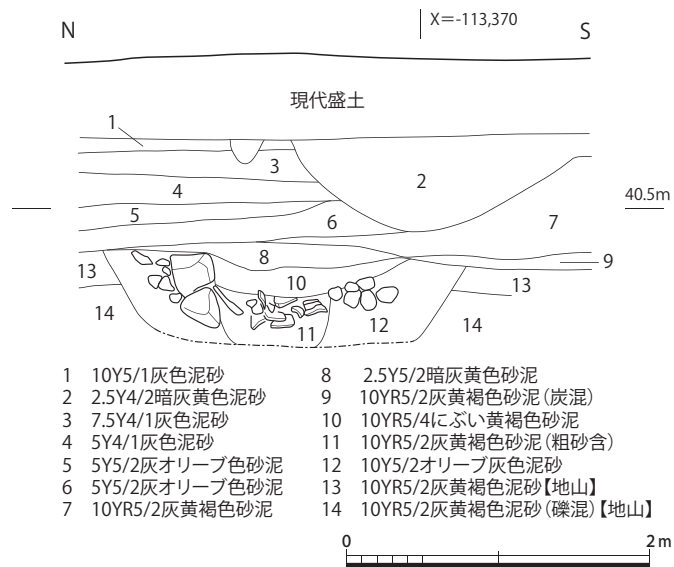


図56 立会調査55（88RT005）東壁断面図（1：50）

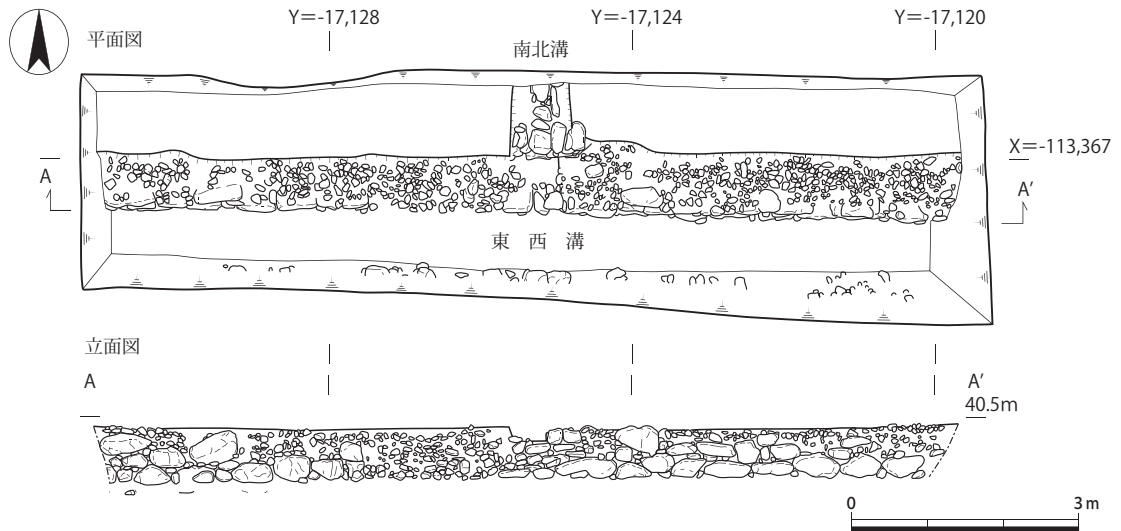
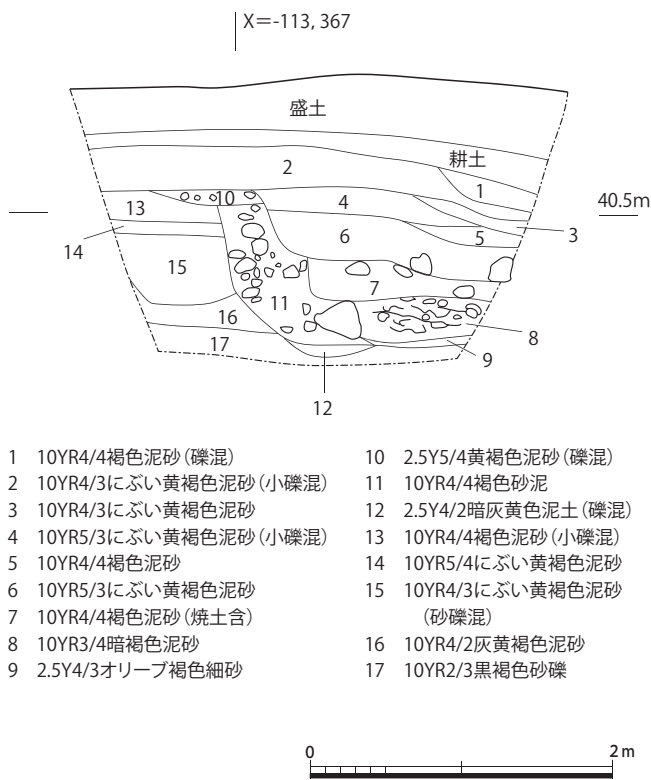


図57 試掘調査12 (89RT021) 石組溝平・断面図 (1 : 100)

れた区画の外側の溝であるとも想定されている。

東西溝からは少量の土器類とともに、軒丸瓦、軒平瓦、がんぶり瓦を含む瓦が多量に出土している。その量は100箱余りにもなり、これらの瓦は築地から滑落したというよりむしろ築地が廃棄された時点で埋まったものと推測されている。

試掘調査12と立会調査55で確認された石組溝は、類似した規模と構造をしており、配置からも、同一遺構の可能性が高い。また立会調査44で確認された東西方向の石組溝も類似した規模と構造であることから、山科本願寺内に南北約57m、東西33mの規模の土地区画がおこなわれていたと想定されている¹⁸⁾。



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1 10YR4/4褐色泥砂 (礫混) | 10 2.5Y5/4黄褐色泥砂 (礫混) |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 (小礫混) | 11 10YR4/4褐色砂泥 |
| 3 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 | 12 2.5Y4/2暗灰黄色泥土 (礫混) |
| 4 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 (小礫混) | 13 10YR4/4褐色泥砂 (小礫混) |
| 5 10YR4/4褐色泥砂 | 14 10YR5/4にぶい黄褐色泥砂 |
| 6 10YR5/3にぶい黄褐色泥砂 | 15 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 (砂礫混) |
| 7 10YR4/4褐色泥砂 (焼土含) | 16 10YR4/2灰黄褐色泥砂 |
| 8 10YR3/4暗褐色泥砂 | 17 10YR2/3黒褐色砂礫 |
| 9 2.5Y4/3オリブ褐色細砂 | |

図58 試掘調査12 (89RT021) 東壁断面図 (1 : 50)

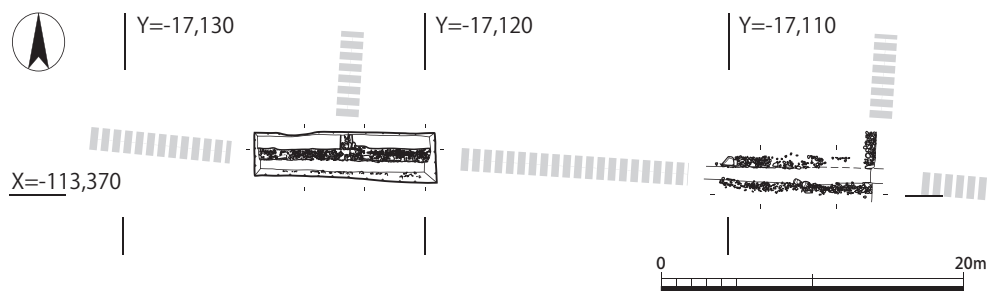


図59 立会調査55・試掘調査12石組溝平面図 (1 : 500)

試掘調査 16 (96S473)

宅地造成に伴う試掘調査である。現存土塁の延長部にあたることから、土塁の延長及び寺内町の遺構状況を確認する目的で計 10 か所の調査を行った。調査目的である土塁の延長は、4・7・9・10TR の 4 か所で確認でき、現状の地形より 2 か所の L 字の屈曲をへて、東側に続くと考えられた。確認された土塁は全て国有水路に向かって傾斜しており、浅いところでは現地表下 10～20 cm で認められる。

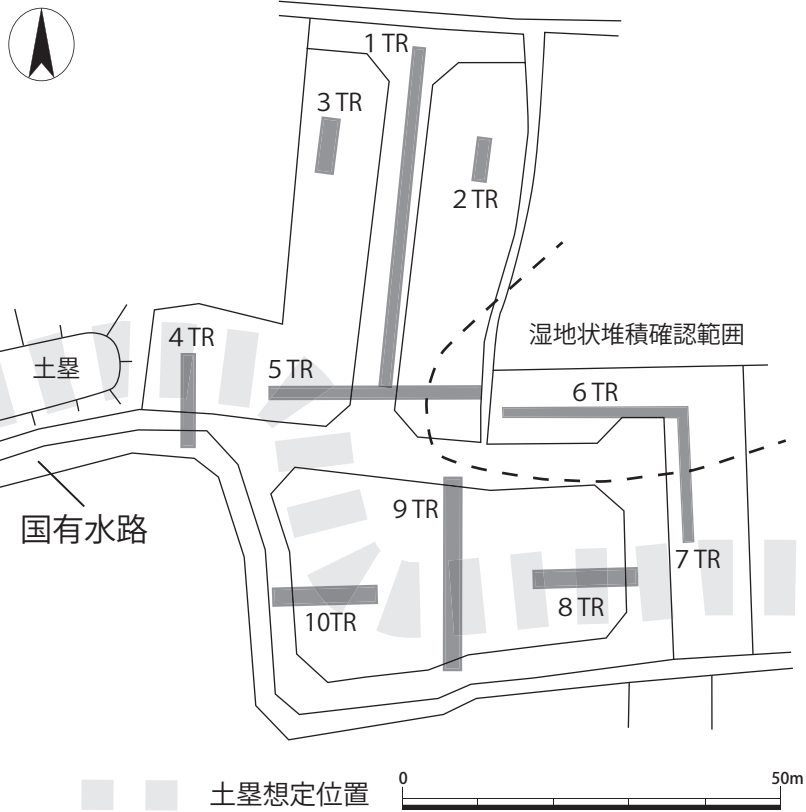


図60 試掘調査16(96S473)調査区配置図(1:1,000)

この推定土塁のすぐ内側部分の 2 か所 (1・9 TR) で、火災を示す明瞭な焼土層を確認した。さらに焼土層と同一か所で礎石も 2 個確認でき、土塁の内側には焼失した建物が想定できる。その他、1 TR では 16 世紀前葉の土師器皿を大量に埋納した土坑や焼土坑、幅 2.1 m の路面、備前焼大甕の埋納土坑などを検出した。7 TR では粘土壁面を有する炉跡 1 基や礫溜り土坑を確認している。6 TR と 7 TR の北半では湿地状堆積があり、遺構を確認することはできなかった。発掘調査 (6 次調査) を指導。

試掘調査 14 (96S273)

宅地造成に伴う試掘調査である。『野村本願寺古御屋敷之図』によれば、山科本願寺の内寺内跡の「佛光寺歸尊地」あたりに推定され、また、『山科古図』によれば、御本寺

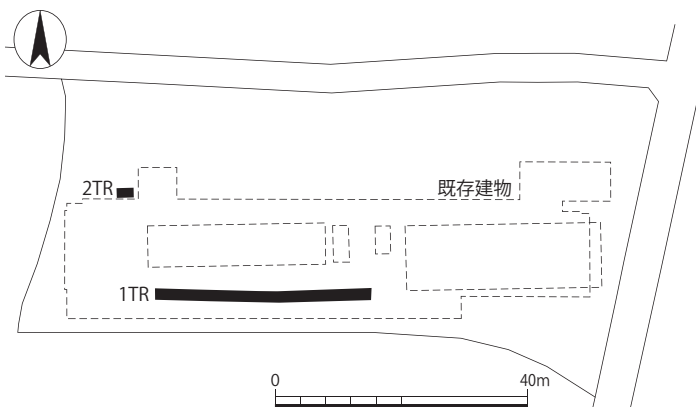


図61 試掘調査14(96S273)調査区配置図(1:1,200)

GL±0	1TR 東端北壁	2TR 東端北壁
	1	1
	2	2
	4 3	3
	5	4
	6	

- 1TR
- 1 礫混盛土
 - 2 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂(焼土, 近世陶器含む)
 - 3 2.5Y5/4黄褐色砂混
 - 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥(陶器片混入)
 - 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥(土師器片混入)
 - 6 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥
- 2TR
- 1 盛土
 - 2 褐色砂泥
 - 3 暗褐色砂泥
 - 4 砂礫

図62 試掘調査14(96S273)調査区断面図(1:50)

の南西部に推定される。盛土の下、GL-0.5 mで焼土及び中世から近世の土器・瓦を含む整地層を確認した。その下層はトレンチ中央付近で地山の砂礫となりトレンチ両端に向かって落込み、河川状の堆積が認められる。トレンチ東端では深さ 1.7 mまで掘削するも砂礫層は検出できず、焼土を含む整地層の下層には褐色系の砂泥層が堆積していた。検出した遺構は近世の土師器を埋納した小規模な土坑 1 基のみである。

試掘調査 13 (99S241)

宅地造成に伴う試掘調査である。山科本願寺の南西隅部（7・8次調査地）から北に 30 mほどの場所で、南北方向の土塁延長上にあたる。敷地の西側には南北の水路が走り、これに平行して土塁が遺存していた。土塁東側では、盛土の下、GL-0.4 mで黄褐色土の地山に至る。地山上面で焼土を含む土坑を確認したことから、発掘調査（9次調査）を指導。遺存土塁については、既に半壊状態にある現状を鑑み、土塁測量図の作成と工事中の立会調査を実施した。土塁は、高さ 3 m、幅 3 mで北側の敷地境界から南へ 17 mほどが遺存していた。土塁の斜面は既に両側からほぼ垂直に削られ断面がむき出しになっており、当初の半分程度の厚みしか残っていないと考えられる。頂部は西側に向かって少し傾斜していたが、その勾配が緩やかであることから、本来の最高部に近い部分と推測される。堀については後日、西側境界を流れる水路の護岸補強工事中に立会調査を行い、土塁から水路下へ向かって落ち込む外堀の一部を確認している。

試掘調査 6 (04S170)

造成及び事務所新築に伴う試掘調査である。対象地は 1 号線の北側に位置し、南北方向の土塁や濠が想定される場所である。計画では、濠を踏襲していると考えられる水路沿いを大きく削平する可能性があったため、外濠と水路の関係を確認するため 2 か所の調査を行った。結果、盛土直下で土塁の構築土が良好に遺存していることを確認したことから、発掘調査（11次調査）を指導。

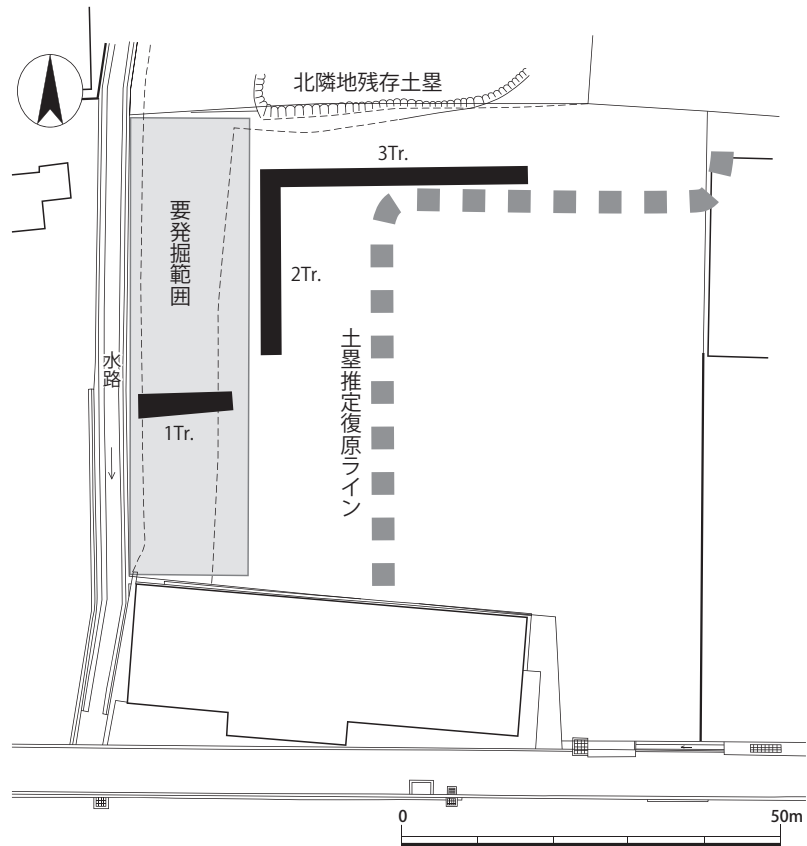


図63 試掘調査 6 (04S170) 調査区配置図 (1 : 1,000)

試掘調査 15 (05S640)

山科本願寺跡では御本寺の中央南縁部に相当し、土地境界付近に堀が通ると予想される場所である。周辺では 6～10 次調査が行われ、山科本願寺に伴う堀・土塁・建物跡などが検出されている。

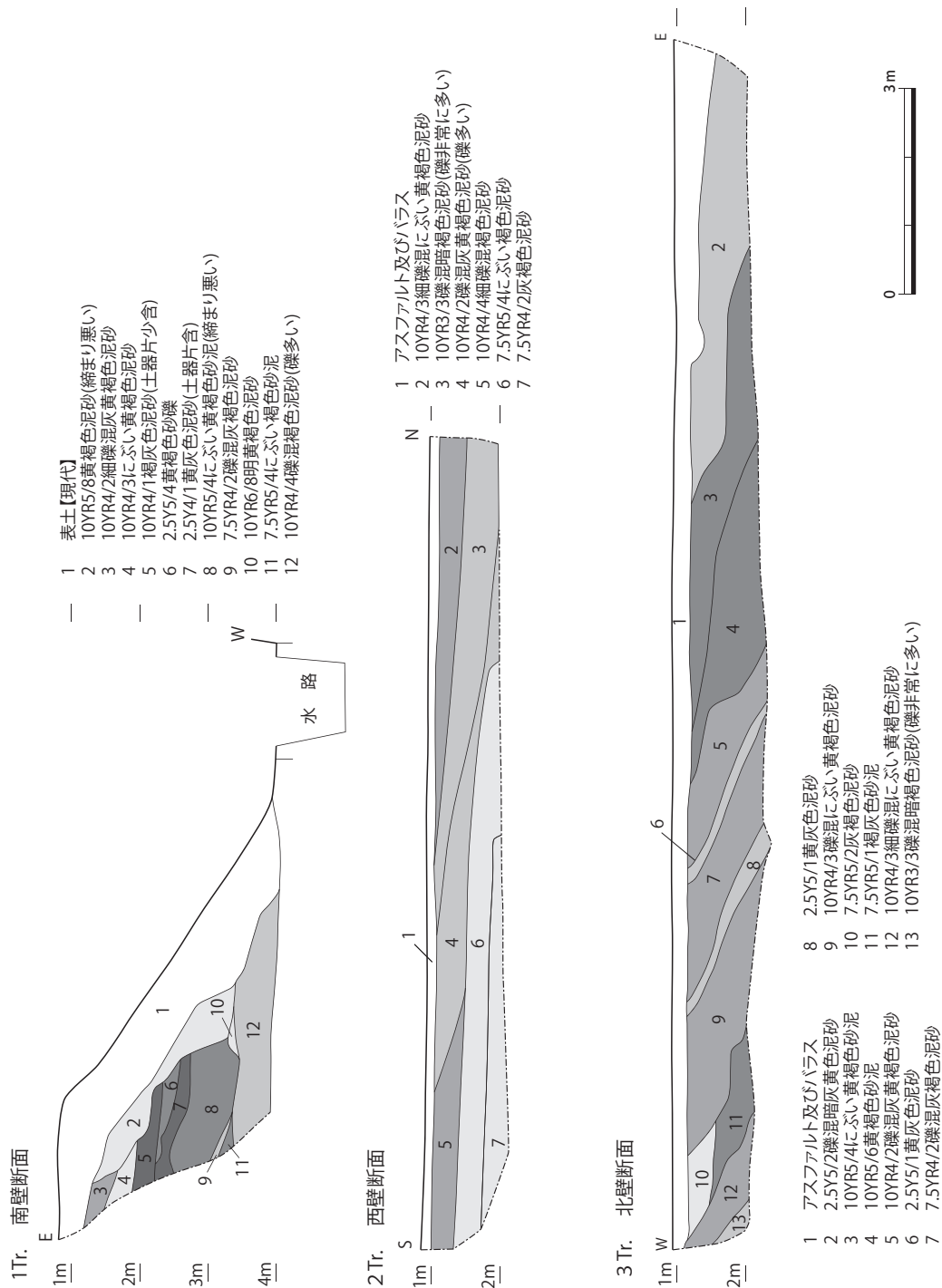


図64 試掘調査6 (04S170) 調査区断面図 (1:100)

宅地造成に伴う試掘調査のため、計画道路部分に調査区を設定し、調査を実施した。結果、浅いところで GL-0.4 m、深いところでは -1.2 m で、山科本願寺期の土師器皿を含む柱穴や溝状遺構を検出した。検出した溝状遺構のうち、西方の溝は南北方向に流れると予想されるため、敷地南端に予想される御本寺の堀へ排水する機能をもつ可能性がある。

調査の結果、対象地西側は既に削平を受けており、敷地中央より東側に対し、発掘調査（15 次調査）を指導。

試掘調査 5 (05S208)

共同住宅新築に伴う試掘調査である。対象地の東側にある水路は、御本寺の西側を画する土塁の外濠を踏襲しているものであることから、外濠西肩の検出を目的として2か所の調査を行った。結果、両調査区とも表土直下もしくは、にぶい黄色泥砂の下、GL-0.3 ~ -0.5 mでオリブ褐色砂礫の河川氾濫を確認し、この氾濫堆積を切り込む濠の肩口を確認した。検出した肩口から濠の幅は、現存する土塁の天端まで10.7 ~ 11.3 m、現水路底から土塁の天端までの高さが4.3 ~ 4.6 m、西側の肩口までが2.2 mである。

試掘調査 8 (08S103)

宅地造成及び店舗新築に伴う試掘調査である。対象地の北西側では14次調査、東側では東西方向の石組溝が確認された立会調査44(86RT010)が行われている。14次調査で遺構面の全面に山科本願寺廃絶時の焼土が広がり、遺物を含んだ遺構が密に分布していたことは、様相が大きく異なり、旧耕土と包含層以下、GL-0.4 ~ -0.6 mで山科本願寺期の整地土、-0.9 mで褐色砂泥の地山に至り、焼土などは確認できなかった。遺構は整地土上面でピット状の遺構が散見される程度で、遺物もほとんど確認できなかった。

試掘調査 7 (12S342)

店舗新築に伴う試掘調査である。対象地は1972年に2次調査が行われ、遺跡の保存が



図65 試掘調査 5 (05S208) 調査区配置図 (1 : 1,000)

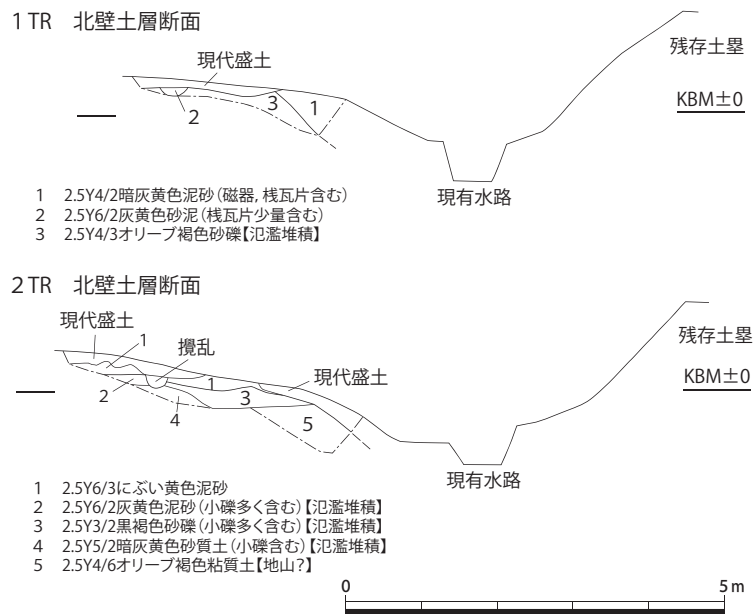


図66 試掘調査 5 (05S208) 各調査区北壁断面図 (1 : 100)

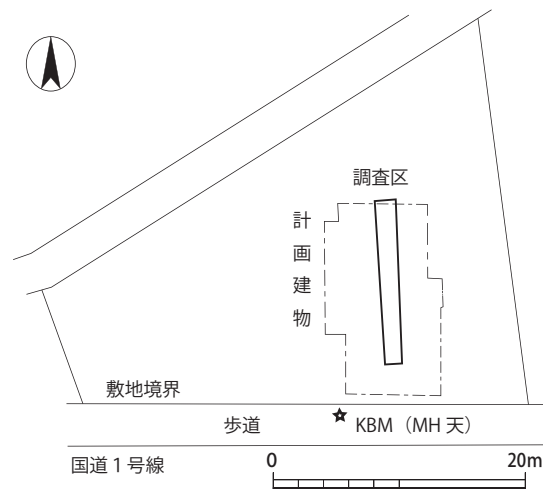


図67 試掘調査8 (08S103) 調査区配置図 (1 : 600)

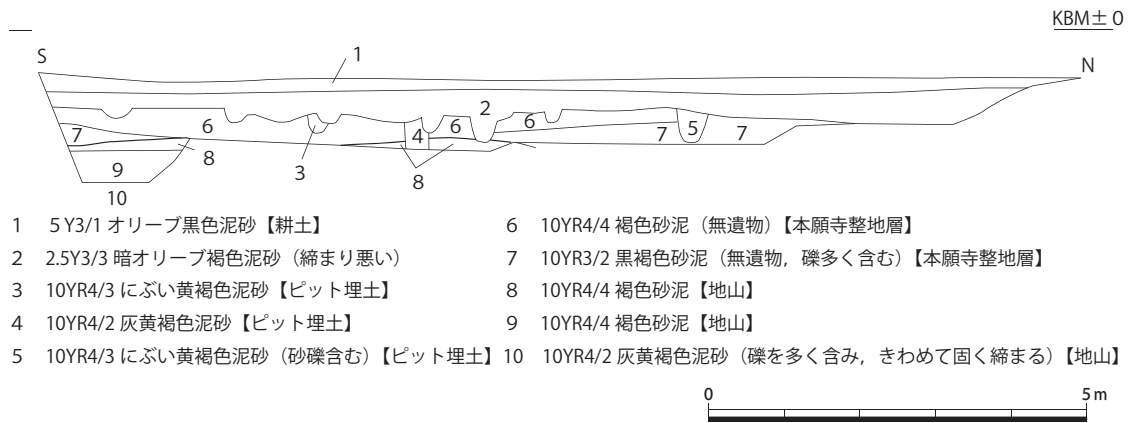


図68 試掘調査8（08S103）西壁土層断面図（1：100）

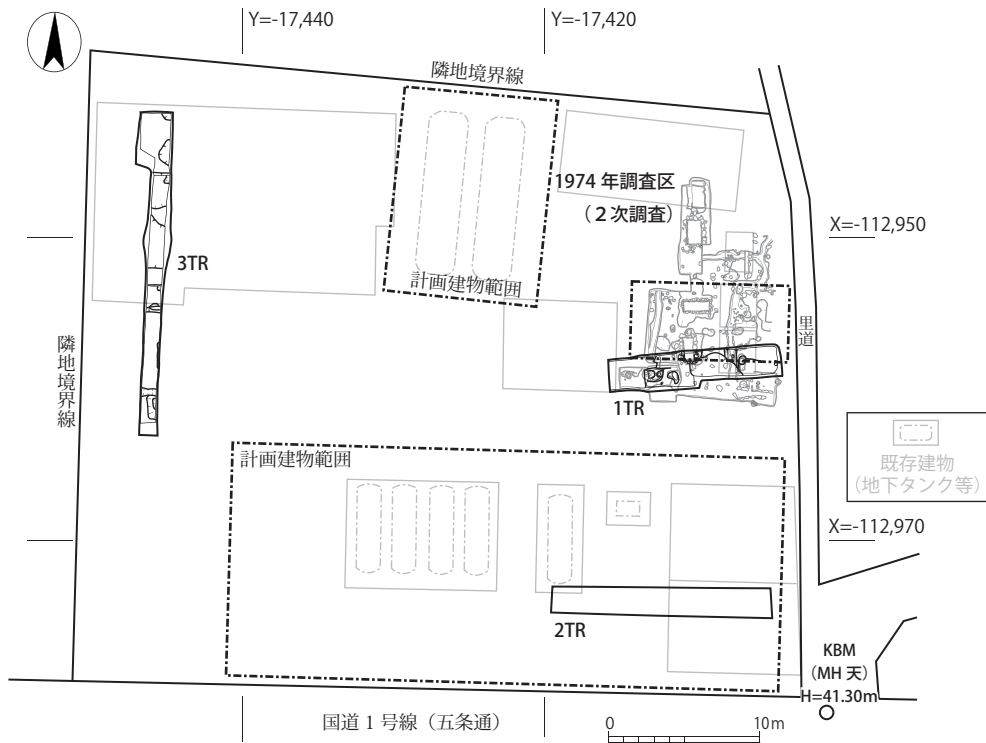
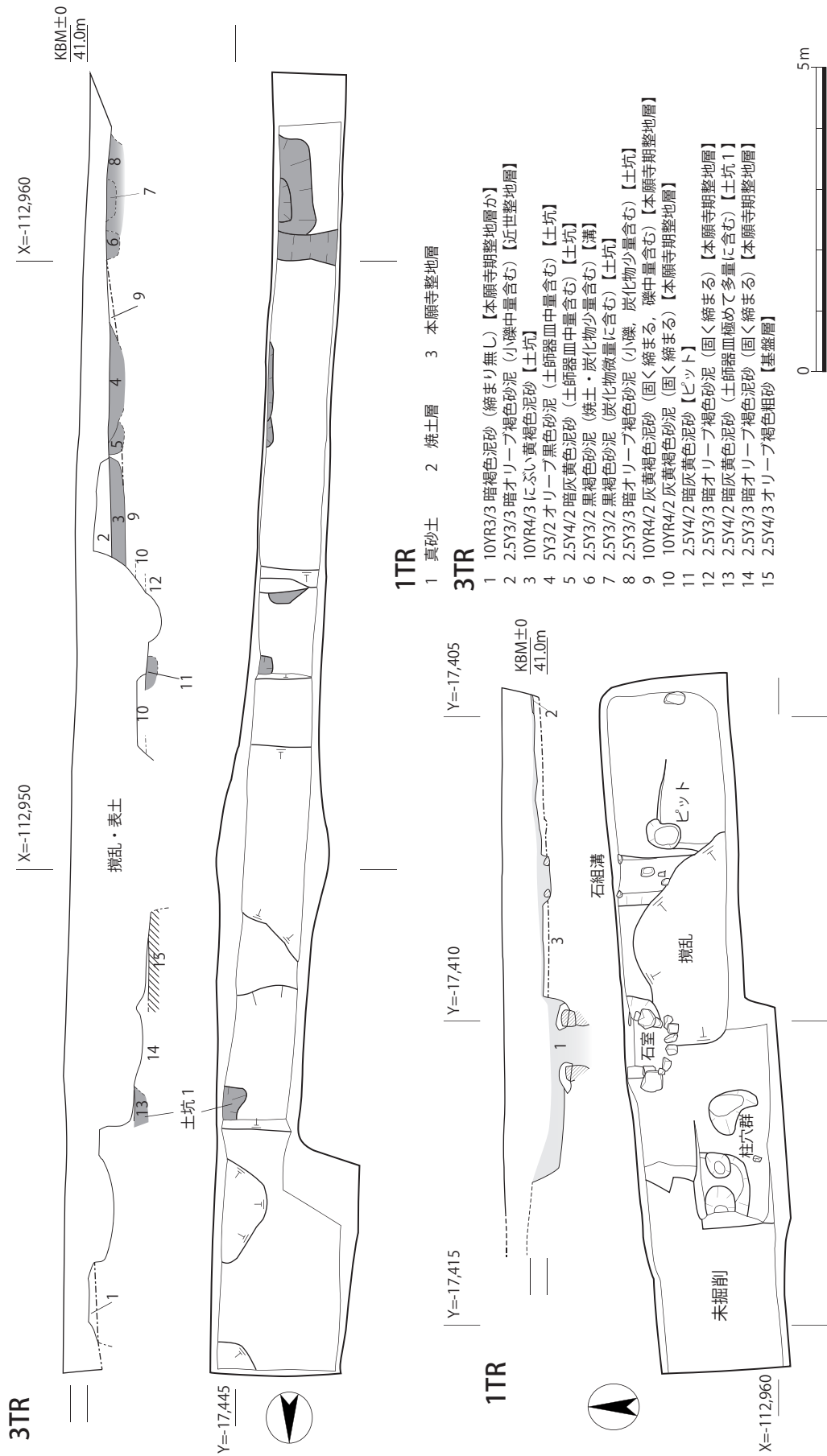


図69 試掘調査7（12S342）調査区配置図（1：500）

図られている場所にあたる。2次調査により遺跡が保存されている部分については、引き続き、保存を前提とした工事計画とすることから、調査位置が不明瞭な2次調査区の範囲を確定するための調査区（1TR）を設定した。結果、2次調査時の石室Ⅱ、石組溝、柱穴群、土坑、ピット等を再確認し、標高と座標をあたえた。この他敷地内で2か所（2・3TR）の調査を行った。2TRでは、既存施設であった地下タンク部分の削平を確認し、3TRでは完形の土師器皿を多く含む土坑や東西溝、柱穴等を確認した。確認した遺構は改めて養生を行い埋め戻し、保護した。

立会調査 61（15RT205）

工場新築に伴う詳細分布調査である。対象地は平成27年に発掘調査（22次調査）が行われ、東西方向の堀が確認されている。今回の調査は22次調査区の北東部分にあたる。北壁の断面観察で黄褐色粘質シルトの地山上面で幅4.5mの南北方向の堀を確認しており、この堀が22次調査の堀の延長と想定されている。



- 1TR**
- 1 真砂土
 - 2 煉土層
 - 3 本願寺整地層
- 3TR**
- 1 10YR3/3 暗褐色泥砂 (締め無し) 【本願寺期整地層か】
 - 2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (小礫中量含む) 【近世整地層】
 - 3 10YR4/3 に近い黄褐色泥砂 【土坑】
 - 4 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 (土師器皿中量含む) 【土坑】
 - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 (土師器皿中量含む) 【土坑】
 - 6 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (焼土・炭化物少量含む) 【溝】
 - 7 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 (炭化物微量を含む) 【土坑】
 - 8 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (小礫, 炭化物少量含む) 【土坑】
 - 9 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 (固く締まる, 礫中量含む) 【本願寺期整地層】
 - 10 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 (固く締まる) 【本願寺期整地層】
 - 11 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 【ビット】
 - 12 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 (固く締まる) 【本願寺期整地層】
 - 13 2.5Y4/2 暗灰黄色泥砂 (土師器皿極めて多量を含む) 【土坑1】
 - 14 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 (固く締まる) 【本願寺期整地層】
 - 15 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂 【基盤層】

図70 試掘調査7 (12S342) 各調査区平・断面図 (1:100)

附 1・2次調査について

山科本願寺跡内で初の本格的な発掘調査である1次調査・2次調査の出土遺物および図面などの資料を実見する機会を得た。特に天文元年（1532）の山科本願寺焼亡時の良好な資料と考えられている2次調査石室出土の土師器皿を中心に熟覧の機会を得た¹⁹⁾。2次調査石室出土の土師器皿は、すでに報告書内で詳細な検討が行われており、その概要は以下の通りである（図72）。

- 1, 大～小の4種類（A～D）の規格が存在する。
- 2, 規格の大きいものから3種類（A～C）は、同じ様相を示す。（底部は平坦で、体部が開きぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。器高は低く、全体に扁平。器壁は比較的薄く、つくりは丁寧。底部見込みには一定方向のナデを施し、底部見込周縁に浅い溝状の圏線をもつ。）
- 3, 一番規格の小さいもの（D）は、上記3種（A～C）とは様相がやや異なる。（開きぎみに立ち上がるが、底部から体部への屈曲があまく、全体に丸みをおびる。器壁はやや厚い。横ナデの一単位の範囲が広く、口縁部から底部にまでおよぶ。）
- 4, 煤が付着しているものが多くあり、灯明皿として使用されていたものが一定量ある。灯明皿の中には、口縁部に欠き込みがあるものや、底部中央に穿孔があるものも認められる。

実見の結果、上記の様相を確認することができた。これら石室出土の土師器皿は、いずれも皿Sで10A期に位置づけられる。この他、出土した土師器皿は破片のものも多かったが、完形になる資料が多いように感じた。

現在、同時期で実年代を推定できる資料として山科本願寺跡17次調査の土坑2134資料がある²⁰⁾。土坑2134出土土師器皿は、皿Sが主体となり、口径が8.2～9.8cm, 10.0～11.4cm, 12.2～14.6cmと大きく3規格に区分でき、皿Sbとして、9.5cm以下の一群や皿Nも少量出土している（図73）。製作技法については、底部は平坦で、体部が開きぎみに立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部見込周縁に浅い溝状の圏線をもつなどの特徴が見受けられる。法量分布も石室出土遺物と似た範囲にまとまりが認められ、近い様相を示す。

同時期の平安京内の資料では、天文法華の乱（1536）の焼土層で覆われていたとされる平安京左京六条二坊五町跡・猪熊殿跡・本圀寺跡SD166上層資料がある。この資料は口径の数値は若干異なるものの、4規格に区分できる。皿Sが主体であるが、皿Nについては一定量確認されている²¹⁾。また前述のSD166上層よりも、やや古い様相を示していると考えられている左京五条三坊九町跡SK 8-18資料については、法量分布は似た様相を示す。ただ、山科本願寺では割合の少な

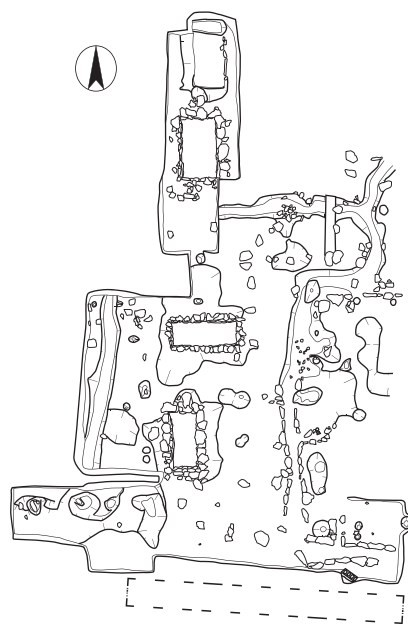


図71 2次調査平面図（1：200）

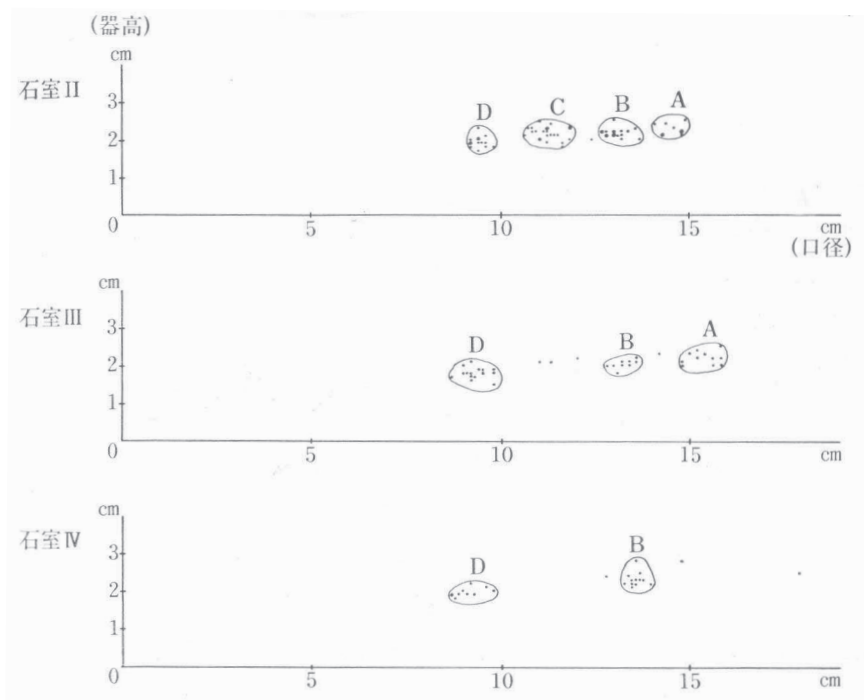


図72 2次調査石室出土の土師器皿の法量分布（註19のP72.表3転載）

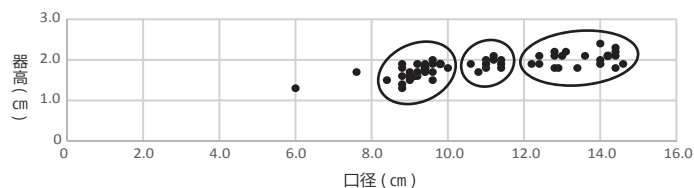
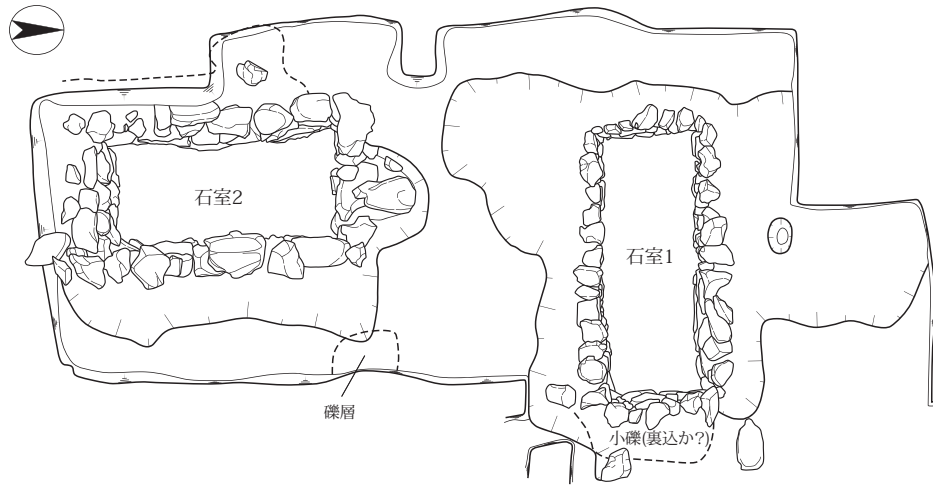


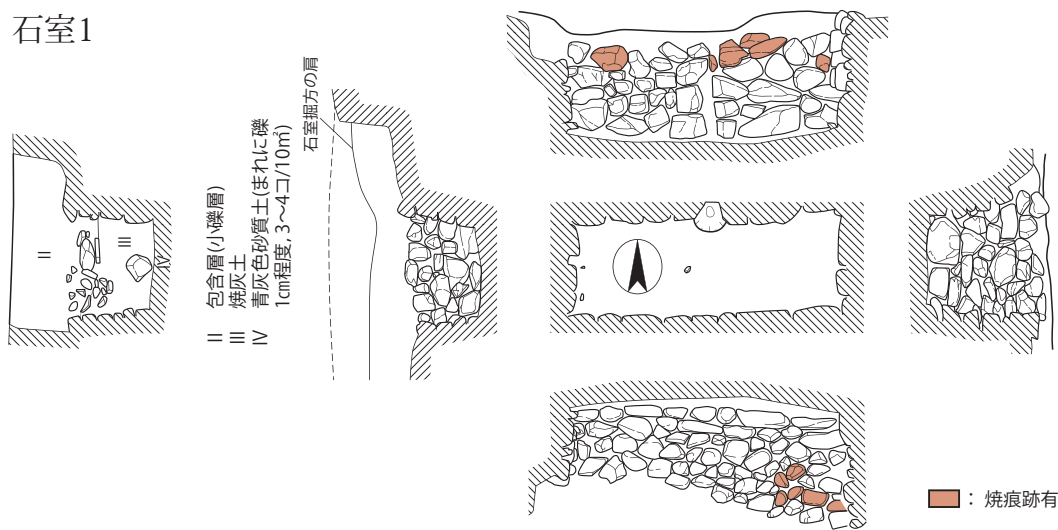
図73 17次調査土坑2134出土土師器皿口径分布

かった皿Nについては、皿Sとほぼ同量確認でき、かつ、製作技法のバリエーションが多いという特徴がある。このように同時期の平安京内の遺跡出土の土師器皿と比較を行った際に、山科本願寺跡の資料は皿Nがあるものの、皿Sが主体を占め、皿Sと皿Nの割合に差があることが分かった。

この他、報告本文中に記載されている土師器皿の内外面に金箔が施された資料（図75-2）やこれまで報告されていなかった人面と思われる墨画が両面に施された資料（図75-1）を確認した（図75）。また遺物以外にも石室の測量図面を含む遺構図面なども実見することができ、石室内の土層堆積状況を確認することができた。出土している土師器皿は石室の底部付近からまとまって確認されていること、その上部は山科本願寺焼亡時と考えられる炭化物を多く含む層が厚く覆っていたことが断面図から読み取れ、またこの焼亡期の堆積土が確認できる部分の石室石材内側の一部には焼けた痕跡が残っていたこともわかった（図74）。



石室1



石室2

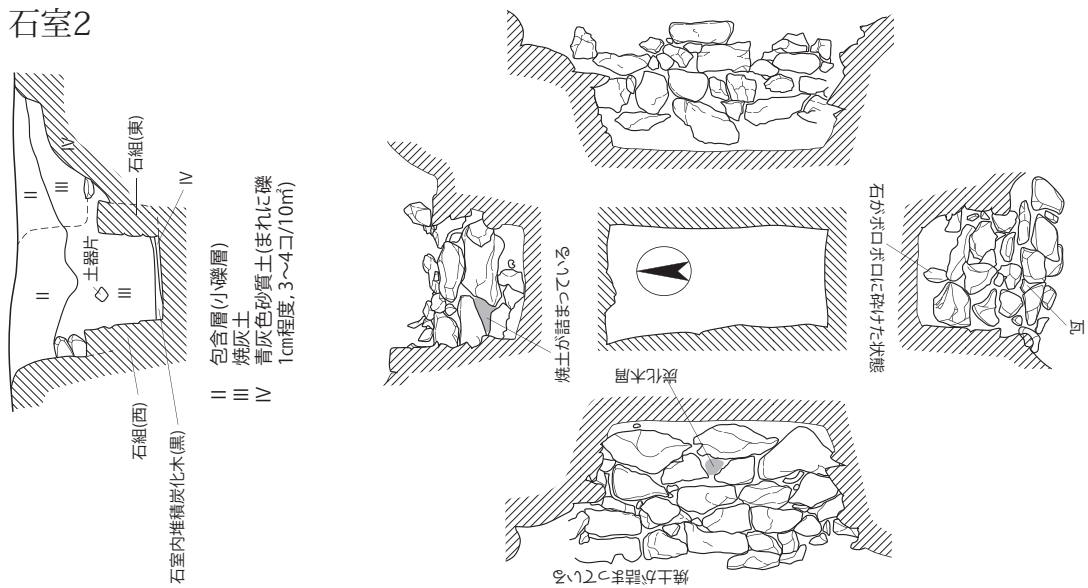
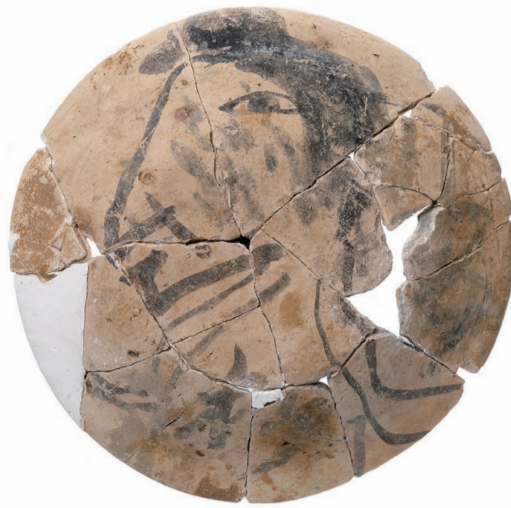


図74 2次調査石室1・2平・断面図(1:50) ※原図をトレース

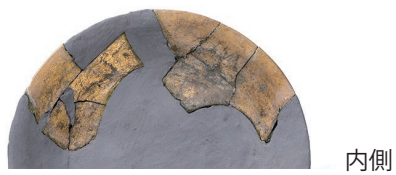


内側

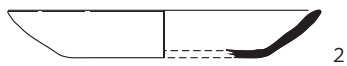


外側

※写真は、墨画が正面と考えられる位置に配置。



内側



2



外側



図75 2次調査石室出土 墨書土師器皿(1:2)・金箔付土師器皿(1:4)

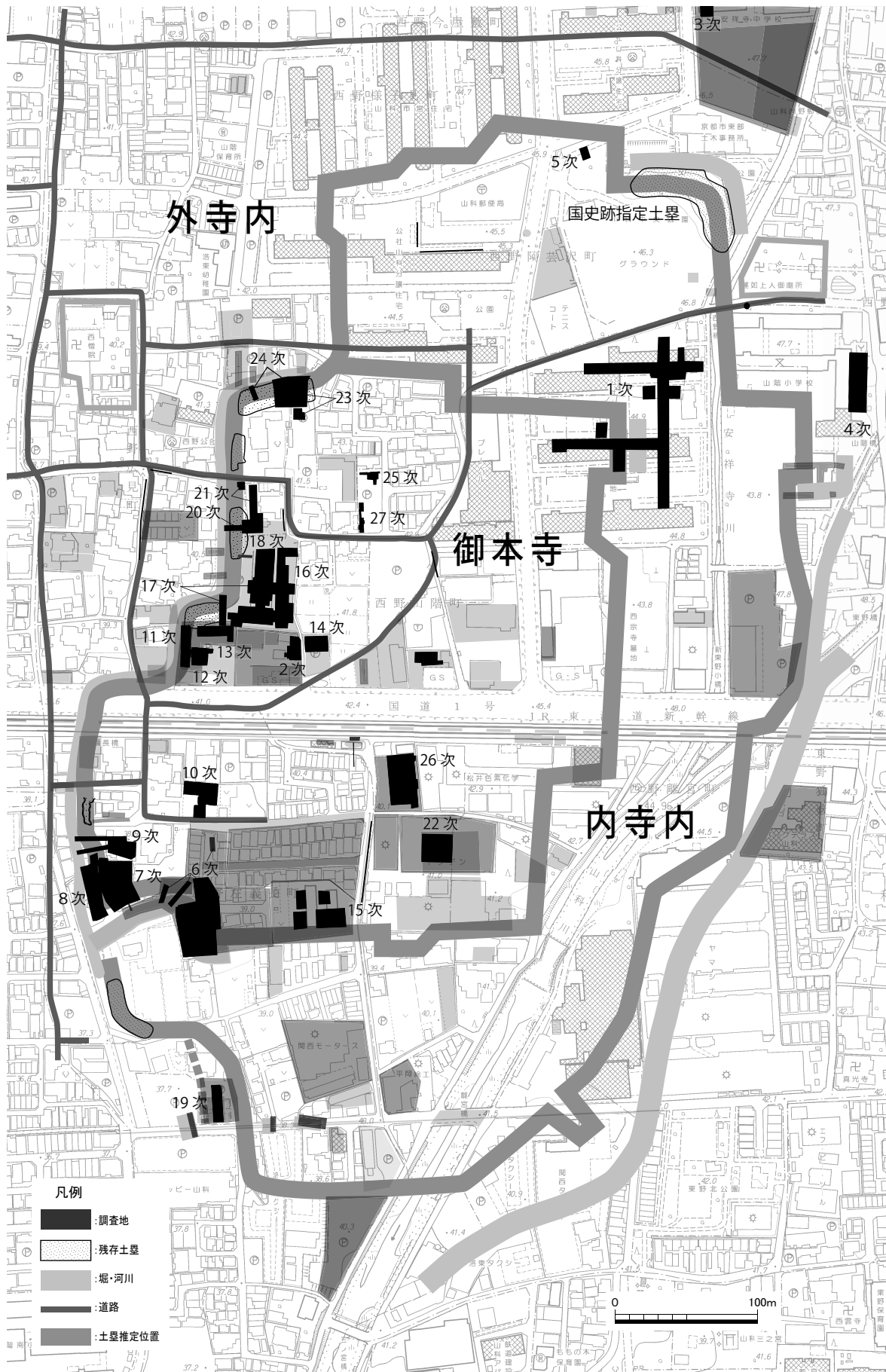


図76 既往調査位置図 (1 : 4,000)

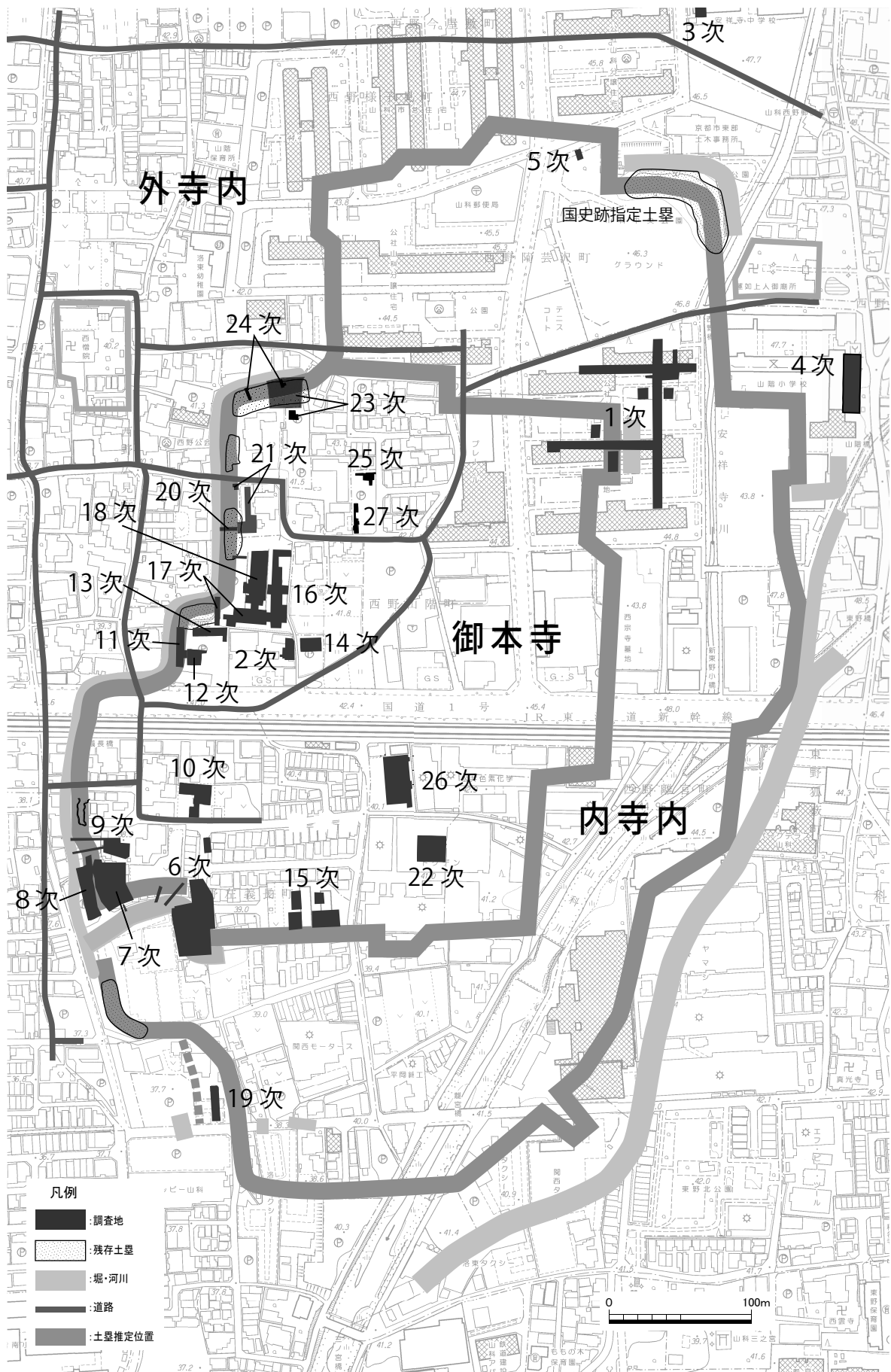


図77 発掘調査位置図 (1 : 4,000)

表3 発掘調査一覧表

調査回数	区域	概要	調査期間	掲載報告書	発行年	調査No.
1次調査	内寺内	建物・鍛冶場、石垣、柵、南北方向の堀、土塁。	1973.5.21 ～8.4	岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告第8集』国立歴史民俗博物館	1985.12	—
2次調査	御本寺	石組溝、石室、庭園の一部。	1974.10.9 ～11.3	岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告第8集』国立歴史民俗博物館	1985.12	—
3次調査	外寺内	旧耕作土。	1976.11.17 ～11.30	「山科本願寺跡1」『昭和51年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2008.3	—
4次調査	外寺内	江戸時代以降の落込み。	1977.2.14 ～3.5	「山科本願寺跡2」『昭和51年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2008.3	76S2451
5次調査	内寺内	撓乱のみ。	1978.10.30 ～11.13	「山科本願寺跡」『昭和53年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2011.3	78S2109
6次調査	御本寺	東西および南北方向の堀、東西方向の土塁、暗渠、建物、井戸。	1997.4.20 ～7.10	「山科本願寺跡1」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1999.3	96S0473
7次調査	御本寺	鉤型に曲がる土塁と堀、建物、井戸、鍛冶場。	1997.7.16 ～9.18	「山科本願寺跡2」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1999.3	97S0115
8次調査	御本寺	南北方向の堀と土塁、暗渠。	1998.8.17 ～11.9	「Ⅲ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報平成10年度』京都市文化市民局	2000.3	97S0126
9次調査	御本寺	建物、溝、暗渠、土塁基底部。	2000.5.10 ～6.30	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報平成12年度』京都市文化市民局	2001.3	99S0241
10次調査	御本寺	東西および南北方向の堀、塀、柵。	2005.1.17 ～3.18	「Ⅳ 山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局	2006.3	04S445
11次調査	御本寺	土塁基底部。	2005.3.1 ～3.15	「Ⅴ 山科本願寺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局	2006.3	04S170
12次調査	御本寺	土塁内側斜面と暗渠。	2005.5.11 ～5.25	『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-3 財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2005.3	04S572
13次調査	御本寺	土塁屈曲部、泉状遺構、炉、土取穴、暗渠。	2005.5.30 ～7.2	「Ⅵ 山科本願寺跡（3）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局	2006.3	05S067
14次調査	御本寺	焼成土坑、庭園遺構、柱列、多量の輸入陶磁器、ガラス玉出土。	2005.11.11 ～12.16	「Ⅶ 山科本願寺跡（4）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局	2006.3	05S295
15次調査	御本寺	御本寺南を限る堀、土坑、井戸、鍛冶場跡、溝。	2006.7.31 ～9.15	『山科本願寺跡・左義長町遺跡-西野左義長町の調査-』古代文化調査会	2021.9	05S640
16次調査	御本寺	整地面、焼土の堆積、通路状遺構。	2011.1.11 ～3.11	「Ⅳ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成23年度』京都市文化市民局	2012.3	—
17次調査	御本寺	整地面、石組溝、土塁など。	2011.7.21 ～9.30	「Ⅳ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成23年度』京都市文化市民局	2012.3	—
18次調査	御本寺	石組井戸、風呂関連遺構群、塀状遺構、土塁など。	2012.7.17 ～10.4	「Ⅴ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成24年度』京都市文化市民局	2013.3	—
19次調査	外寺内	中世の盛土または整地土、平安時代中期の建物、溝、土坑など。山科本願寺期の明確な遺構は確認できず。	2013.10.28 ～11.25	「Ⅸ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告平成25年度』京都市文化市民局	2014.3	13S247
20次調査	御本寺	整地土、土塁裾部。	2014.1.20 ～2.7	「Ⅱ 山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成26年度』京都市文化市民局	2015.3	—
21次調査	御本寺	整地面、土塁、堀、溝、柱穴など。	2014.7.22 ～9.30	「Ⅲ 山科本願寺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告平成26年度』京都市文化市民局	2015.3	14A001
22次調査	御本寺	建物、埋甕、土坑などの酒造遺構、堀。	2015.7.30 ～9.18	『山科本願寺跡・左義長町遺跡-建替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』イビソク京都市内遺跡調査報告第14輯 株式会社イビソク	2017.3	14S612
23次調査	御本寺	整地土、柵、土坑など、土塁地形測量及び断面観察。	2018.12.3 ～12.27	本報告・「Ⅵ 山科本願寺跡（23次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和元年度』京都市文化市民局	2020.3	18A007
24次調査	御本寺	土塁の形状と基底部の構築状況を調査。	2019.12.9 ～12.19	本報告・「Ⅶ 山科本願寺（24・25次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局	2021.3	19A008
25次調査	御本寺	土坑、井戸、整地土など。	2020.6.1 ～6.30	本報告・「Ⅶ 山科本願寺（24・25次）」『京都市内遺跡発掘調査報告令和2年度』京都市文化市民局	2021.3	20A001
26次調査	御本寺	東西方向の堀、地下室、建物、土取穴、炉状遺構など。	2021.5.10 ～7.20	『山科本願寺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2021-6 公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所	2022.1	20S644
27次調査	御本寺	土坑など。	2021.9.1 ～9.30	本報告のみ	2022.3	21A007

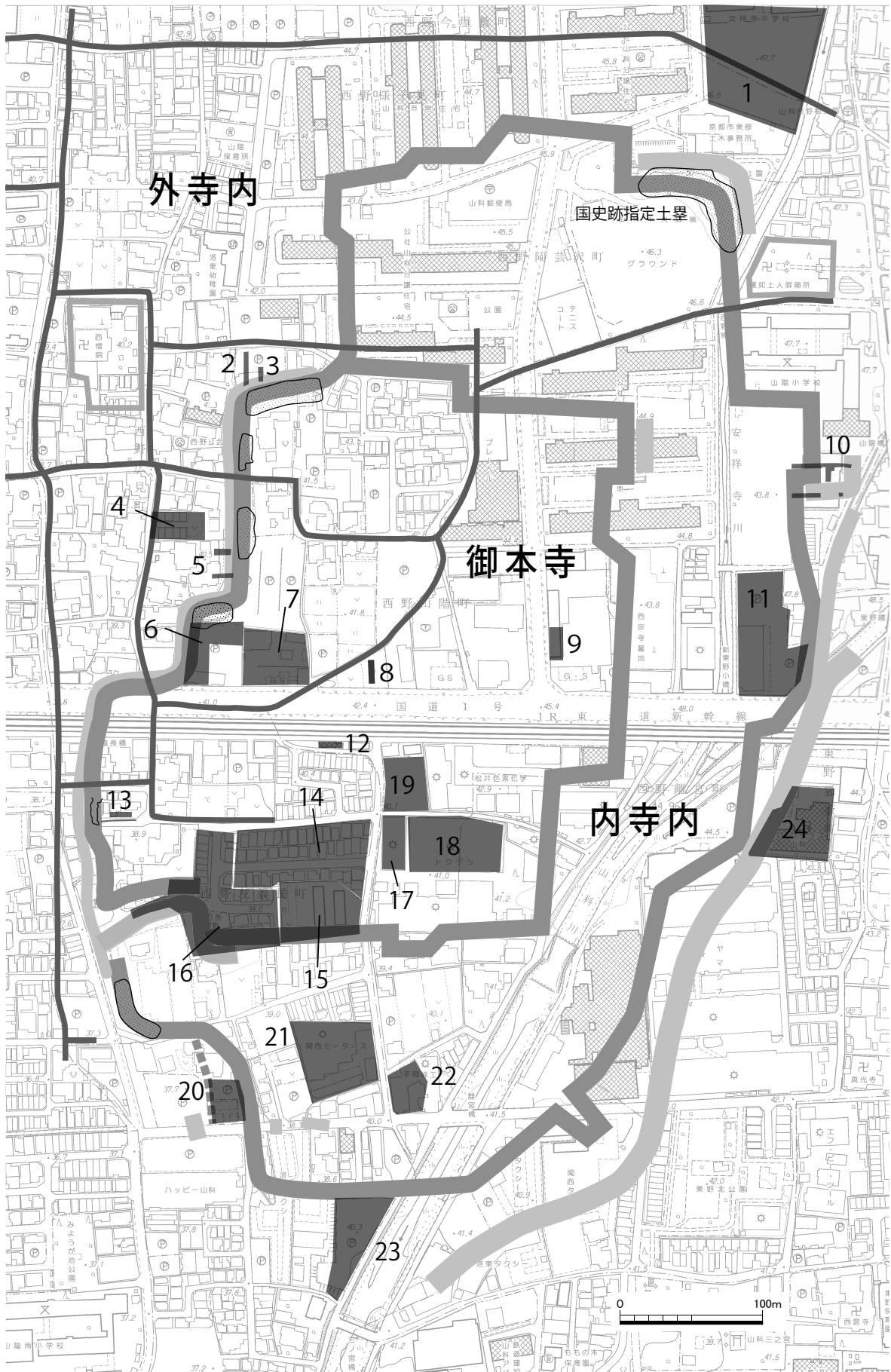


図78 試掘調査位置図 (1:4,000)

表4 試掘調査一覧表

掲載地図No	調査No	区域	概要	掲載報告書	発行年	備考
1	17S193	外寺内	GL-1.2mで灰黄色褐色粗砂（洪水堆積）、-1.3mでオリブ褐色粘土質シルト（地山）。	一覧表No.103『京都市内遺跡試掘調査報告平成29年度』京都市文化市民局	2018.3	一覧表
2	07S274	外寺内	調査区の南端で土塁跡の北肩、GL-0.5～0.7mで遺構面を検出した。	一覧表No.88『京都市内遺跡試掘調査報告平成19年度』京都市文化市民局	2008.3	一覧表
3	07S275	外寺内	調査区の南端で土塁跡の北肩、GL-0.6mで遺構面を検出した。	一覧表No.89『京都市内遺跡試掘調査報告平成19年度』京都市文化市民局	1984.3	一覧表
4	98S337	外寺内	表土直下が地山となり、遺構・遺物とも発見できず。	一覧表No.64『京都市内遺跡試掘調査概報平成10年度』京都市文化市民局	1999.3	一覧表
5	05S208	外寺内	御本寺西側を限る濠の西肩口を検出。	「V-2山科本願寺跡No.80」『京都市内遺跡試掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局	2006.3	P20～
6	04S170	御本寺	土塁上半はすでに削平されているが、下半が完全に残っていることを確認。発掘を指示。	一覧表No.77『京都市内遺跡試掘調査概報平成16年度』京都市文化市民局	2005.3	一覧表・11次調査
7	12S342	御本寺	2次調査における遺構保存範囲を確認。一部を除いて遺構面が良好に遺存していることを確認。	一覧表No.96『京都市内遺跡試掘調査報告平成24年度』京都市文化市民局	2013.3	一覧表・2次調査区一部再掘削
8	08S103	御本寺	GL-0.4mで整地層、顕著な遺構・遺物なし。既に削平か？	「V-3山科本願寺跡No.85」『京都市内遺跡試掘調査報告平成20年度』京都市文化市民局	2009.3	P58～
9	81RT016	御本寺	盛土・耕作土のみ。	京都市内遺跡試掘・立会調査報告昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1982.3	一覧表
10	91試掘 (91RT-AH001)	外寺内	土塁と堀の屈曲部。	「山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概要平成3年度』京都市文化観光局	1995.3	一覧表
11	02S414	内寺内	GL-2.0m以上、現代盛土、遺構面はその下に遺存。基礎深度が浅く、遺構への影響はない。	一覧表No.13『京都市内遺跡試掘調査報告平成15年度』京都市文化市民局	2003.3	一覧表
12	89RT021	御本寺	GL-0.5mにて東西石組み溝。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市観光局	1991.3	P19～
13	99S241	御本寺	GL-0.2～0.4mで焼土などを含む複数の土坑を検出。H9・10年度に発掘した土塁の続きを測量。	「X山科本願寺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告平成11年度』京都市文化市民局	2000.3	P26～・9次調査
14	96S273	御本寺	GL-0.5mで焼土および中世～近世の土器・瓦を含む整地層。	一覧表No.64『京都市内遺跡試掘調査概報平成8年度』京都市文化市民局	1997.3	一覧表
15	05S640	御本寺	敷地中央より東側で山科本願寺跡の溝、柱穴等を検出。発掘調査を指示する。	一覧表No.101『京都市内遺跡試掘調査報告平成18年度』京都市文化市民局	2007.3	一覧表・15次調査
16	96S473	御本寺	本願寺の土塁の延長や、焼土層、路面等、具体的に寺内町の家屋配置と遺跡全体の区画の推定が可能な遺構を検出。発掘調査を指導する。	一覧表No.17『京都市内遺跡試掘調査概報平成9年度』京都市文化市民局	1991.3	一覧表・6次調査
17	88RT038	御本寺	GL-1.6mにて室町後期の土坑4。	一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度』京都市観光局	1991.3	一覧表
18	14S612	御本寺	GL-0.8mで南北14m以上、幅約1mの溝を確認。焼土と炭を含んでおり、出土した土器などから山科本願寺跡に伴う遺構と考えられる。遺構面が良好に遺存していることから、計画範囲の北西部については発掘調査を指導。それ以外の箇所に関しては、H27年度詳細分布調査報告書を参照。	一覧表No.95『京都市内遺跡試掘調査報告平成27年度』京都市文化市民局	2019.3	一覧表・22次調査
19	20S644	御本寺	GL-0.4～-0.6mで整地土、-0.6～-0.8mでオリブ褐色シルトの地山に至る。東西方向の溝、堀、土坑、柱穴などを確認。発掘調査を指導。	一覧表No.270『京都市内遺跡試掘調査報告令和3年度』京都市文化市民局	2022.3	一覧表・26次調査
20	13S247	御本寺	GL-0.7mで地山。山科本願寺期の遺構を確認。発掘調査を指導。	一覧表No.109『京都市内遺跡試掘調査報告平成25年度』京都市文化市民局	2014.3	一覧表・19次調査
21	13S569	内寺内	GL-2.0m以上まで解体攪乱。	一覧表No.14『京都市内遺跡試掘調査報告平成26年度』京都市文化市民局	2015.3	一覧表
22	18S219	内寺内	現代耕作以下、GL-1.2～2.0mで河川氾濫堆積を確認。顕著な遺構・遺物なし。	一覧表No.138『京都市内遺跡試掘調査報告平成30年度』京都市文化市民局	2019.3	一覧表
23	06S464	外寺内	GL-1.6m以下、河川の氾濫堆積、外堀や土塁の端部は確認できず。	一覧表No.102『京都市内遺跡試掘調査報告平成18年度』京都市文化市民局	1985.3	一覧表
24	84RT053	外寺内	GL-0.45mにて近世の土坑10。	一覧表『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和59年度』京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1985.3	一覧表

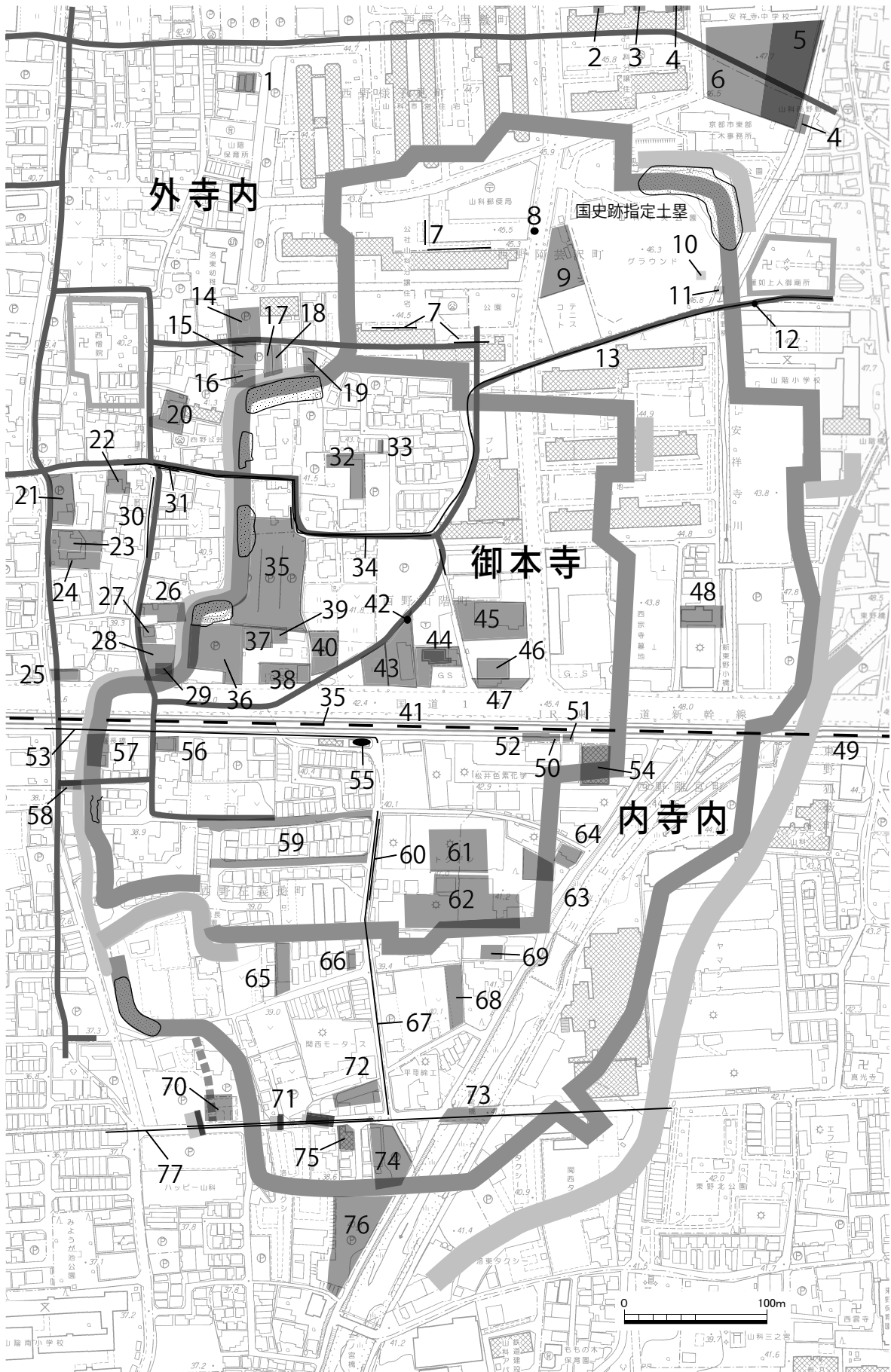


図79 詳細分布 (立会) 調査位置図 (1 : 4,000)

表5 詳細分布(立会)調査一覧表1

掲載地図No	立会No	区域	概要	掲載報告書	発行年	掲載状況
1	80RT027	外寺内	表土下, 120cm近現代層, 下層は茶褐色土の無遺物層。遺構・遺物の検出なし。	「京都市内遺跡試掘・立会調査概報昭和55年度」京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1981.3	一覧表
2	95RT389	外寺内	地表下0.65mで包含層, 土師器片。-1.35m以下, にぶい黄褐色粘土の無遺物層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成8年度」京都市文化市民局	1997.3	一覧表
3	12RT338	外寺内	巡回時, 工事終了。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成24年度」京都市文化市民局	2013.3	一覧表
4	19RT501	外寺内	GL-0.55mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度」京都市文化市民局	2021.3	一覧表
5	85RT060	外寺内	盛土のみ。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和60年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1986.3	一覧表
6	11RT324	外寺内	GL-0.55mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成24年度」京都市文化市民局	2013.3	一覧表
7	01RT366	内寺内	GL-0.7mまで現代盛土。	「京都市内遺跡立会調査概報平成14年度」京都市文化市民局	2003.3	一覧表
8	96RT417	内寺内	GL-0.8mまで現代盛土。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成9年度」京都市文化市民局	1998.3	一覧表
9	88RT042	内寺内	盛土のみ。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度」京都市観光局	1991.3	一覧表
10	13RT245	内寺内	GL-1.5mで褐色砂泥を検出。遺構・遺物は検出できず。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成25年度」京都市文化市民局	2014.3	一覧表
11	15RT005	内寺内	GL-1.9mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成28年度」京都市文化市民局	2017.3	一覧表
12	03RT335	外寺内	GL-0.56mまで現代盛土。	「京都市内遺跡立会調査概報平成16年度」京都市文化市民局	2005.3	一覧表
13	97RT034	内寺内 ～御本寺	No.1・2・5～8:-0.13m以下路面, 整地層。No.8:-0.58mで土坑(すさり焼土, 砥石), -0.6m以下, 黒褐色砂泥・砂礫の無遺物層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成9年度」京都市文化市民局	1998.3	一覧表
14	17RT335	外寺内	GL-0.25～0.37mで暗灰黄色泥砂。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度」京都市文化市民局	2018.3	一覧表
15	08RT042	外寺内	GL-0.14mまで現代盛土。	「京都市内遺跡立会調査概報平成20年度」京都市文化市民局	2009.3	一覧表
16	85RT075	外寺内	南への落込み有。北肩口の可能性あり。	未報告	未報告	未報告
17	07RT305	外寺内	GL-0.27mまで現代盛土。	「京都市内遺跡立会調査概報平成19年度」京都市文化市民局	2008.3	一覧表
18	10RT241	外寺内	GL-0.75mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成22年度」京都市文化市民局	2011.3	一覧表
19	15RT117	外寺内	GL-0.2mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度」京都市文化市民局	2016.3	一覧表
20	15RT199	外寺内	GL-0.27mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度」京都市文化市民局	2016.3	一覧表
21	11RT220	外寺内	No.2:-1.05m以下暗褐色砂礫の地山, No.3:-0.5m時期不明の土坑。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成23年度」京都市文化市民局	2012.3	一覧表
22	84RT081	外寺内	検出できず(GL-0.53mで黄灰色粗砂の礫)。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和60年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1986.3	一覧表
23	16RT534	外寺内	GL-0.3mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度」京都市文化市民局	2018.3	一覧表
24	16RT544	外寺内	GL-0.14mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度」京都市文化市民局	2018.3	一覧表
25	16RT100	外寺内	GL-0.4mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成28年度」京都市文化市民局	2017.3	一覧表
26	79RT313	外寺内	遺構・遺物なし。掘削底面浅い。	「京都市内遺跡試掘・立会調査概報昭和54年度」京都市文化観光局文化財保護課	1980.3	一覧表
27	88RT013	外寺内	検出できず。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度」京都市観光局	1990.3	一覧表
28	06RT518	外寺内	GL-0.3mまで現代盛土。	「京都市内遺跡立会調査概報平成19年度」京都市文化市民局	2008.3	一覧表
29	11RT327	外寺内	GL-1.45mで暗灰黄色砂泥を検出。遺構・遺物は検出できず。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成24年度」京都市文化市民局	2013.3	一覧表
30	82RT058	外寺内	GL-1mで褐灰色泥砂(径1～5cm大の礫入る), -1.5mで黄褐色砂礫。遺構・遺物なし。	未報告	未報告	未報告
31	86RT033	外寺内	GL-0.1m以下時期不明の路面3, -0.34mにて室町, 時期不明の土坑各1。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和61年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1987.3	一覧表
32	91RT109	御本寺	巡回時, 工事終了。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成3年度」京都市観光局	1997.3	一覧表
33	19RT320	御本寺	GL-0.55mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和元年度」京都市文化市民局	2020.3	一覧表

表6 詳細分布(立会)調査一覧表2

掲載地区No	立会No	区域	概要	掲載報告書	発行年	掲載状況
34	20RT417	御本寺	GL-0.9mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度」京都市文化市民局	2021.3	一覧表
35	20RT052	御本寺	史跡土塁の断面観察。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度」京都市文化市民局	2021.3	一覧表
36	05RT252	御本寺	GL-0.15m山科本願寺の土塁。	「京都市内遺跡立会調査概報平成17年度」京都市文化市民局	2006.3	一覧表
37	81RT008	御本寺	表土下0.85mにて室町後期、江戸前期の包含層。	「京都市内遺跡試掘・立会調査概報昭和56年度」京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1982.3	一覧表
38	83RT057	御本寺	GL-0.3m包含層、-0.9mでオリブ褐色泥砂の無遺物層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和58年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1984.3	一覧表
39	13RT155	御本寺	GL-1.45m時期不明の落込み。。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成25年度」京都市文化市民局	2014.3	一覧表
40	05RT021	御本寺	No.1:L=41.42m時期不明の包含層(土師器)No.2:L=41.72m山科本願寺に関する焼土層、L=41.64m山科本願寺に関する室町末期の整地層(土師器皿、輸入白磁、焼締陶器甕)。	「京都市内遺跡立会調査概報平成18年度」京都市文化市民局	2003.3	一覧表
41	89RT005	御本寺	GL-1.19mにて時期不明の包含層。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度」京都市観光局	1991.3	一覧表
42	12RT370	御本寺	GL-1.35mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成24年度」京都市文化市民局	2013.3	一覧表
43	08RT257	御本寺	No.1:BM-0.5m室町後半の包含層(土師器)、山科本願寺期の整地層、No.6:BM-1.47m以下褐色砂泥の地山。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成21年度」京都市文化市民局	2010.3	一覧表
44	86RT010	御本寺	GL-0.37mにて室町末の石組み東西溝。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1988.3	P45～
45	97RT210	御本寺	GL-0.7mまで現代盛土。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成9年度」京都市文化市民局	1998.3	一覧表
46	97RT199	御本寺	GL-1.4mまで現代盛土。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成9年度」京都市文化市民局	1998.3	一覧表
47	82RT002	御本寺	未確認、盛土のみ。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和57年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1984.3	一覧表
48	18RT002	内寺内	GL-0.67mで灰オリブ粘土の旧耕作土、-0.84～-0.97mでにぶい黄褐色泥砂の時期不明包含層。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成30年度」京都市文化市民局	2019.3	一覧表
49	1962立会	御本寺	南北方向の石組み溝、暗渠、南北方向の土塁。	「27.山科本願寺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』文化祭保護委員会	1965.3	P168～
50	20RT274	御本寺	GL-0.38mで黄褐色砂泥、-0.48～-0.6mで明黄褐色砂泥(炭含)の時期不明包含層。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度」京都市文化市民局	2008.3	一覧表
51	20RT275	御本寺	GL-0.6mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和2年度」京都市文化市民局	2021.3	一覧表
52	86RT061	御本寺	GL-1.16mにて時期不明の土坑3。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和62年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1988.3	一覧表
53	00RT055	御本寺	GL-0.43m室町の土坑(土師器皿、陶器插鉢、平瓦)	「平成12年度京都市内遺跡立会調査概報」京都市文化市民局	2001.3	一覧表
54	18RT367	御本寺	GL-0.85mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成30年度」京都市文化市民局	2019.3	一覧表
55	88RT005	御本寺	GL-1.3mで東西方向石組み溝を確認。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度』京都市観光局	1990.3	P17～
56	16RT546	御本寺	GL-0.4mで褐色泥砂(時期不明包含層)、-0.63mで暗オリブ褐色泥砂(時期不明包含層)、-0.81mでオリブ褐色シルト、-0.98mでオリブ褐色粘質シルト、-1.38～-1.58mで暗オリブ褐色礫混じり泥砂(地山)	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成29年度」京都市文化市民局	2018.3	一覧表
57	81RT045	御本寺	盛土のみ。	「京都市内遺跡試掘・立会調査概報昭和56年度」京都市埋蔵文化財調査センター・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1982.3	一覧表
58	85RT057	外寺内	検出できず。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和60年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1986.3	一覧表
59	98RT196	御本寺	GL-0.68mで耕作土。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成10年度」京都市文化市民局	1999.3	一覧表
60	10RT195	御本寺	GL-0.75m時期不明の包含層(土師器皿)。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成22年度」京都市文化市民局	2011.3	一覧表
61	15RT205	御本寺	H27年発掘調査で確認している室町の堀(SD229)の延長部を検出。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度」京都市文化市民局	2016.3	一覧表
62	16RT230	御本寺	No.14:GL-0.7mで灰黄色シルトの旧耕作土、-0.79m暗灰色砂泥(マンガン含、土壌化)、-0.8～-1.6m暗オリブ色シルトを切って灰オリブ色シルトの時期不明ビット。No.16:GL-1.05mで黄褐色シルト(小石、炭少量含)を切って灰黄褐色粘質土(礫、焼土、炭化物多量含)の室町土坑(土師器皿)、この土坑を切って灰黄褐色粘質土(礫、焼土、炭化物少量含)の時期、不明土坑、-1.8～-1.93mで黄褐色砂礫の地山。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成28年度」京都市文化市民局	2017.3	一覧表

表7 詳細分布（立会）調査一覧表3

掲載地図No	立会No	区域	概要	掲載報告書	発行年	掲載状況
63	88RT002	御本寺	GL-0.2m以下、流れ堆積。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報昭和63年度」京都市観光局	1990.3	一覧表
64	84RT005	内寺内	GL-0.35m以下、時期不明の流れ堆積。	「京都市内遺跡試掘立会調査報告昭和59年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1985.3	一覧表
65	86RT070	内寺内	GL-0.85mにて時期不明の包含層。	「京都市内遺跡試掘立会調査報告昭和62年度」京都市観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1988.3	一覧表
66	90RT032	内寺内	GL-0.78mにて室町の土坑。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成2年度」京都市観光局	1992.3	一覧表
67	98RT313	内寺内	GL-0.3m以下、暗褐色粘土の地山。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成10年度」京都文化市民局	1999.3	一覧表
68	96RT222	内寺内	地表下0.3mで中世の包含層、土師器皿、陶器甕、-0.44mで東西方向の溝（時期不明）、-0.7m以下暗褐色砂泥の無遺物層。	「平成8年度京都市内遺跡試掘立会調査概報」京都文化市民局	1997.3	一覧表
69	19RT344	内寺内	GL-0.7mまで盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告令和元年度」京都市文化市民局	2020.3	一覧表
70	15RT168	外寺内	GL-0.26mまで盛土、-0.4mまで灰黄褐色泥砂の時期不明の包含層、-0.43mまでオリーブ褐色泥砂の地山。この層を切って時期不明土坑（土師器皿）。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成27年度」京都市文化市民局	2016.3	一覧表
71	83RT061	外寺内 ～内寺内	I-6・10区にて室町時代の土塁とセットとなる外壕、井戸、土坑を確認。埋土に焼土を含む。	「昭和59年度京都市埋蔵文化財調査概要」財団法人京都市埋蔵文化財研究所	1987.3	P137～
72	89RT032	内寺内	盛土のみ。	「京都市内遺跡試掘立会調査概報平成元年度」京都市観光局	1991.3	一覧表
73	95RT092	内寺内	No.4：地表下2.5mでオリーブ褐色砂礫の無遺物層を切って室町の土坑、No.5：-2.95m以下流れ堆積。	「平成8年度京都市内遺跡試掘立会調査概報」京都文化市民局	1997.3	一覧表
74	11RT125	内寺内	GL-0.82mまで現代盛土。	「京都市内遺跡詳細分布調査報告平成23年度」京都市文化市民局	2012.3	一覧表
75	97RT228	内寺内	GL-0.68mで東西溝、古墳期らしい土師器。	「平成9年度京都市内遺跡試掘立会調査概報」京都文化市民局	1998.3	一覧表
76	09RT073	外寺内	BM-1.24mで褐色砂泥を検出。遺構・遺物確認できず。	「京都市内遺跡立会調査概報平成19年度」京都市文化市民局	2008.3	一覧表
77	98RT402	外寺内 ～内寺内	No.6：GL-0.41mで路面、No.10：-0.7mで黄褐色泥砂の地山を切って流路の東肩。	「平成10年度京都市内遺跡試掘立会調査概報」京都文化市民局	1999.3	一覧表

註

- この時期はまだ、大津に本山である親鸞影像があり、大津が「本願寺」と呼ばれていた。本山交代については未解明であるとのことだが、しかしこのような政権者の行為は、宗徒以外にも、竣工まぢかの坊舎が本願寺派の本山になるということを知らしめることとなったと考えられている。（神田千里『蓮如』日本史リブレット人041 山川出版、2012）。
- 『大日本古記録 二水記 四』 東京大学史料編纂所編 岩波書店、1997。
- 1石は一反。太閤検地後は1反が300坪（約1000㎡）。よって、20石×1000㎡=20000㎡ほど。現状の山科本願寺の寺域は南北約1km、東西約0.8km=800000㎡。回復した寺領は、現在想定している包蔵地の大きさの1/40程の規模と考えられる。
- 中村武生「山科本願寺・寺内町跡の近世・近代」『戦国の寺・城・まち』法蔵館、1998。
- 福島克彦「山科本願寺跡と武家政権」『戦国の武將と城 小和田哲男先生古稀記念論集』小和田哲男先生古稀記念論集刊行会、2014。
- 図35：京都府教育委員会『京都府遺跡地図 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所地地図』第4分冊、1972。
図36：京都市『京都市遺跡地図台帳 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図 昭和47年8月1日現在』、1972。
- 図37：京都市『京都市遺跡地図台帳 史跡・名勝・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在地図 昭和49年7月1日現在』、1974。

- 8) 「山科寺内町の遺跡 - 山科における史跡の保存調査 - 」『京都市文化観光資源調査会報告書』京都市文化観光局, 1976。
- 9) 図38:京都市『京都市遺跡地図台帳 昭和61年』, 1986。
- 10) 『戦国の寺・城・まち-山科本願寺と寺内町-』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館, 1998, 『本願寺と山科二千年』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館, 2003。
- 11) 図39:京都市『京都市遺跡地図台帳 平成15年』, 2003。
- 12) 図40:京都市『京都市遺跡地図台帳 平成19年』, 2007。
図41:京都市『京都市遺跡地図台帳 平成28年』, 2016。
- 13) 橋川正「第五 山科本願寺及其遺址」『京都府史蹟勝地調査會報告 第七冊』京都府, 1926。
- 14) 井口尚輔「中世城郭伽藍”山科本願寺”」『日本歴史』265, 1970。
- 15) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告第8集』国立歴史民俗博物館, 1985。
- 16) 『山科分布調査概報復刻版 第1次~第5次』橘大学考古学研究同好会, 2008。
- 17) 『京都橘大学文化財調査報告2009』京都橘大学文学部, 2010。『京都橘大学文化財調査報告 2010年』京都橘大学文学部, 2011。
- 18) 百瀬正恒「山科本願寺・寺内町の都市構造 - 発掘調査などの成果から - 」『本願寺と山科二千年』法藏館, 2003。3事例の調査成果を基に, 百瀬氏が, 町の構造について言及している。百瀬氏は文中で石組溝が暗渠であることを前提としているが, 報告書では, あくまで遺物の出土状況から暗渠である可能性が指摘されている事例があるのみで, 暗渠構造は確認されていない。
- 19) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復原」『国立歴史民俗博物館研究報告』第8集, 国立歴史民俗博物館, 1985。
山科本願寺1・2次調査の出土遺物の一部が, 京都大学にて保管・管理されていたため, 京都大学の協力を得, 資料の見学を行った。これを機に大学と協議を行い, 京都大学及び調査関係者が保管している遺物や図面などの資料について, 2022年4月以降は, 京都市文化財保護課にて保管・管理することとなった。
- 20) 「IV 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成23年度』京都市文化市民局, 2012。
- 21) 平安京左京六条二坊五町跡・猪熊殿跡・本圀寺跡SD166上層
:「平安京左京」六条二坊五町跡・猪熊殿跡・本圀寺跡『昭和54年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 2012。
左京五条三坊九町跡SK 8-18資料
:「14. 左京五条三坊(1)」『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1983。

参考文献

- 『京都市の地名』(『日本歴史地名大系』第27巻) 平凡社, 1979。
『史料 京都の歴史』第11巻 山科区 平凡社, 1988。
『戦国の寺・城・まち-山科本願寺と寺内町-』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館, 1998。
『本願寺と山科二千年』山科本願寺・寺内町研究会 法藏館, 2003。
『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院』柳原出版株式会社, 2007。

Ⅲ. 発掘調査の成果

先述の通り調査対象地は、それぞれ宗主空間北側，土塁，御影堂想定地であり，調査目的も異なる。このため以下では，調査目的ごとに区分し各調査を報告する。混乱を避けるため，既存調査の遺構番号・遺構の種別を踏襲する。また必要に応じて，既存報告名に次数を加え（次数+既報告遺構名）で，個々を判別する。

1. 遺 構

(1) 宗主空間北側（23次駐車場部分）

調査地は奥田家東側の駐車場部分（23次調査1区）にあたり，宗主空間の北端に位置する。以下，主要遺構について報告する。なお調査地の都合上，反転にて調査（北西側：1区，南東側：2区）を行った。

基本層序は，アスファルト・砕石・現代盛土の下，厚さ0.2～0.4mの近世包含層を挟み，GL-0.6mで整地土と考えられる暗褐色粘質土ブロックや炭化物が混じる黒褐色粘質土，GL-0.8～-0.9mで小礫混じりの黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質シルトの地山

に至る。整地土と考えられる堆積土は，調査区の北西部に部分的にしか確認できず，面的に広がりを確認することはできなかった。このため，整地土部分は層位関係の把握に留め，地山上面で遺構検出を行なった。遺構検出面の標高は，北壁で標高41.58m，南壁で41.38mと，北から南に緩やかに傾斜している。

検出した遺構は，土坑，柵，落込み（下層落込み），柱穴のほか，ピットなどである。先述したが，北壁沿いの一部で整地土を確認し，この上面で土坑1～3を検出している。また壁断面のみで

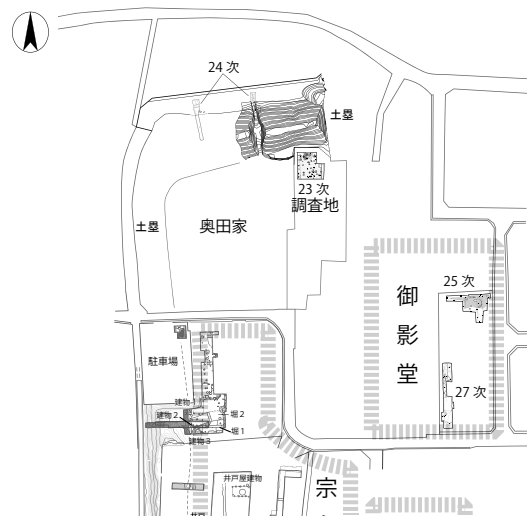


図80 23次 調査地位置図（1：2,400）

表8 遺構概要表（23次駐車場部分）

時 代	遺 構	備 考
室町時代以前	下層落込み	
室町時代	整地土，柵1～3，土坑42・43，ピット群	
江戸時代～近代	土坑1～3	

の確認となったが、西壁断面にて整地土（図83 - 11層）を切り込む柱穴（図83 - 9・10層）が確認できることから、調査区北側の一部の本来の遺構面は、整地土を挟んで2面存在していたと考えられる。しかし整地土の遺存範囲が狭く、遺構検出は整地土下にあたる小礫混じりの黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質シルトの上面で行った。

土坑1～3 調査区北西部で検出した土坑である。部分的に残る整地土の上面にて成立すると確実に判断できる遺構である。土坑1は南北1.6m、東西1.2m以上の方形で、深さ0.4mである。断面は緩やかな逆台形で、埋土は上下層に区分でき、上層はにぶい黄褐色粘質土、下層は拳大の礫を多く含む灰黄褐色粘質土である。土坑2は土坑1の東側に位置する。南北0.9m、東西0.8mの方形で、深さ0.2～0.25mである。埋土は拳大の礫が混じるにぶい黄色粘質土である。土坑3は土坑2の北西隅に重複する土坑である。直径0.5～0.6mで、深さ0.3mである。埋土は拳大の礫を多く含む浅黄色粘質土である。いずれの埋土にも拳大の礫が多く入る。

土坑42・43 調査区北壁中央部に並ぶ2基の土坑で、東側が土坑42、西側が土坑43である。土坑42は南北0.8m以上、東西1.3mの不整形な方形で、深さ0.5mである。断面は逆台形で、埋土は土器や炭化物を多く含む灰黄褐色粘質土である。土坑43は南北1.0m、東西0.9mのやや不整形な円形で、深さ0.5mである。断面は逆台形で、埋土は炭化物や焼土片を含むにぶい黄褐色粘質土

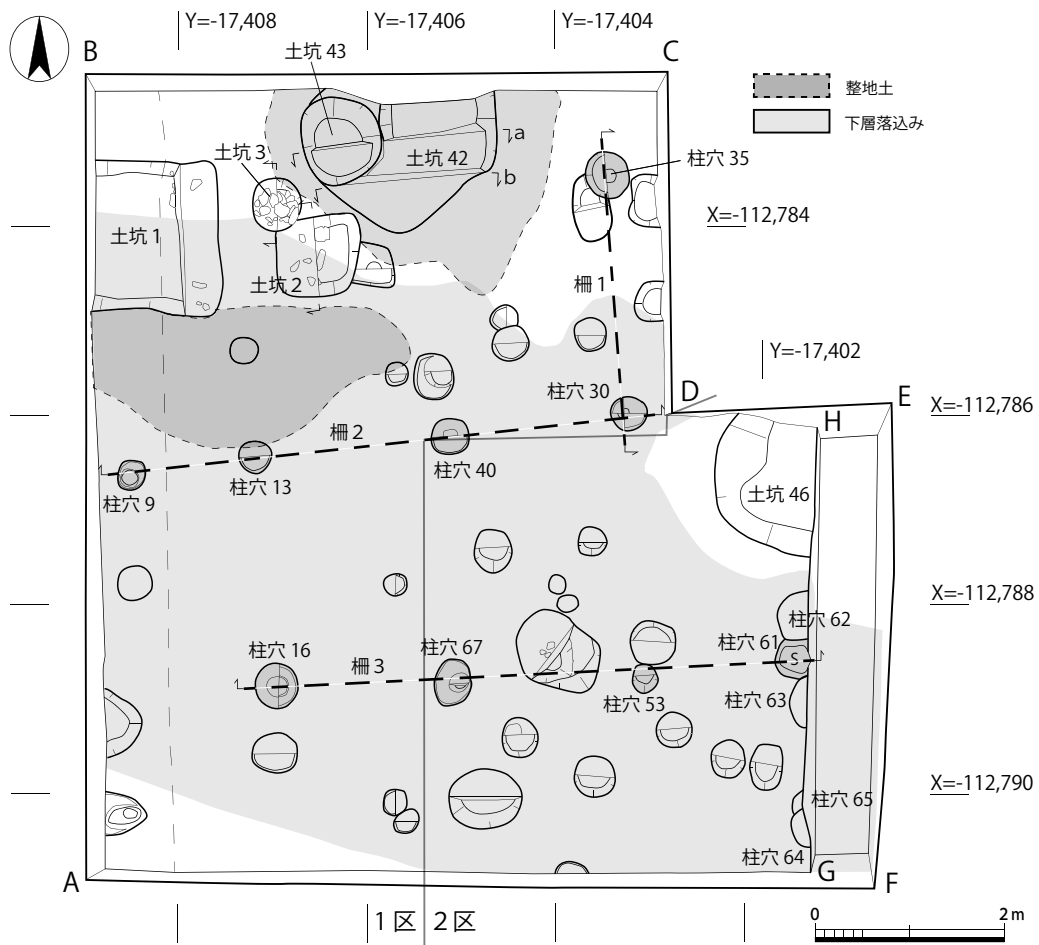
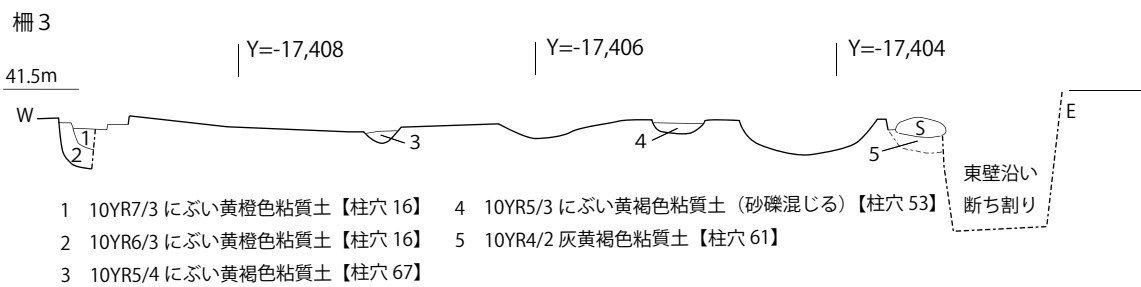
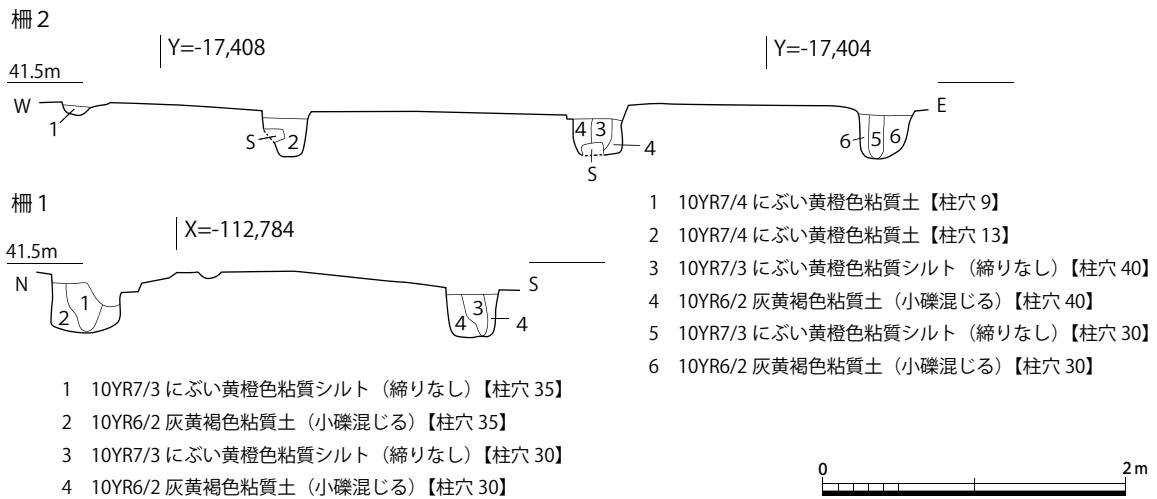
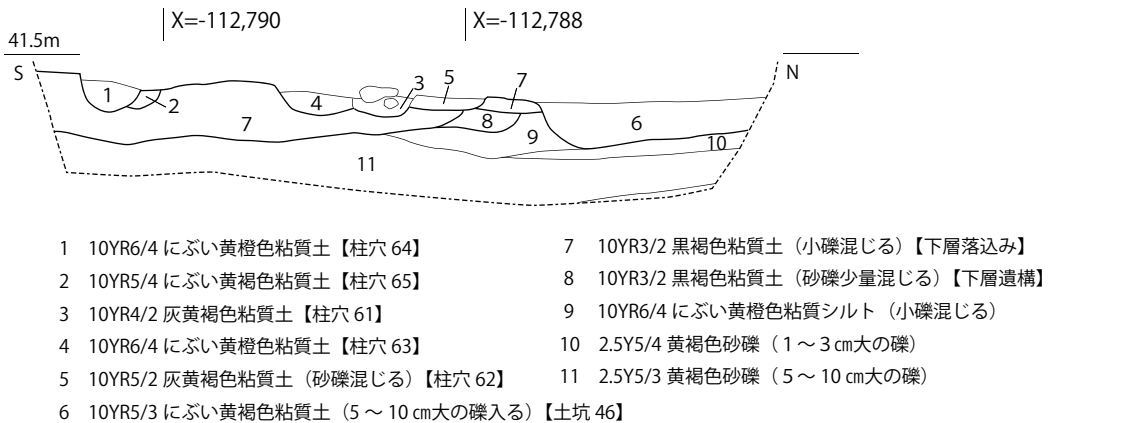


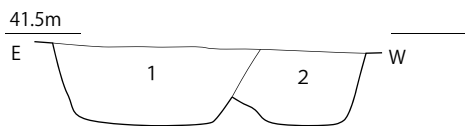
図81 23次 調査区平面図（1：80）



東壁沿い断ち割り (G-H)



土坑 42・43 (a)



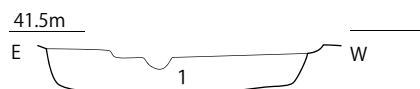
- 1 10YR6/2 灰黄褐色粘質土【土坑 42】
2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土（炭化物・焼土片含む）【土坑 43】

土坑 2



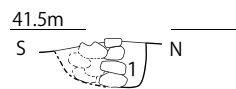
- 1 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土（炭化物・焼土片含む）【土坑 2】

土坑 42 (b)



- 1 10YR6/2 灰黄褐色粘質土【土坑 42】

土坑 3



- 1 2.5Y7/3 浅黄色粘質土【土坑 3】

図 82 23次 各遺構断面図 (1:50)

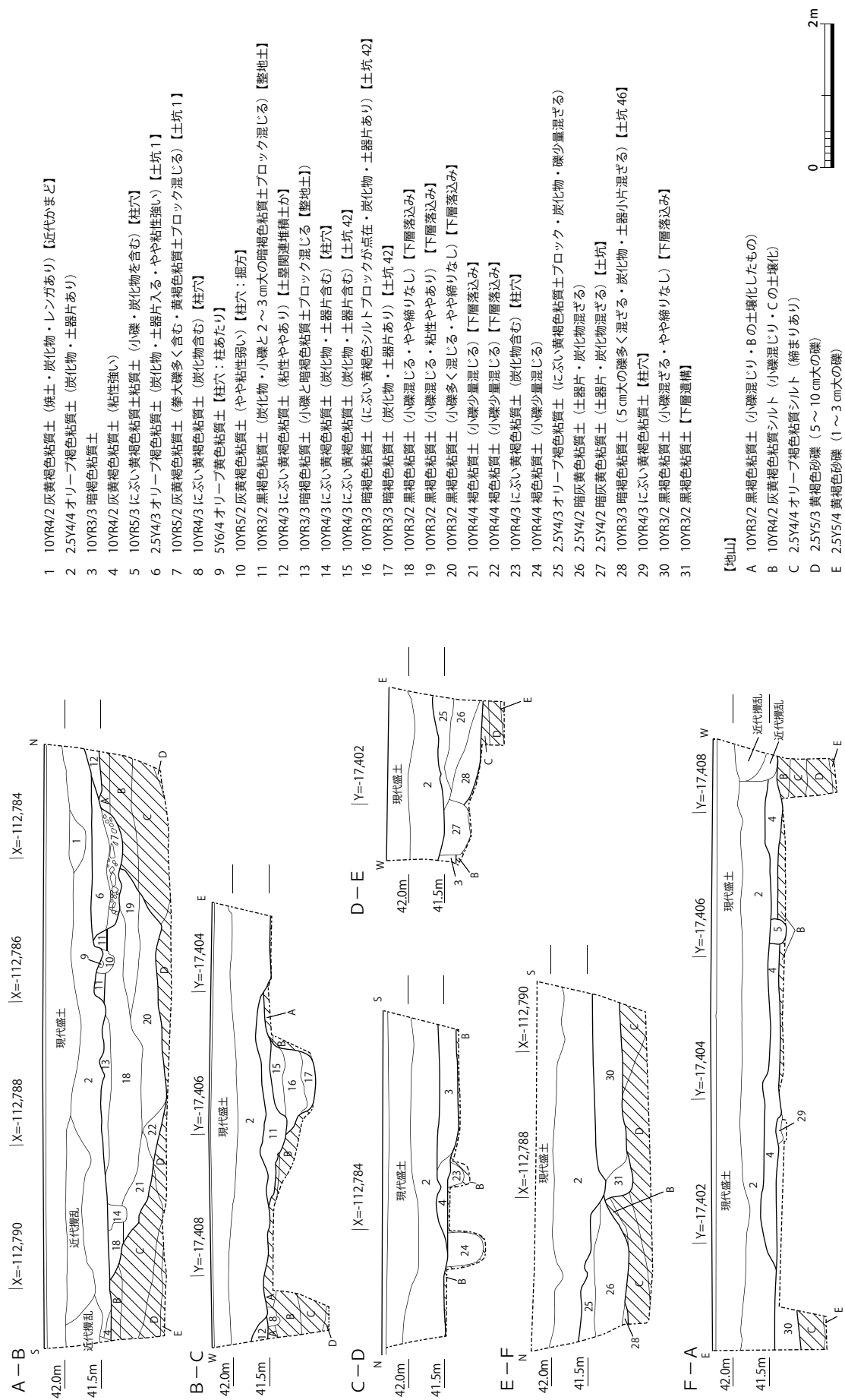


図83 23次 調査区断面図 (1:80)

である。両土坑とも遺物が確認できるが、特に土坑42からはまとまって出土している。埋土は単層であるが、上部に多くの遺物が確認できる傾向がある。

柵1～3 柵1は調査区の北東部、東壁沿いに位置する南北方向の柵（柱穴30・35）と考えられる。柱間は2.6m。両柱穴とも掘方と柱痕跡が確認できる。柵2は調査区の中央部で検出した3間以上の柵（柱穴9・13・40・30）である。柱間は柱穴9－13間は1.3m、柱穴13－40間は2.1m、柱穴40－30間は1.8mと不揃いである。柱痕跡や根石が確認できるものもある。柵3は調査区の中央部やや南で検出した3間以上の柵（柱穴16・67・53・61）である。柱間は1.8mと等間隔である。柱痕跡が確認できるものもある。

下層落込み 調査区の北西から南東方向にのびる落込みである。平面形は溝状にもみえるが、肩部は不定形で、幅4～6m、深さ0.4～0.9mである。断面は逆台形と認められるか所があるが、一様ではない。埋土は西側の方が厚く、東側の方が薄い。埋土は西壁では少なくとも3回の作業単位が確認できるが、東壁では1回分しか確認できない。埋土は基本、小礫の混じる黒褐色粘質土で、一部地山に似た小礫を含む褐色粘質土が確認できるが締りがなく、確認できる小礫の並びに規則性は見いだせない。小礫自体も角があるものや丸いものなど多様で、どの層も自然堆積とは考えにくい。人為的に埋められたものとする。底の標高は西壁沿いで41.6m、東壁沿いで40.9mとやや東に下る。このため、谷や落込みなど、もともとの地形を整地作業の一環として人為的に埋めた可能性を検討したが、表層をめくると肩口がしっかりとしており、また確認した箇所は掘削底が砂礫層（図83-D・E層）で止まっていること、最下層に溝として機能していた時に生じる自然堆積層が確認できなかったこと、対象地内で確認している地山が粘質土や粘質シルトなど（図83-A～C層）、土塁構築土に適すると考えられる土であることから、土塁形成時に土取りとして利用され、その凹みを埋めた痕跡の可能性はある。形状が溝状になっているのは効率向上のため、土塁に沿って掘削をしたと考えられる。埋土にはわずかに弥生土器片が確認できたのみで、遺物はほぼ含まない。

下層遺構 下層落込みの北肩口で確認した土層で、調査区東壁断面の31層（図83-31層）に相当する。上面の大半が下層落込みと重複しているため、平面検出時には確認できず、東壁の断割りを行い断面観察により確認したが、平面形状は不明である。埋土は黒褐色粘質土で、小礫はほとんど含まない。このため下層落込みではなく、別遺構である可能性が高い。埋土から弥生土器の細片がわずかに出土している。遺構の性格は不明である。

ピット群 調査区全体で41基の柱穴を確認した。段下げ後、必要に応じて半裁を行ったが、埋土は単層で、遺構深度は浅いものが多い。遺物は細片で量も少なく、埋没時期の決定を行えるものは少ない。直線的に並ぶものについては柵（柵1～3）として復元を試みたが、今回の調査区内では、建物などを復元するには至らなかった。

(2) 現存土塁 (23次測量部分・24次調査)

現存土塁部分の調査は、2年度にわたり調査を行なった。23次調査駐車場部分の北側に位置する東西方向の現存土塁の平面測量および、既に設けられた南北方向の切通し部分の表面を覆う腐植土を除去し、東面と西面の一部で土層観察を行った。

23次測量部分 東西約29m、南北23mの範囲を平面測量した。土塁上面には様々な樹木が生息しており、その根や腐植土などにより一部改変されている部分もあるが、概ね土塁の形状が把握できる。現状確認できる土塁の裾幅は17～18mで

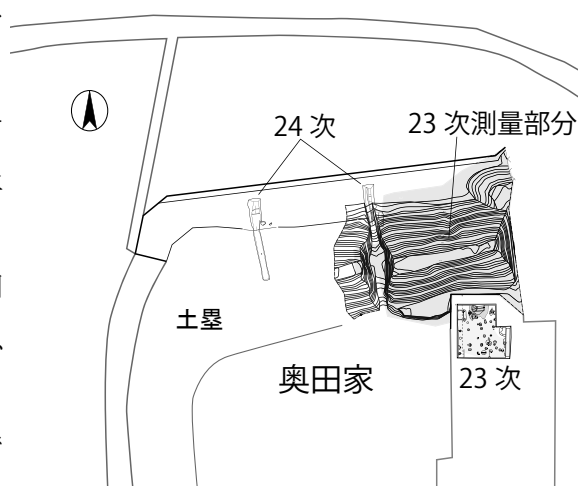


図84 23・24次 調査地位置図 (1:1,200)

ある。頂部には幅1.8～2.5mの人が行き交うことが可能な広さの平坦面が確認できる。主軸は約10度北に振る。標高は46.7～46.9mである。上面の平坦面北端より土塁北側裾部まで(土塁の外側)の幅は7～9m、上面の平坦面南端より土塁南側裾部まで(土塁の内側)の幅は5～6mとやや北側が広い。断面観察を行なった部分の頂部では46.85m、土塁内側の裾部で42.3m、土塁外側の裾部で41.85mと比高差は北側では約5m、南側では約4.55mとなる。また断面より推測できる傾斜角度は北側で35～36度、南側で53～54度である。

23次東側断面観察 東面の断面観察では、土塁の構築土は概ね粘質シルトや粘質土に小礫が混じる土で構成されている。しかし図86の30～32層は均一な粘質シルトを主体とし、粗砂を混ぜた同質の土を15～20cmの厚さで積み、固く締めている。またこの堆積を境に土の堆積方向が変化することから土塁の核(中心となる土台)である可能性がある。この核の外側に3～5cm大の礫を多く含む層と2～3cm大の礫を含む層を斜め積みし、この後、核を覆うように反対側に、3～5cm大の礫を多く含む層、その上に1～3cm大の礫を多く含む層、最後に、シルトを主体とした層を斜め積みする。南側の裾付近である図86の7・8層は均質なにぶい黄色粘質シルトが主体であり、堆積土の裾留めの役割をはたしていたと考えられる。それぞれの単位の厚みは60～70cmである。これらの単位内でも下位から上位に向かい、大きい礫から細かい礫、シルトブロックの混ざる目の細かい土へと変化する傾向があり、この単位も層厚が概ね20～30cmの3～4層に区分できる。同質の堆積土が重複している箇所もあったが、層に含まれる礫の堆積方向が異なることから、積み方の一単位として区分した。

表9 遺構概要表 (23次測量部分・24次)

時代	遺構	備考
室町時代	土塁構築土	
江戸時代～近代	土塁外濠	

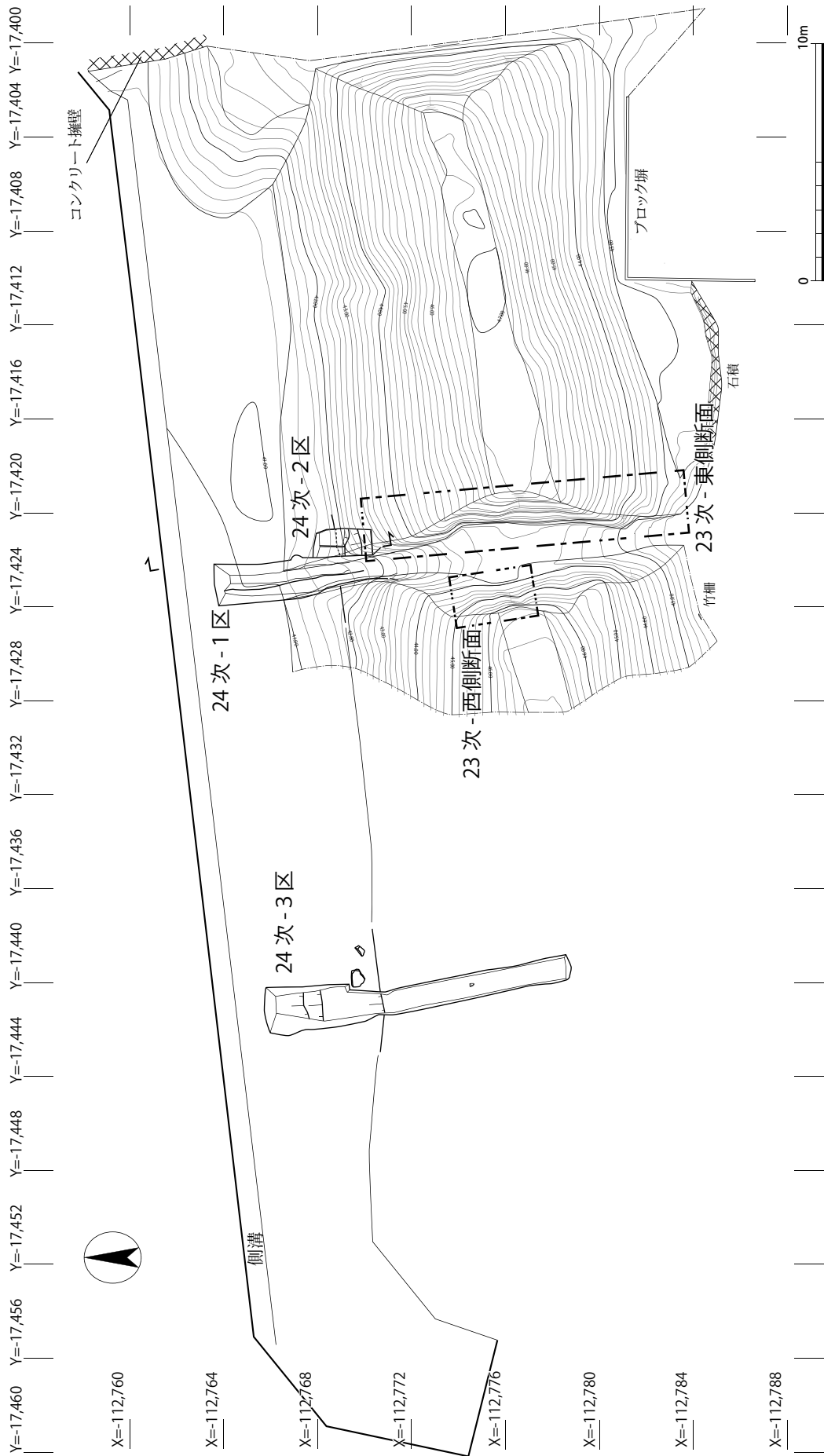
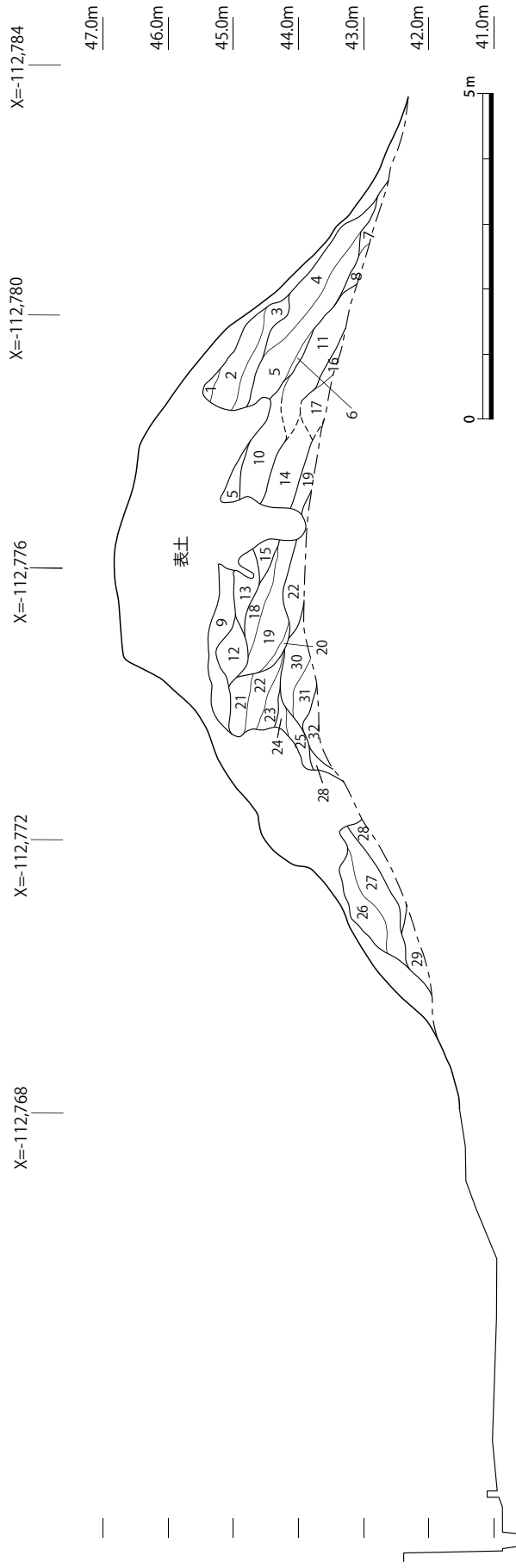


図85 23次 土塁地形測量平面図及び23・24次各調査区配置図 (1 : 250)



- | | |
|---|---|
| <p>1 2.5Y8/2 灰白シルト (5~10 cm大の淡黄色シルトブロックが点在)</p> <p>2 2.5Y8/3 淡黄色シルト (黄色シルトの拳大のブロックが点在)</p> <p>3 2.5Y8/3 淡黄色シルト (細砂混じり・黄色シルトの拳大のブロックが点在)</p> <p>4 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト (2~3 cm大の礫を多く含む)</p> <p>5 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト (細砂と3~5 cm大の礫を多く含む)</p> <p>6 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト (細砂が混じる)</p> <p>7 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト (1~3 cm大の礫を多く含む・締めあり)</p> <p>8 2.5Y7/4 浅黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を多く含む)</p> <p>9 2.5Y7/3 浅黄色粘質シルト (2~3 cm大の礫多く含む)</p> <p>10 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を多く含む・やや締めなし)</p> <p>11 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を少し含む・やや締めあり)</p> <p>12 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト (1~3 cm大の礫を含む)</p> <p>13 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (3~5 cm大の礫を含む・やや締めなし)</p> <p>14 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (3~5 cm大の礫を含む・締めあり)</p> <p>15 2.5Y6/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を少し含む・やや締めなし)</p> <p>16 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト (1~3 cm大の礫を多く含む)</p> | <p>17 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質シルト (1~3 cm大の礫を含む)</p> <p>18 2.5Y7/3 浅黄色粘質シルト (1~3 cm大の礫を多く含む)</p> <p>19 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト (1~2 cm大の礫を多く含む)</p> <p>20 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト (1~2 cm大の礫を含む)</p> <p>21 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を多く含む・やや締めなし)</p> <p>22 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を多く含む・やや締めなし)</p> <p>23 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト (3~5 cm大の礫を多く含む・やや締めなし)</p> <p>24 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (3~5 cm大の礫を多く含む・やや締めなし)</p> <p>25 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (3~5 cm大の礫を少し含む・やや締めなし)</p> <p>26 2.5Y7/3 浅黄色粘質土 (2~3 cm大の礫を多く含む)</p> <p>27 2.5Y7/3 浅黄色粘質土 (2~5 cm大の礫を多く含む)</p> <p>28 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (2~3 cm大の礫を多く含む・締めあり)</p> <p>29 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (2~3 cm大の礫を多く含む・締めあり)</p> <p>30 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト (5 cm大の礫を多く含む・シルトブロックが混じる)</p> <p>31 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト (5 cm大の礫を多く含む)</p> <p>32 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト</p> |
|---|---|

図86 23次 土塁東側断面図 (1:100)

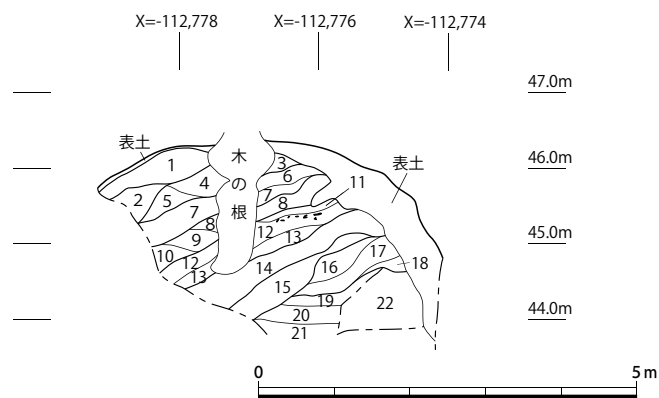
23次西側断面観察 西側の断面観察では東壁同様、3～5 cm大の礫を多く含む層、その上に1～3 cm大の礫を多く含む層、最後にシルトを主体とした層を斜め積みする。また、これらの単位内でも下位から上位に向かい、大きい礫から細かい礫、シルトブロックの混ざる目の細かい土へと変化する傾向があり、この単位の層厚は概ね20～30 cmに区分できる。全ての堆積が北から南へと傾斜しており、土塁内側へ向かって斜め積みされているものと考えられ、核にあたる堆積は確認できなかった。

このほか図87の12層には土器細片と少量の炭化物が確認できたが、この他の堆積土からは遺物などは確認できなかった。

24次調査では23次東壁断面の北側に続く形で、土塁北側の裾部から濠の状況を確認するため、切通しに続く形で調査区（24次 - 1区）を設けた。なお、24次 - 1区の補足調査として、土塁裾部分の一部を拡張し、平面確認を行った（24次 - 2区）。また、現存土塁西側の形状の把握と2007年の試掘調査成果を基に土塁外濠の規模を推定するための調査区（24次 - 3区）を設けた。

24次 - 1・2区（土塁）基本層序は、表土、近代盛土（図88 - 1）、近代盛土以前の旧表土（図88 - 6）、切通し形成時に積まれた土塁崩落土1・2（図88 - 7～16）、土塁崩落土3（図88 - 17～21）及び土塁崩落土4（図88 - 22～24）、土塁構築土（図88 - 25～30）、地山（図88 - 31～40）となる。なお土塁崩落土1・2は、切通し形成時に元の土塁を削平して生じたものも含まれている。

遺構検出は、近代盛土以前の旧表土上面（第1面）と土塁崩落土1・2を除去後（第2面）に行った。第1面では調査区の中央に現存切通しから続く当初の切通しが埋まった痕跡を確認した。第2面は土塁崩落土1・2を除去し、土塁崩落土3・4と土塁構築土を切り出した地山の形状を確認した。切通しの掘削は土塁側では構築土より深く、地山（41.1 m）にまで達し、調査区中央部（40.2 m）まで確認できた（図87）。調査中に土塁崩落土3・4を除去し、土塁形成時の形状を確認



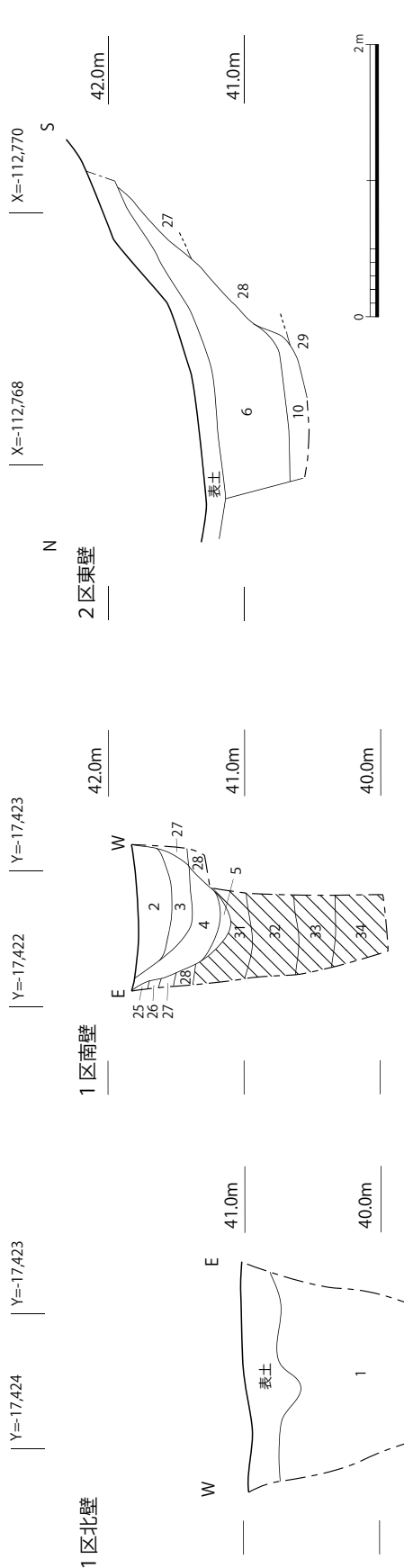
- 1 2.5Y8/2 灰白色シルト（5～10 cm大の淡黄色シルトブロックが点在）
- 2 10YR7/3 にぶい黄橙色粘質シルト（2～3 cm大の礫入る・締りあり）
- 3 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（3～5 cm大の川礫・灰黄色粘質シルトが少し混じる）
- 4 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（5～10 cm大の川礫）
- 5 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（10 cm大の川礫・灰黄色粘質シルトが混じる）
- 6 2.5Y6/2 灰黄色細砂混じり粘質シルト（2～3 cm大の礫多く混じる）
- 7 2.5Y6/2 灰黄色細砂混じり粘質シルト（2～3 cm大の礫混じる）
- 8 2.5Y8/4 淡黄色シルト（細砂混じる）
- 9 2.5Y8/4 淡黄色シルト（拳大のブロック状になったものが積み重なる）
- 10 2.5Y8/4 淡黄色シルト（細砂が混じり、拳大のブロック状になったものが積み重なる）
- 11 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質土
- 12 2.5Y7/4 浅黄色粘質土シルト（2～3 cm大の礫・土器片と炭化物を含む）
- 13 2.5Y7/4 浅黄色粘質土シルト（2～3 cm大の礫多く含む）
- 14 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（3～5 cm大の礫多く含む）
- 15 2.5Y7/2 灰黄色粘質シルト（2～3 cm大の礫多く含む）
- 16 2.5Y7/3 浅黄色砂礫（2～3 cm大の礫）
- 17 2.5Y7/3 浅黄色砂礫（5～10 cm大の礫）
- 18 2.5Y7/3 浅黄色砂礫（5～10 cm大の礫）
- 19 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（2～3 cm大の礫）
- 20 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（2～3 cm・5 cm大の礫）
- 21 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（2～3 cm大の礫）
- 22 2.5Y7/2 灰黄色砂礫（2～3 cm大の礫）に 2.5YR7/2 灰黄色粘質シルトが混じる

図87 23次 土塁西側断面図（1：100）



図88 24次-1区 東壁断面図（1：50）及び土塁東壁断面模式図（1：300）

認した。土塁崩落土3はその断面形状から濠埋土の可能性のあるものの、やや締まりのない小～中礫を多く含むにぶい黄色粘質土や灰黄色粘質土、その下はやや粘性のある灰黄色シルトとなる。今回確認した濠埋土では、明確に滞水していた痕跡は確認できなかった。しかし最下層でやや粘性のある灰黄色シルトを確認したことから、この層以下で滞水の様子が確認できる可能性がある。



- 1 5Y8/6 黄色粘土【近代盛土】
- 2 5Y5/1 灰色粘質土【切通し埋没土】
- 3 5Y7/4 浅黄色粘質土【切通し埋没土】
- 4 5Y5/2 灰オリーブ粘質土【切通し埋没土】
- 5 5Y6/2 灰オリーブ粘質土【切通し埋没土】
- 6 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 (3cm次の礫少量含む)【旧表土】
- 7 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (小礫わずかに含む)【土塁構築土の崩落土1】
- 8 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト (炭化物・細砂含む)【土塁構築土の崩落土1】
- 9 2.5Y4/1 黄灰色シルト (鉄分沈着あり)【土塁構築土の崩落土1】
- 10 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 (小礫多く含む・遺物有)【土塁構築土の崩落土2】
- 11 2.5Y7/4 浅黄色シルトまじり粘質土【土塁構築土の崩落土2】
- 12 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (小礫多く含む)【土塁構築土の崩落土2】
- 13 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (小礫多く含む)【土塁構築土の崩落土2】
- 14 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫多く含む・やや締まりなし)【土塁構築土の崩落土2】
- 15 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫～中礫多く含む・やや締まりなし)【土塁構築土の崩落土2】
- 16 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫～中礫多く含む・やや締まりなし・遺物有)【土塁構築土の崩落土2】
- 17 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫～中礫多く含む・やや締まりなし)【土塁構築土の崩落土3】
- 18 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫少し含む)【土塁構築土の崩落土3】
- 19 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (炭化物少し含む・遺物あり)【土塁構築土の崩落土3】
- 20 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (小礫入る)【土塁構築土の崩落土3】
- 21 2.5Y6/2 灰黄色シルト (粘質性ややあり)【土塁構築土の崩落土3】
- 22 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土【土塁構築土の崩落土4】
- 23 2.5Y7/4 浅黄色シルト (やや締まりなし)【土塁構築土の崩落土4】
- 24 2.5Y7/2 灰黄色粘質土 (小礫～中礫含む・やや締まりなし)【土塁構築土の崩落土4】
- 25 2.5Y6/2 灰黄色シルト【土塁構築土】
- 26 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト【土塁構築土】
- 27 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト【土塁構築土】
- 28 2.5Y6/4 にぶい黄色～7/6 明黄褐色シルト (締まりあり)【土塁構築土】
- 29 2.5Y6/4 にぶい黄色～7/6 明黄褐色粘質土 (小礫多く含む)【土塁構築土】
- 30 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫多く含む)【土塁構築土】
- 31 2.5Y8/2 灰白色～8/3 淡黄色礫【地山】
- 32 2.5Y8/2 灰白色～8/3 淡黄色礫【地山】
- 33 2.5Y8/2 灰白色～8/3 淡黄色礫【地山】
- 34 2.5Y8/2 灰白色～8/3 淡黄色礫【地山】
- 35 2.5Y8/6 黄色シルト (締まり有)【地山】
- 36 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫多く含む)【地山】
- 37 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫多く含む)【地山】
- 38 2.5Y7/6 明黄褐色シルト (締まりあり)【地山】
- 39 2.5Y6/3 にぶい黄色粘質土 (小礫多く含む)【地山】
- 40 2.5Y6/2 灰黄色シルト【地山】

図89 24次 - 1区 北・南壁断面図, 24次 - 2区 東壁断面図 (1:50)

土塁裾部分にあたる調査区の南端では、表土の下、GL-0.3 mで灰黄色シルトやにぶい黄色シルトなどの土塁構築土、-0.6 mで灰白～淡黄色の礫の地山を確認している。土塁裾部分では、地山の凹部分に構築土（図88 - 29・30）を充填し、地山とほぼ水平になった高さから、構築土をほぼ水平に積んでいること（図88 - 25～28）を確認した。また今回確認した東壁では土塁構築土が確認できるが裾が抉られるような形状をしている。西壁では崩落土下は地山となり構築土は確認できず、様相が大きく異なる。このため1区の東側の土塁裾部分を拡張し、平面確認を行った（24次 - 2区）。結果、24次 - 1区東壁の様相と同じく、土塁裾部分が抉られている状況が確認できたため、土塁裾部分は形成後、何らかの浸食を受けたと考えられる。

土塁構築土下で確認した灰白～淡黄色の礫や小礫を多く含む黄色シルトやにぶい黄色粘質土については、地山であるか明確に判別するため、断ち割り調査を行った。層序は上から下へ、小礫～礫、締まりのあるシルト、小礫と粘質土、礫と粘質土、シルトになる。締まりのあるシルトの上面には5～15cmの凹凸が見受けられ、上位層の礫が入り込んでいたことから、礫堆積時の浸食の痕と考えられる。この礫については、石粒の堆積方向から大きく4層に区分でき、それぞれの石面は概ね揃っている。この礫層自体は流れの強い河川堆積の結果と考えられる。この地は土塁形成以前にも礫が厚く堆積するほどの強い流れがあったと考えられることから、土塁裾部分が北東から西に向かって大きく抉られている要因も、何らかの強い流れによるものの可能性がある。

24次 - 3区（土塁外濠）土塁頂部から濠想定部分にかけて、土塁の形状を確認するために設定した調査区である。土塁部分は、厚さ0.1～0.25 mの表土直下で、土塁構築土を確認した。当該区は、形状把握が主目的の為、土塁構築土の掘削は行っていない。また土塁裾から濠想定部分については、表土、現代盛土の下、GL-2.4 m（38.4 m）で鉄分沈着のある灰オリーブ色粘質シルト、-2.5 m（38.3 m）で灰オリーブ色粘質シルト、-3.0 m（37.8 m）で細砂が混じる灰オリーブ色粘質シルトを確認し、-3.18 m（37.65 m）まで同層を確認した。安全管理上から、これ以下の掘削を取りやめた。濠部分では旧表土が途切れ、鉄分沈着のある灰オリーブ色粘質シルトとなる。東壁断面では南端に木杭の痕跡が確認できた。護岸のための杭の可能性がある。土塁裾を確認するため、一部断ち割りを行った結果、40.85 m以上では締まりのある黄色シルトの土塁構築土、40.85 m以下はにぶい黄色粘質土やシルトの地山を確認した。またこの構築土と地山が確認できた箇所の傾斜はきつく、平面でも傾斜角度の変化点を41.05 m地点で確認できる。この変化点が土塁と濠の境と考えられる。今回の土塁頂部は47.6 m、土塁裾は41.05 mとすれば、土塁高は6.55 mである。また、濠の底まで確認することはできなかったが、濠の深さは3.4 m以上あると考えられ、土塁頂部から現状確認した濠底までの比高は9.95 m以上となる。土塁構築土の傾斜は35度である。土塁南斜面である奥田家庭側の土塁は後世の作庭の影響で、段造成されており、やや土塁の形状が崩れている。頂部には幅2.3 mほどの人が行き交うことが可能な広さの平坦面が確認できる。

平成19年度に行った試掘調査¹⁾では、土塁の外濠北肩を検出している。土塁の外濠北肩は地山上面に堆積する無遺物の灰オリーブ泥砂を切り込んで形成されている。当時のKBMに標高をあて、今回の調査成果と勘案すると、検出高が41.0 mとなり、また濠の想定幅は11.4 mと考えられ

る(図91)。この調査成果を基に想定した土塁と濠の境と考えられる変化点の標高は41.05mであり、試掘調査で検出した濠の検出高と近い値を示すことから、断面、平面で確認できた傾斜角度の変化点は、土塁と濠の境であることが追認できる。

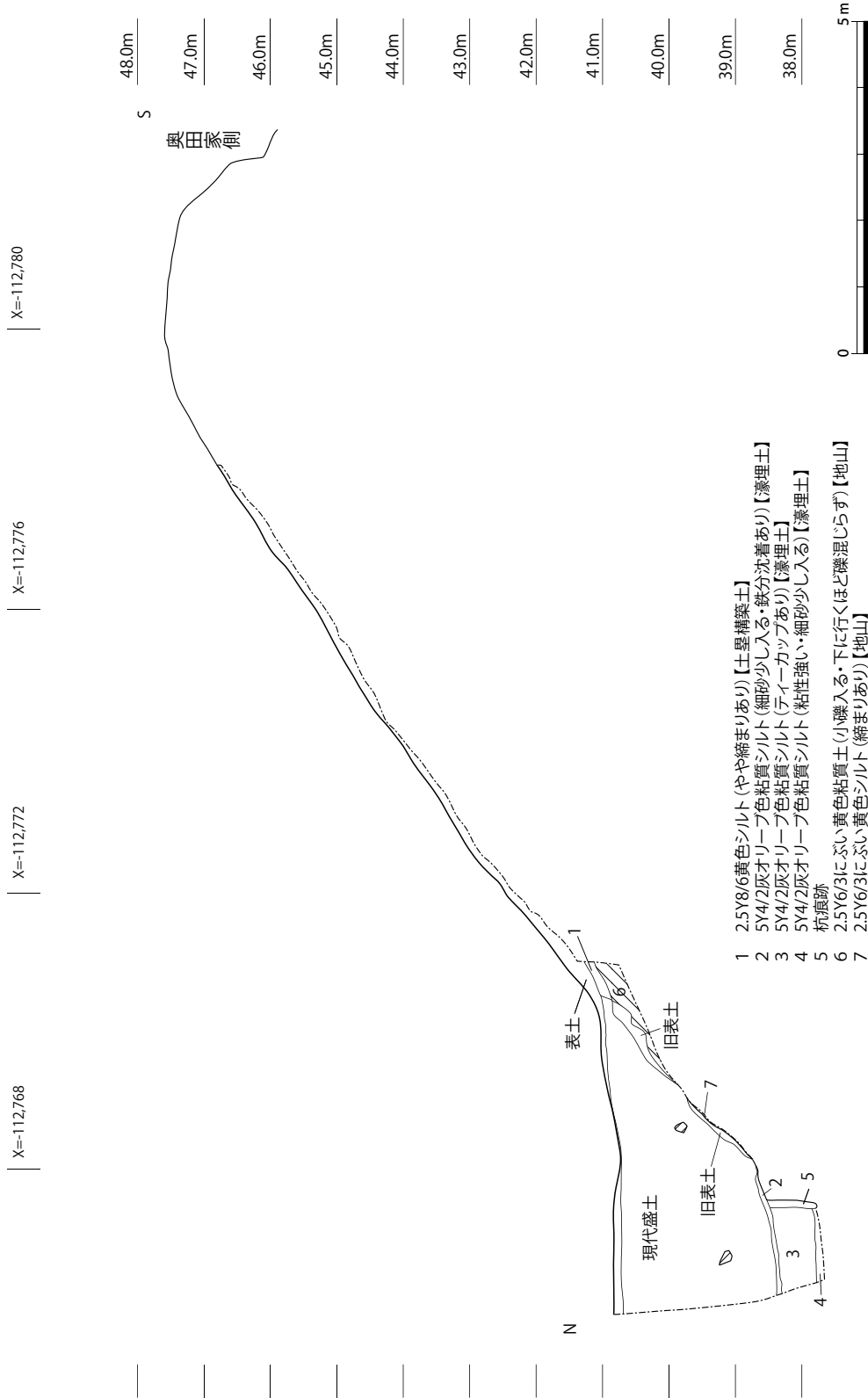


図90 24次 - 3区 東壁断面図 (1 : 100)

24次調査3区

X=-112,778

Y=-17,440

平成19年度試掘調査

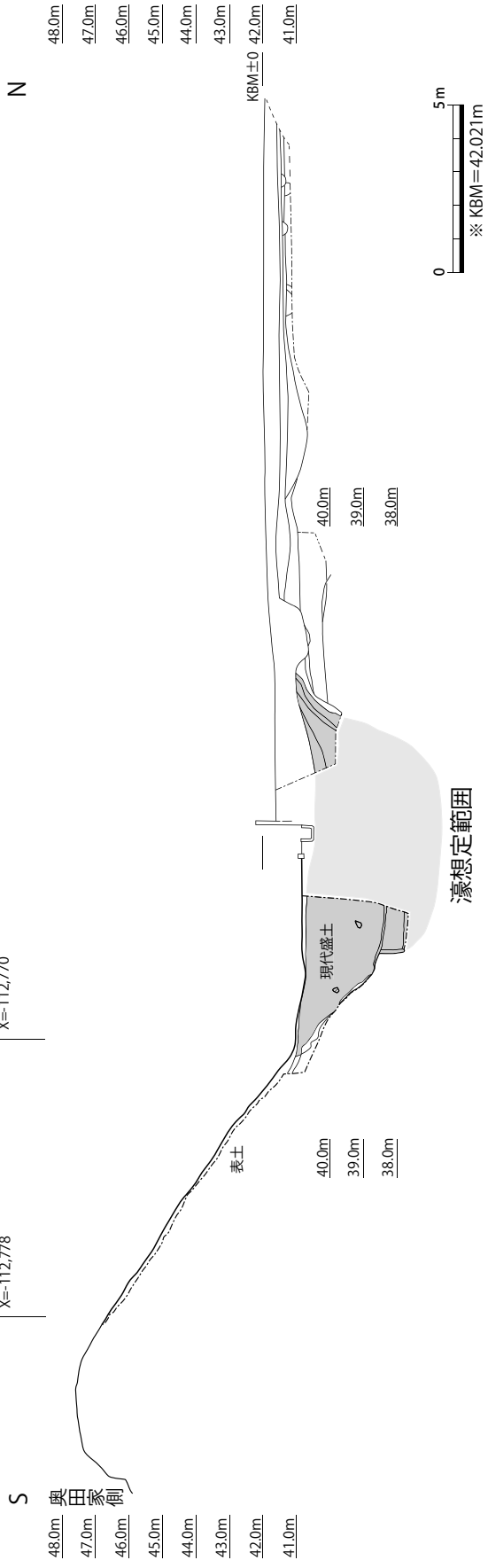
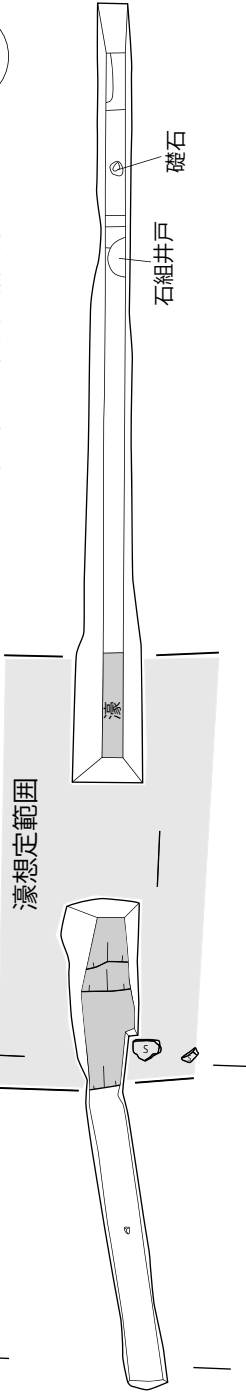


図91 24次調査と平成19年度試掘調査の合成図 (1:200)

(3) 御影堂想定範囲 (25・27次調査)

調査地は、御影堂想定範囲にあたる。調査区は、御影堂の東辺中央部 (25次調査)、南辺中央部 (27次調査) と想定できる範囲に設定した。また27次調査については、令和3年度に調査を実施したため、本報告以外の既存報告はない。以下、順に報告する。

御影堂想定範囲の東辺中央部 (25次調査)

基本層序は、アスファルト・現代盛土、旧耕土や床土の下、厚さ0.2～0.5mの近世包含層を挟み、GL-0.8mで黒褐色粘質土や灰黄褐色粘質土の整地土、-1.8mで浅黄色シルトの地山に至る。ただし整地土は調査区の北半のみに広がっており、南半では確認できず、近世包含層の下、GL-0.9mで灰白色砂礫や浅黄色シルトの地山に至る。遺構検出面の標高は、整地土上面での高さは北端で41.5m、南端で42.25mと北側がやや低くなっている。また整地土除去後の地山上面の高さは41.3mとなる。

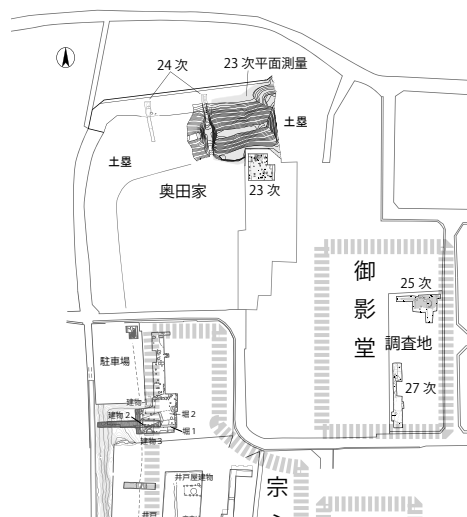


図92 25・27次 調査地位置図 (1:2,400)

遺構検出はまず整地土上面で行い、その後、北側に広がる整地土下の様相を確認するため、一部地山まで断ち割りを行い、地山上面で遺構検出を行った。検出した遺構は、整地土上面では土坑4基、地山上面では井戸1基である。

土坑8・9・10・11 調査区北半で検出した土坑である。土坑8～10は直径0.5～0.6mで、深さ0.05～0.15mである。埋土は上下二層に区分でき、上層は暗赤褐色細砂混じり粘質土、下層は暗褐色細砂混じり粘質土である。ともに焼土と小礫が少量含まれる。土坑8からは宋銭が1枚出土した。土坑11は東西1.0m、南北0.7mの楕円形で、深さ0.4mである。埋土は暗褐色粘質土である。上面には暗赤褐色細砂混じり粘質土がわずかに認められる。

整地土 調査区の北半に広がる整地土である。南から北へ向かう堆積で、概ね3～4層に区分できる。上部になるほど固く締まる。遺物は含まれるが、大半が小片である。調査区の西端、中央、断ち割り内にあたる東側の3ヶ所で南肩部の断面観察を行ったが、地山に対し緩やかな傾斜を確認した所と掘り込むような急傾斜の所があり、礫や砂質の強い地山部分が緩やかな傾斜で、シルトの地山部分が急傾斜である傾向がある。

表10 遺構概要表 (25次)

時代	遺構	備考
室町時代	井戸17, 整地土	
江戸時代	土坑8・9・10・11	

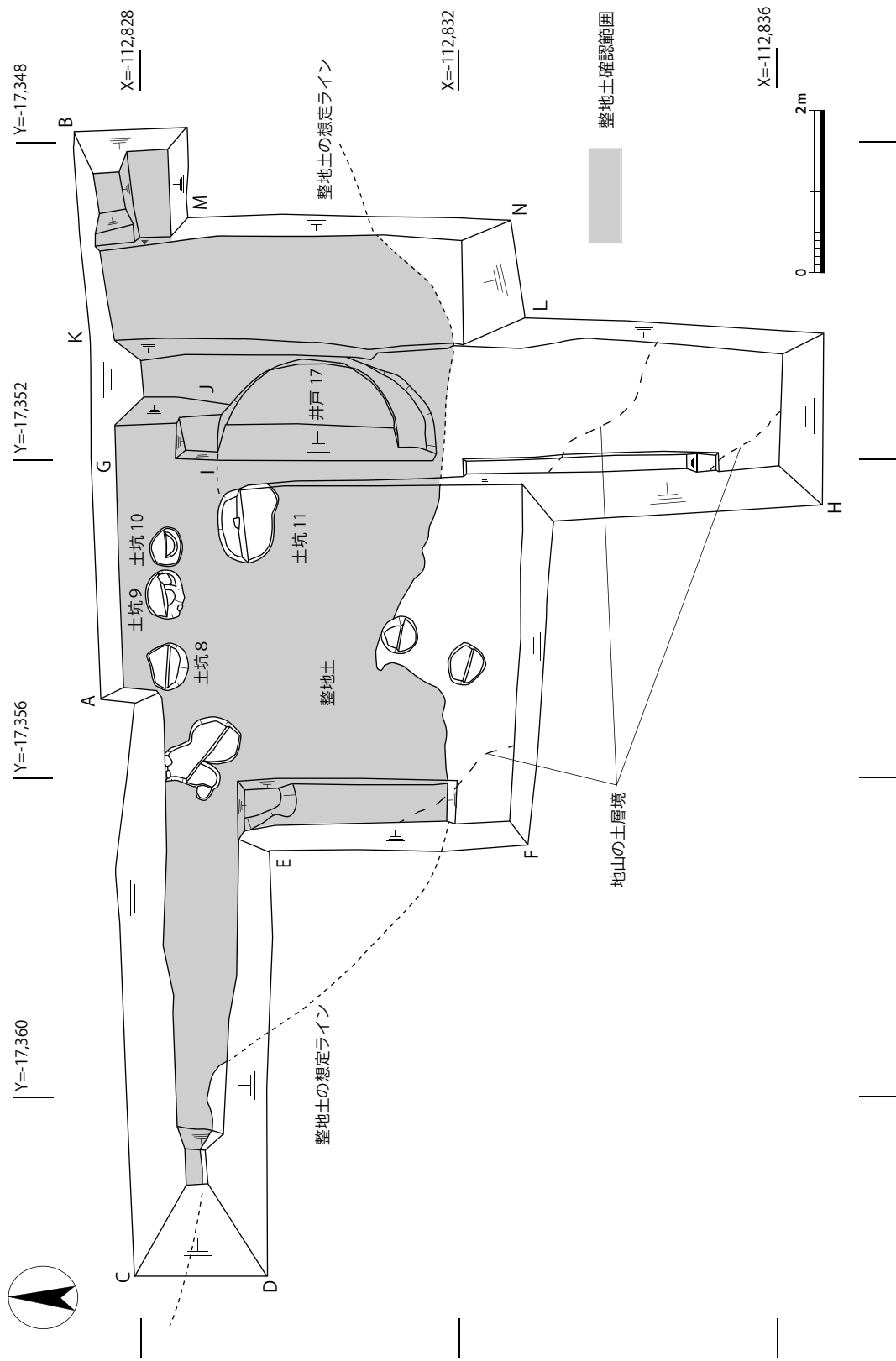


図93 25次 平面図 (1 : 80)

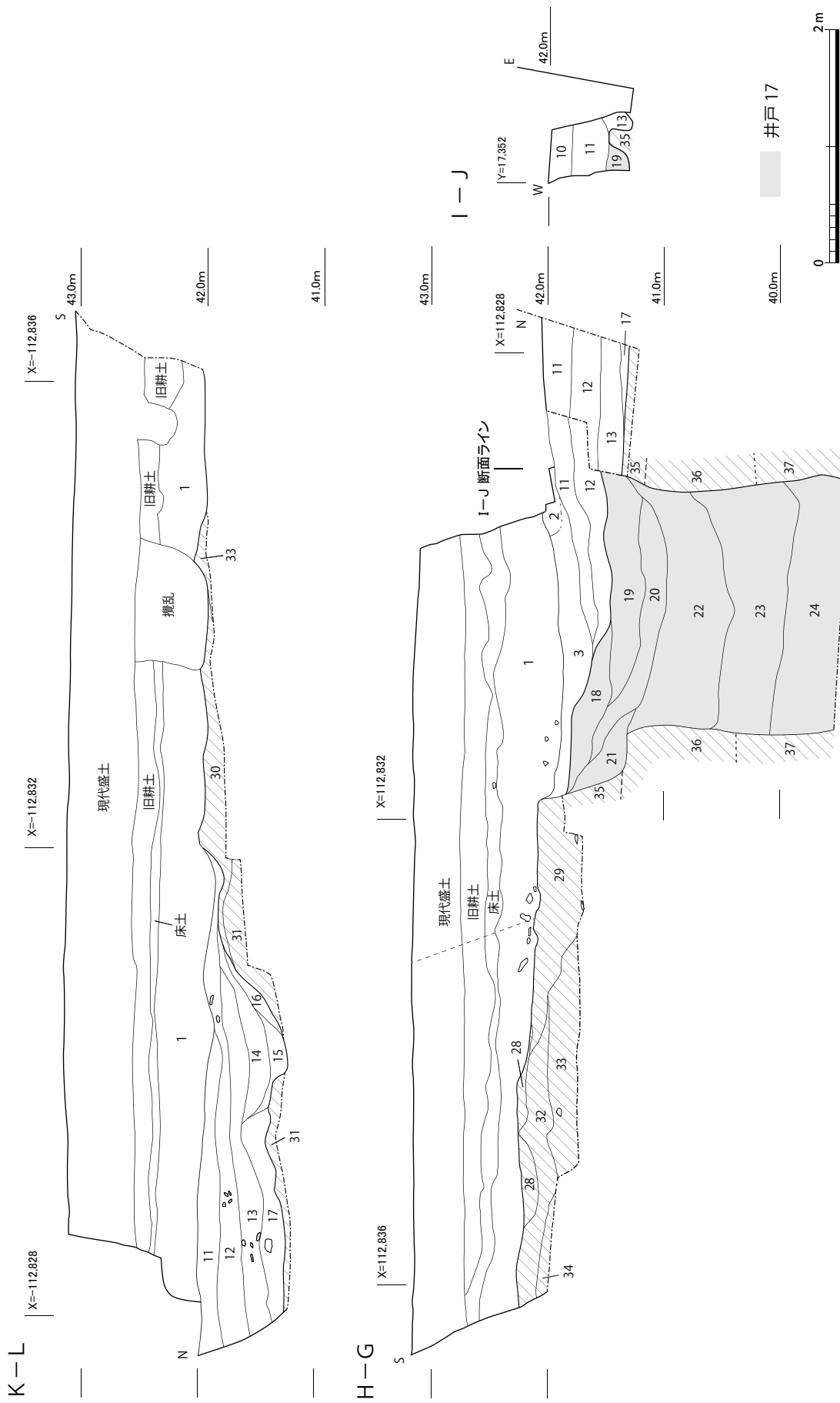
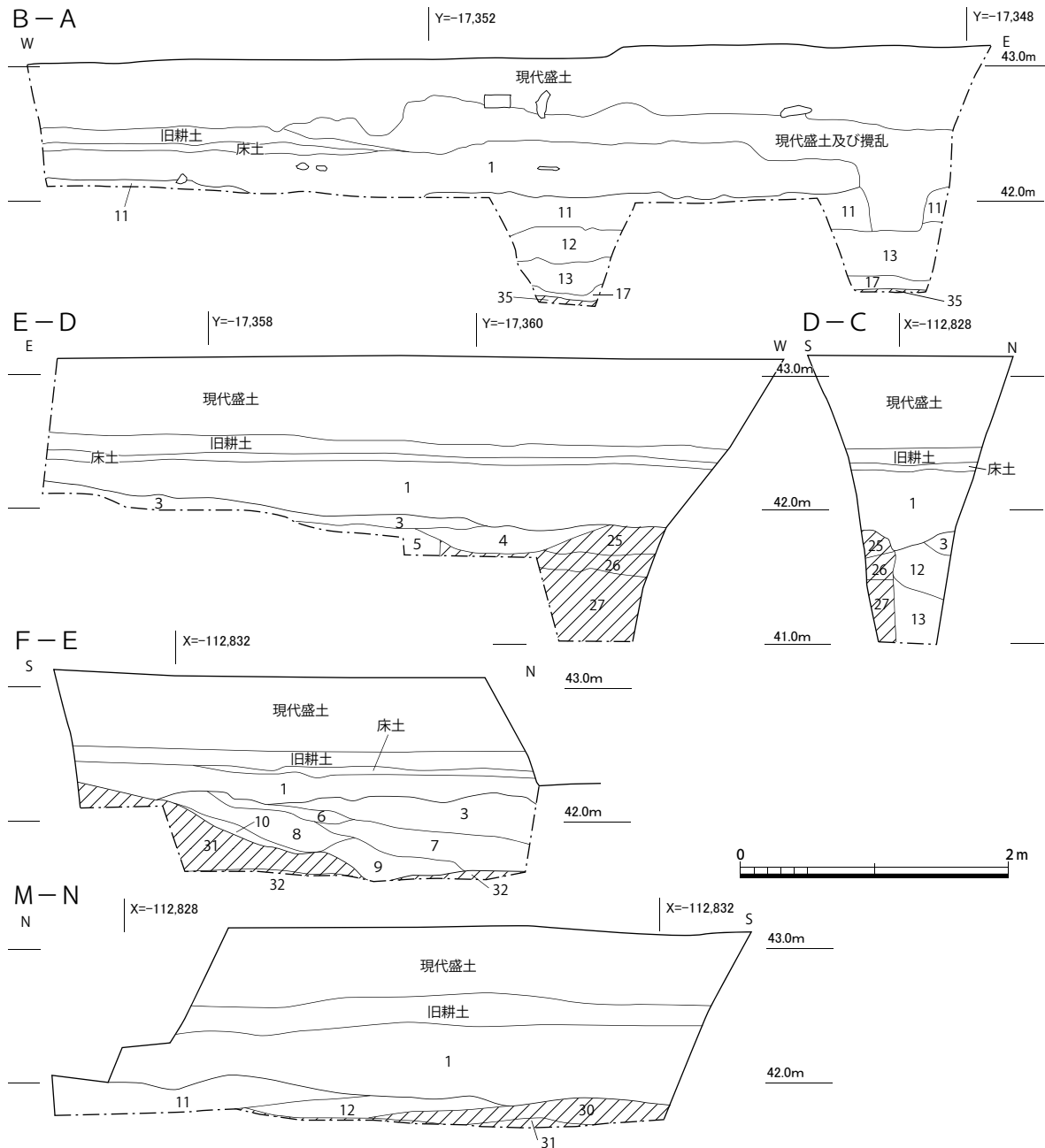


図94 25次 断面図1 (1:50)



- | | |
|--|---|
| 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (小礫まじり) 【近世包含層】 | 20 10YR6/1 褐灰色粘質土 (細砂多く含む・下部に鉄分沈着があり) 【井戸 17 上層】 |
| 2 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 (細砂少量含む) 【土坑 11】 | 21 10YR5/1 褐灰色粘質土 (3~5cm大の礫多く含む・縮まりあり) 【井戸 17 上層】 |
| 3 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (黒褐色に見える・遺物あり) 【整地土】 | 22 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (細砂多く含む・地山ブロック含む) 【井戸 17 下層】 |
| 4 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (褐灰色粘質土ブロック含む) 【整地土】 | 23 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (細砂多く含む・地山ブロック少し含む) 【井戸 17 下層】 |
| 5 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (遺物含む・縮まりあり) 【整地土】 | 24 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (細砂多く含む・地山ブロック少し含む・縮まりややあり) 【井戸 17 下層】 |
| 6 10YR6/4 にぶい黄褐色粘質土 (シルトに近い・縮まりあり) 【整地土】 | 25 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (細砂含む) 【地山】 |
| 7 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土 (小礫・細砂多く含む) 【整地土】 | 26 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト (2~3cm大の礫含む) 【地山】 |
| 8 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土 (地山ブロック含む) 【整地土】 | 27 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト 【地山】 |
| 9 10YR6/2 灰黄褐色細砂 (縮まりあり) 【整地土】 | 28 10YR4/2 灰黄褐色シルト (上部に小礫少し含む) 【地山】 |
| 10 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質土 (地山ブロック・細砂含む) 【整地土】 | 29 10YR4/2 灰黄褐色シルト (上部に小礫を含むが下部ほど含まれない) 【地山】 |
| 11 10YR3/2 黒褐色粘質土 (遺物含む) 【整地土】 | 30 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (小礫まじり・微砂多く含む) 【地山】 |
| 12 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (小礫含む) 【整地土】 | 31 2.5Y7/4 浅黄色シルト 【地山】 |
| 13 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (少量の拳大礫・細砂含む) 【整地土】 | 32 10YR7/1 灰白色礫砂 (1~3cm大の礫が主) 【地山】 |
| 14 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (少量の細砂・小礫含む) 【整地土】 | 33 10YR7/1 灰白色礫砂 (3~5cm大の礫が主) 【地山】 |
| 15 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 (細砂・小礫含む) 【整地土】 | 34 2.5Y6/4 にぶい黄色シルト 【地山】 |
| 16 10YR5/2 灰黄褐色粘質土 (細砂・小礫少し含む) 【整地土】 | 35 2.5Y7/4 浅黄色シルト 【地山】 |
| 17 10YR4/2 灰黄褐色粘質土 (地山ブロック点在) 【整地土】 | 36 2.5Y6/4 にぶい黄色粘質シルト (粘性強い) 【地山】 |
| 18 10YR6/2 灰黄褐色粘質土 (3~5cm大の礫多く含む) 【井戸 17 上層】 | 37 7.5YR6/4 にぶい橙色細砂 (縮まりあり) 【地山】 |
| 19 2.5Y6/2 灰黄色粘質土 (縮まりあり) 【井戸 17 上層】 | |

図95 25次 断面図2 (1:50)

井戸17 整地土の様相確認のために設定した断ち割り内で検出した素掘りの井戸である。全体が整地土により覆われており、整地土除去後、地山上面で検出した。検出径は3.0m、深さは2.5mまで掘り進めたが、安全を考慮し、これ以下の掘削は断念した。ただボーリングステッキにて下層を確認したところ、1m以上が埋土であることが分かり、井戸の深さは3.5m以上と考えられる。埋土は上下二層に区分でき、上層は灰黄褐色粘質土や褐灰色粘質土、下層は地山ブロックが少量混じる灰黄褐色粘質土が主体となり、いずれにも小礫が多く混じる。上層は層厚が0.2～0.3mほどで締まりがあり、下層は層厚が0.5mほどで、特に砂礫が多く、締まりがない。埋土は整地土と類似した堆積土であり、出土遺物に大きな時間差が認められないことから、廃棄後、すぐに埋め戻しと整地が行われたと考えられる。

御影堂想定範囲の南辺中央部（27次調査）

基本層序は、アスファルト・現代盛土、旧耕土や床土の下、厚さ0.2～0.45mの近世包含層を挟み、GL-0.75～1.1mで明黄褐色シルトや灰オリーブ色シルト、灰黄褐色砂礫の地山に至る。遺構検出は、調査区南端の一部を近世包含層上面で行い、その後、地山上面で遺構検出を行った。地山の標高は、北側で42.0m、南側で42.1～42.2mと南側がやや高い。確認した地山は、シルト（図97・98 - 33層）、砂礫（図97・98 - 34・35層）、シルト（図97・98 - 36層）と互層に堆積している。南端部については、地山の誤認があったため、検出面を下位のシルトまで下げてしまった。

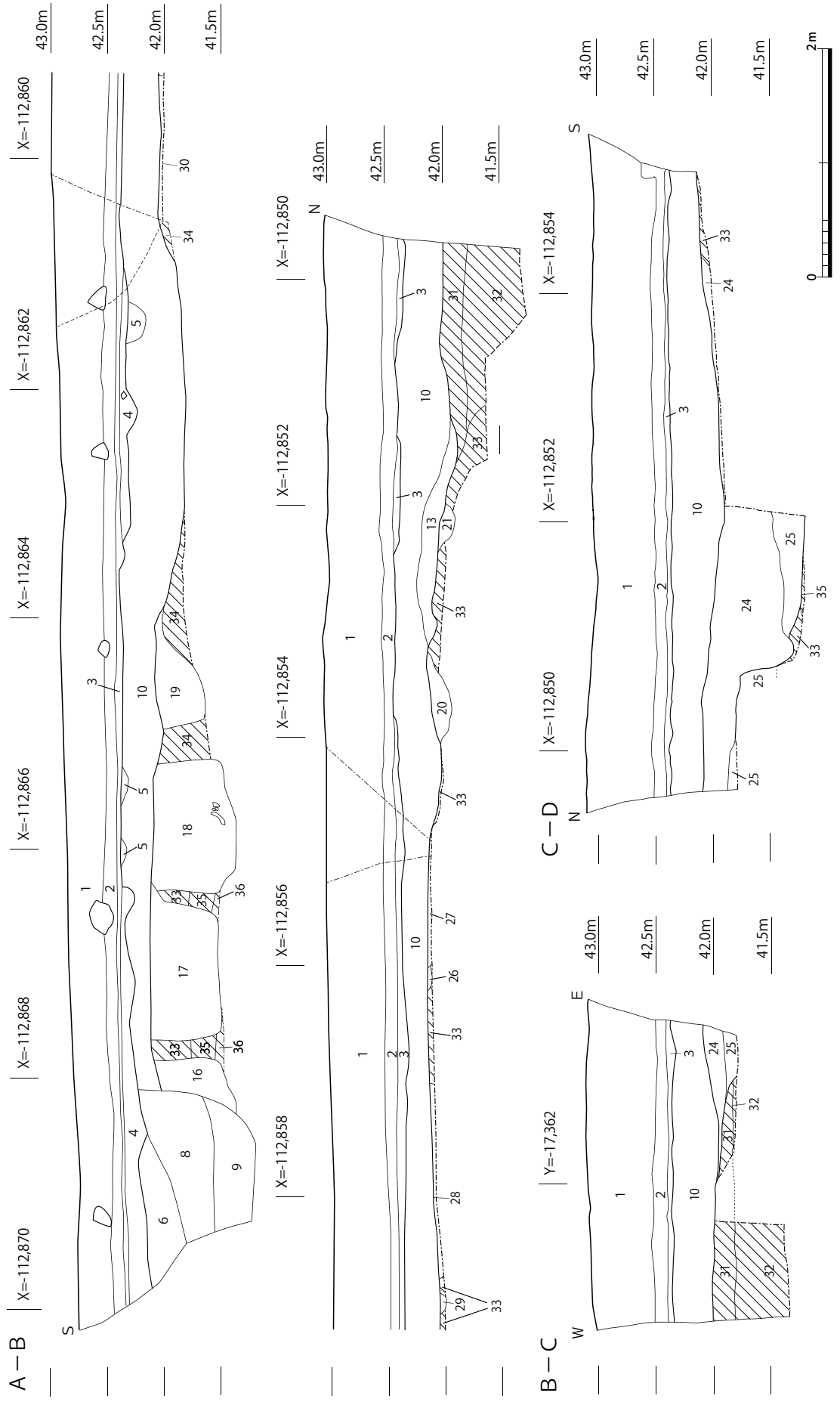
検出した遺構は、近世包含層上面では礫層（礫層A）、土坑3基（土坑20・25・28）、数条の耕作溝、地山上面では柱穴8基、土坑10基、落込み1基である。以下に遺構の概要を述べる。

柱穴4・5・6・8・10 調査区北側中央で検出した柱穴である。いずれも単層である。柱穴4・5の埋土はにぶい黄褐色粘質土、柱穴6の埋土はにぶい黄褐色シルト、柱穴8・10の埋土は黄褐色粘質土といずれも黄褐色がベースとなる。柱穴8は土坑1と接しているが断面観察では重複関係は確認できなかった。柱穴4・6の深度は浅く、残りが悪い。柱穴5からは土師器皿の細片がわずかに出土したが、時期の特定には至らなかった。

土坑1 調査区北東部で検出した土坑である。南北3.7m以上、東西1.2m以上の楕円形で調査区東側へつづく。深さは1.6mである。埋土は上下二層に区分でき、上層は灰黄褐色小礫混り粘質土、下層は灰黄褐色ブロック混り粘質土である。埋土からは近世陶磁器片に混り、土師器皿、瓦質土器羽釜の口縁部の小片がわずかに出土した。

表11 遺構概要表（27次）

時代	遺構	備考
室町時代		
江戸時代	土坑1・7・21～24・26・27・31・33	
江戸時代後期以降	土坑20・25・28・礫層A	



※土色は図98にて掲載

図97 27次 調査区壁断面図1 (1:50)

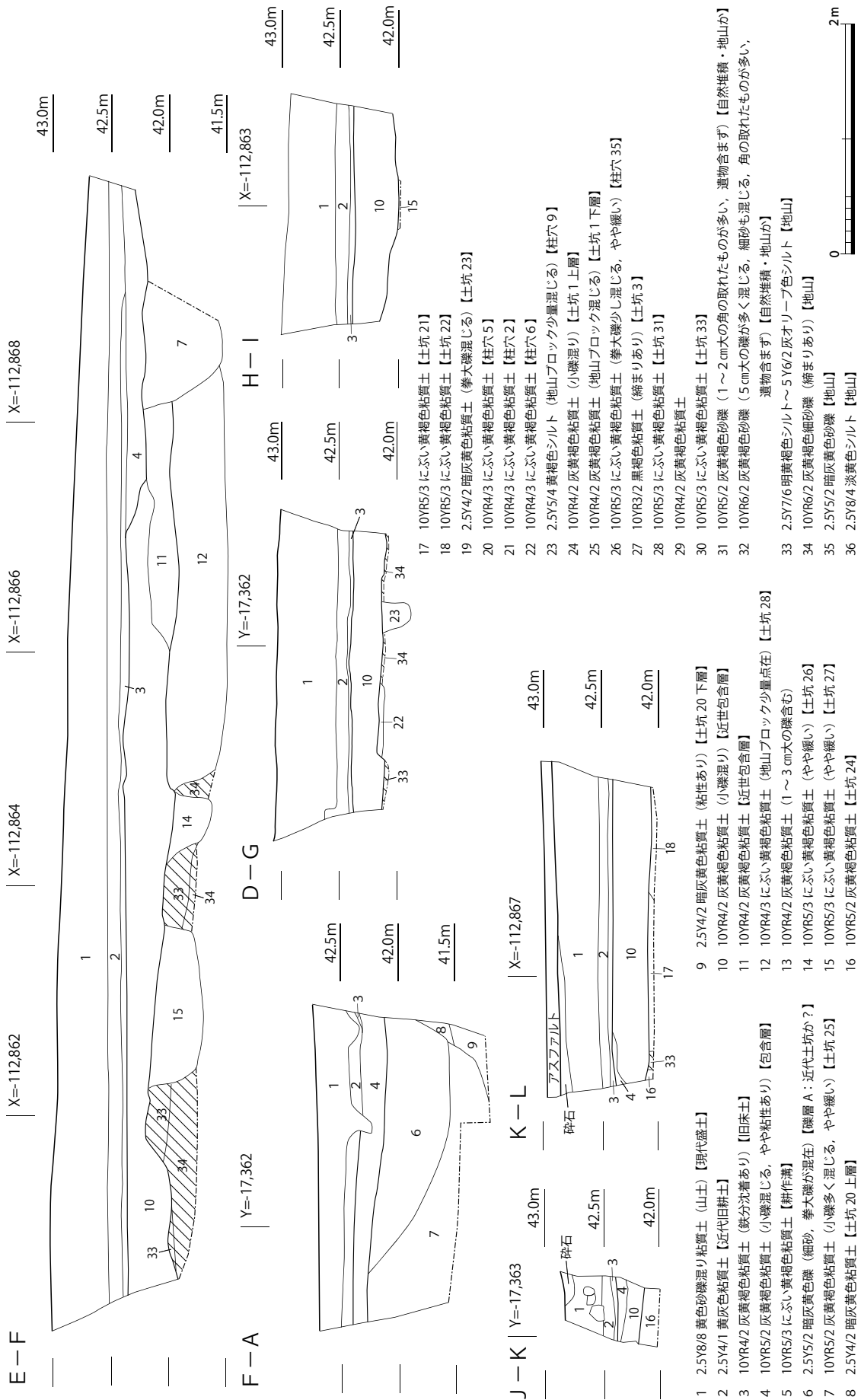


図 98 27 次 調査区壁断面図 2 (1:50)

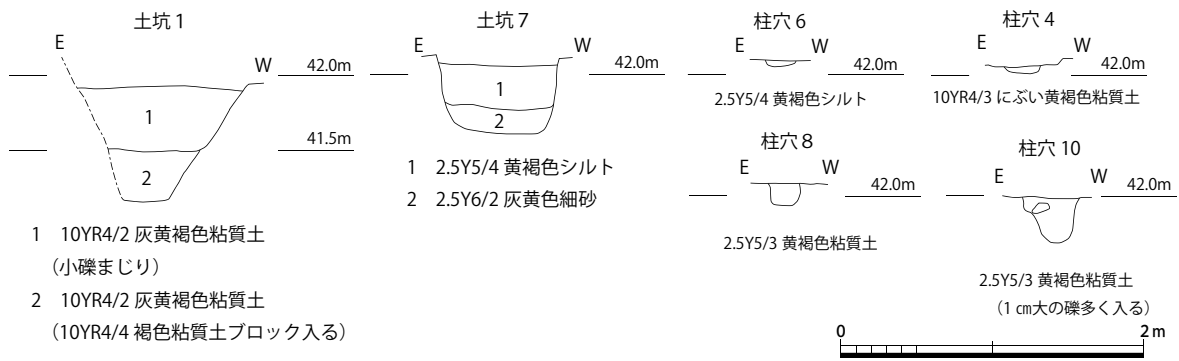


図99 27次 各遺構断面図 (1:50)

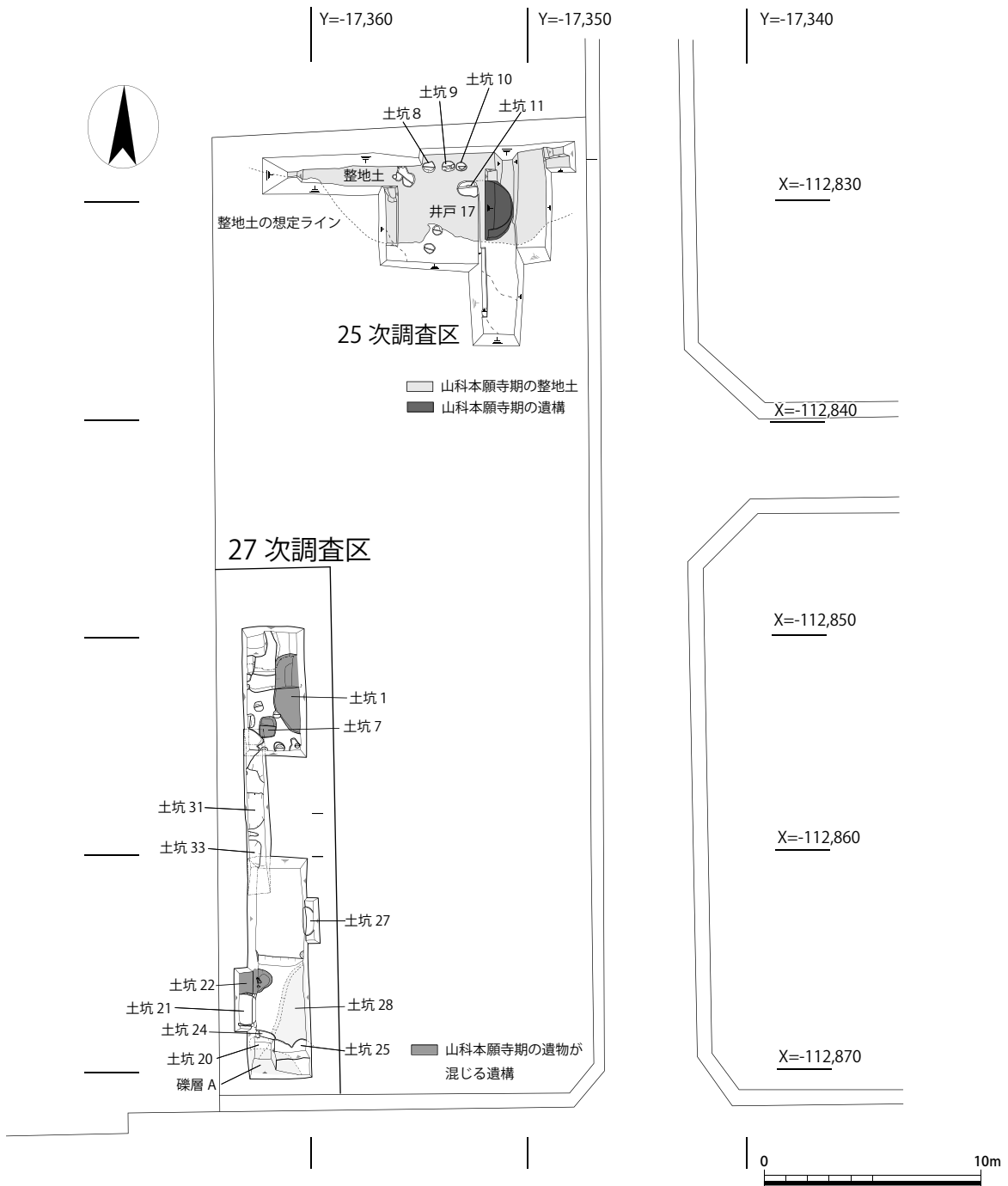


図100 25・27次 調査平面図 (1:300)

1.65 m以上である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。土坑33は、東西0.55 m以上、南北1.25 m以上である。埋土はにぶい黄褐色粘質土である。共に調査区内に収まらないものの、不定形の土坑である。土坑21や24、27などに埋土の様子が近い。

土坑20・25・28 調査区南端で検出した土坑である。重複しており、平面形は不明である。いずれも江戸時代後半以降の遺物を含む。層の重複関係から、土坑25は土坑20や土坑28より新しいが、土坑20と28の重複関係は不明である。

2. 遺物

遺物は4か年の調査で合わせて12箱出土した。宗主空間北側の遺物量が多く、御影堂想定地での遺物量は少ない。また全調査区を通して、山科本願寺廃絶後の近世以降の遺物が多く認められる。出土した遺物のうち、主要な157点を以下に報告する。また27次調査については、令和3年度に調査を実施した為、本報告以外の報告はない。

(1) 宗主空間北側（23次駐車場部分）

土坑42を主に整理箱に6箱の遺物が出土した。大半は土器・陶磁器であり、瓦や埴なども少量出土している。古い時代でいえば、縄文土器片や弥生土器片が少量確認できるが、山科本願寺期の遺物が大半を占めている。遺物は土坑42でまとまって出土している以外は点数が少なく、小片が多い。以下では遺構に伴うもの、かつ図化できたものを中心に報告する。

整地土（1～9） 整地土からは土師器が出土している。1～4は土師器皿である。口径は9.3～9.5 cmの小皿と口径14.6 cmの大皿がある。底部と体部の境が不明瞭で、口縁部は直線的に開く。3の口縁部には煤が付着しており、灯明皿として使用されていたと考えられる。5・6は瓦質土器である。5は鉢で直線的に立ち上がり、端部は短く外反する。外面には唐草文のスタンプが施されている。6は風炉である。7は青磁椀、8は常滑焼の甕の口縁部である。9は埴である。縦9.0 cm以上、横7.6 cm以上、厚み2.8 cmである。10A期に帰属すると考えられる。

表12 遺物概要表（23次）

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代以前	縄文土器, 弥生土器		縄文土器1点, 弥生土器2点	1箱	3箱
室町時代	土師器, 瓦器, 焼締陶器, 施釉陶器, 輸入陶磁器, 瓦, 埴, 金属製品		土師器51点, 瓦質土器4点, 施釉陶器2点, 焼締陶器4点, 焼締陶器2点, 輸入陶器2点, 輸入陶磁器2点, 埴4点		
江戸時代～近代	土師器, 焼締陶器, 施釉陶器, 瓦				
合計		6箱	74点（2箱）	1箱	3箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

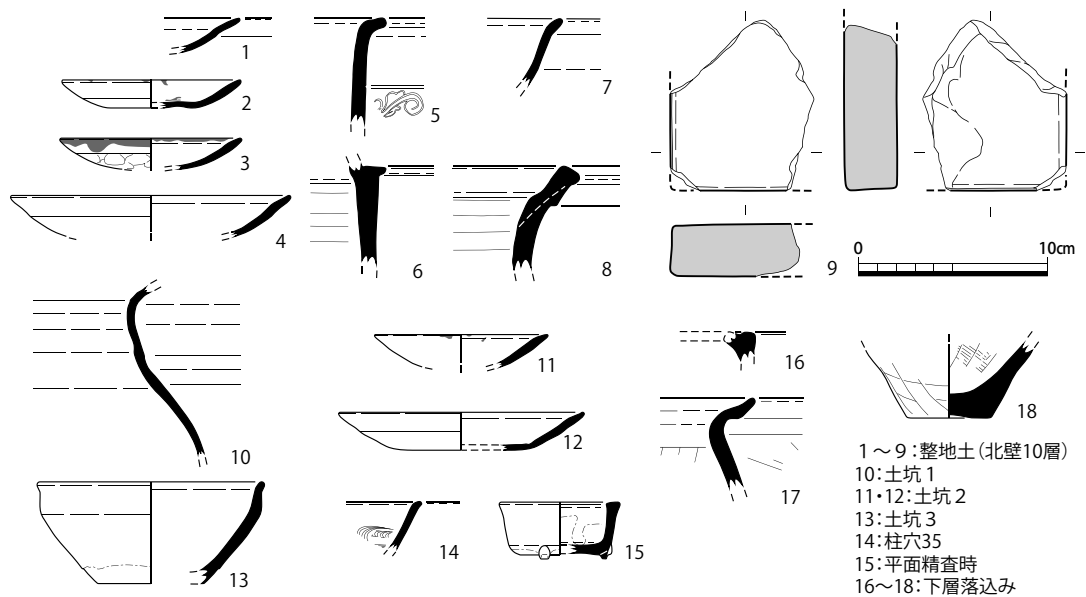


図101 23次 出土遺物1 (1:4)

土坑1 (10) 10は陶器の瓶の肩部である。厚みは0.4～0.5mと薄く、非常に硬く焼き締まる。胎土は灰褐色である。韓半島からの輸入陶器の可能性はある。

土坑2 (11・12) 11・12は土師器皿である。11の口径は10.8cm, 12の口径は12.8cmであり、口縁が緩やかに外反する。端部にはナデによる段が認められる。10A期に帰属する。

土坑3 (13) 13は瀬戸美濃の天目茶碗である。

柱穴35 (14) 14は白磁碗である。口縁部内面に櫛描が施される。

平面精査時 (15) 瀬戸美濃の香炉である。口径は6.2cm, 器高は3.0cm。底部には3か所の小さな脚がつく。

下層落込み (16～18) 16は縄文土器, 17・18は弥生土器である。17は甕の口縁部で受け口状になる。18は甕の底部である。底部外面中央部はやや凹み, 内外面にハケ痕跡が残る。

土坑42 (19～68) 土師器皿と判別できた破片数は1226点, このうち大皿が113点, 中皿が570点, 小皿が543点に区分できる。いずれの法量にも灯明皿は確認できたが, 特に小皿の使用割合が多い。また底部を押し上げるいわゆる「ヘソ皿」は破片を少量確認したのみである。この計測を基に法量傾向を表すことができ, かつ図化できるものを抽出した。

19～56は土師器皿である。口径が8.8～10.0cm, 10.8～13.7cm, 14.8～17.0cmの分布に区分できる。いわゆる白色系であるが, 火を受けたのか黒色のものがある (21・30)。基本的に口縁部に一段ナデを施し外反する。中～大皿では底部と体部の境が明瞭で, 口縁端部は外反するが, 概ね直線的に開く。見込み部外側には口縁部成形時のナデによるかすかな盛り上がり確認でき (36～39・42・45～47・49・51～56), また灯明皿として使用されていたものも確認できる (19・31・33・34・40～43・45・47・48・50・55)。57～60はミニチュア土器である。57は土師器皿, 58は鉢, 59は高杯である。58の内面には3条の条線が確認でき, 鉢ではなく, 摺鉢の可能性はある。61は瓦質土器の瓦灯の蓋の頂部である。中央部は直径1mm程度の空洞になっている。62は輸入陶器の片口の甕である。口縁部は粘土を継ぎ足し, 端部上面に広めの平坦面を施す。底

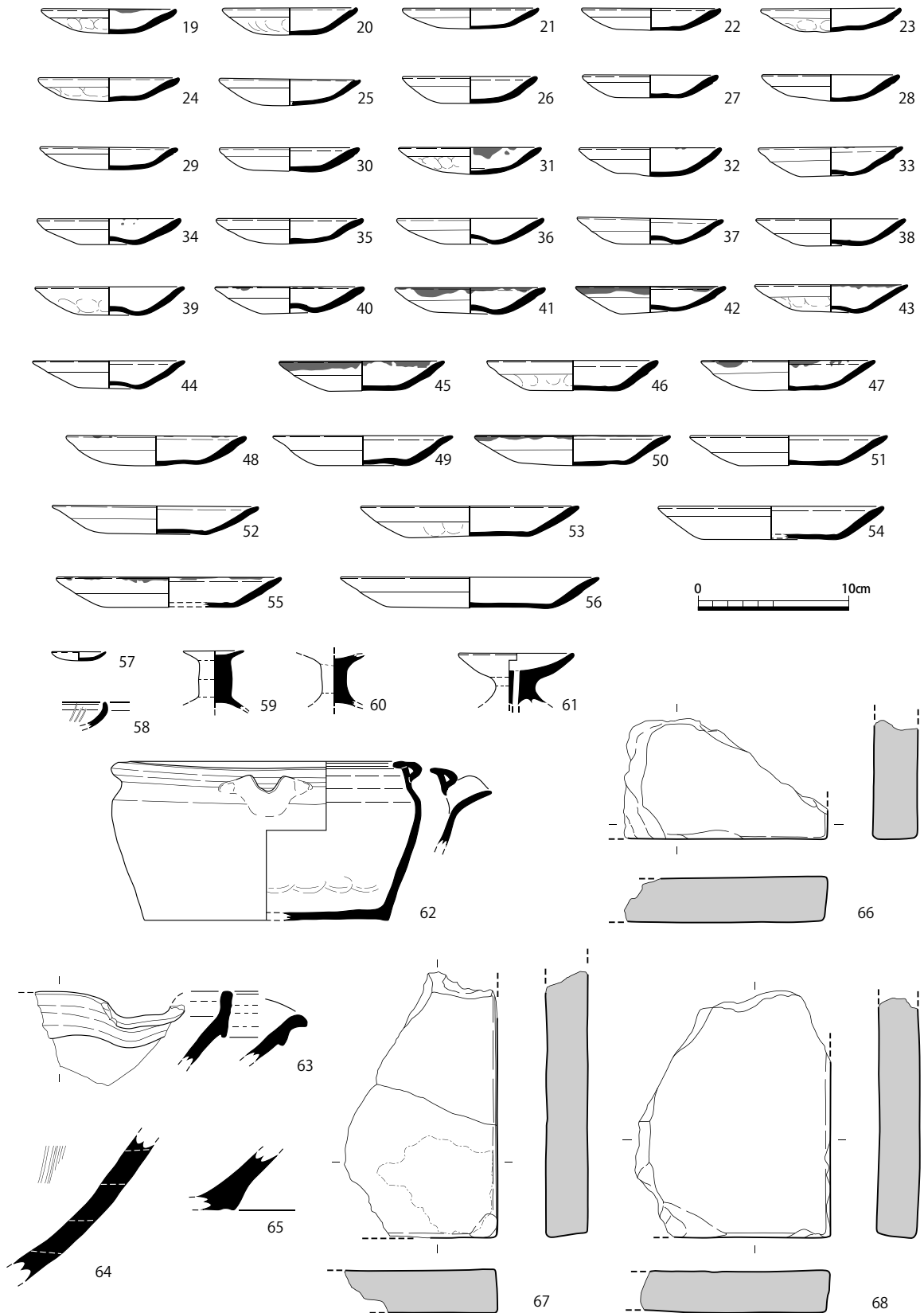


図102 23次 出土遺物2 (1:4)

部内面時は二枚貝を使用した貝目積み痕跡が3か所確認でき、表面には小さな火ぶくれが認められる。63は備前焼の播鉢口縁部、64・65は信楽焼摺鉢である。64は内面に4条の摺目が施され、下部は使用による磨滅痕が確認できる。66～68は磚である。66は縦8.0cm以上、横13.5cm以上、

厚さ2.9cm, 67は縦17.0cm以上, 横10.2cm以上, 厚さ2.8cm, 68は縦16.4cm以上, 横13.0cm以上, 厚さ2.8cmである。いずれの土器にも, 炭化物などで汚れた痕跡や二次焼成の痕跡はみとめられなかったため, 何らかの廃棄に伴う一群と想定できる。10A期に帰属すると考えられる。このほか, 平瓦や焼土片, 巻貝, 鉄滓, 金属製品も出土している。金属製品の種別は, 釘や小刀の刃などであるが, 細片で図化するには至らない。このうち折り曲げた後に切断したような痕跡が認められるものもある。

(2) 現存土塁 (23次測量部分・24次調査)

23次および24次調査で行った土塁部分より出土した遺物について報告する。

23次土塁 (西壁12層) (69~74) 69~73は土師器皿で, いずれも白色系である。全体を知れるものは少ないが, いずれも器高が2cm以上であることから, 小皿とは考えにくい。74は瓦質土器浅鉢の口縁部である。口縁部はナデにより丸く仕上げ, 内面にはミガキを施す。10A期に帰属すると考えられる。

24次調査の出土遺物の多くは, 濠を埋め立てた際の近代造成土からカルピスや牛乳の瓶, ティーカップなどが出土している。この他, 崩れた土塁構築土中 (図88・89 - 16層) から数点の遺物を確認したので, 小片ながら, 図化を試みた (図104・表13)。

75・76は土師器皿, 77は焼締陶器の壺の底部である。いずれも細片であるが, 10A期に帰属すると考えられる。

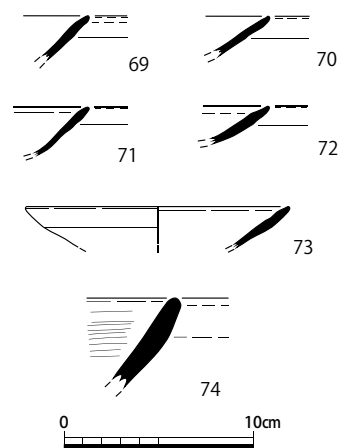


図103 23次 出土遺物3 (1:4)

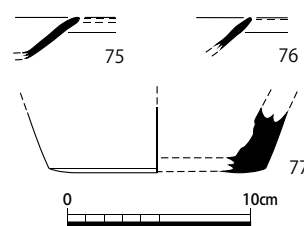


図104 24次 出土遺物 (1:4)

表13 遺物概要表 (24次)

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器, 焼締陶器,		土師器2点, 焼締陶器1点	0箱	1箱
江戸時代 ~近代	土師器, 焼締陶器, 焼締陶器, ガラス製品				
合計		2箱	3点 (1箱)	0箱	1箱

※ コンテナ箱数の合計は, 整理後, Aランクの遺物を抽出したため, 出土時より1箱多くなっている。

(3) 御影堂想定範囲 (25・27次調査)

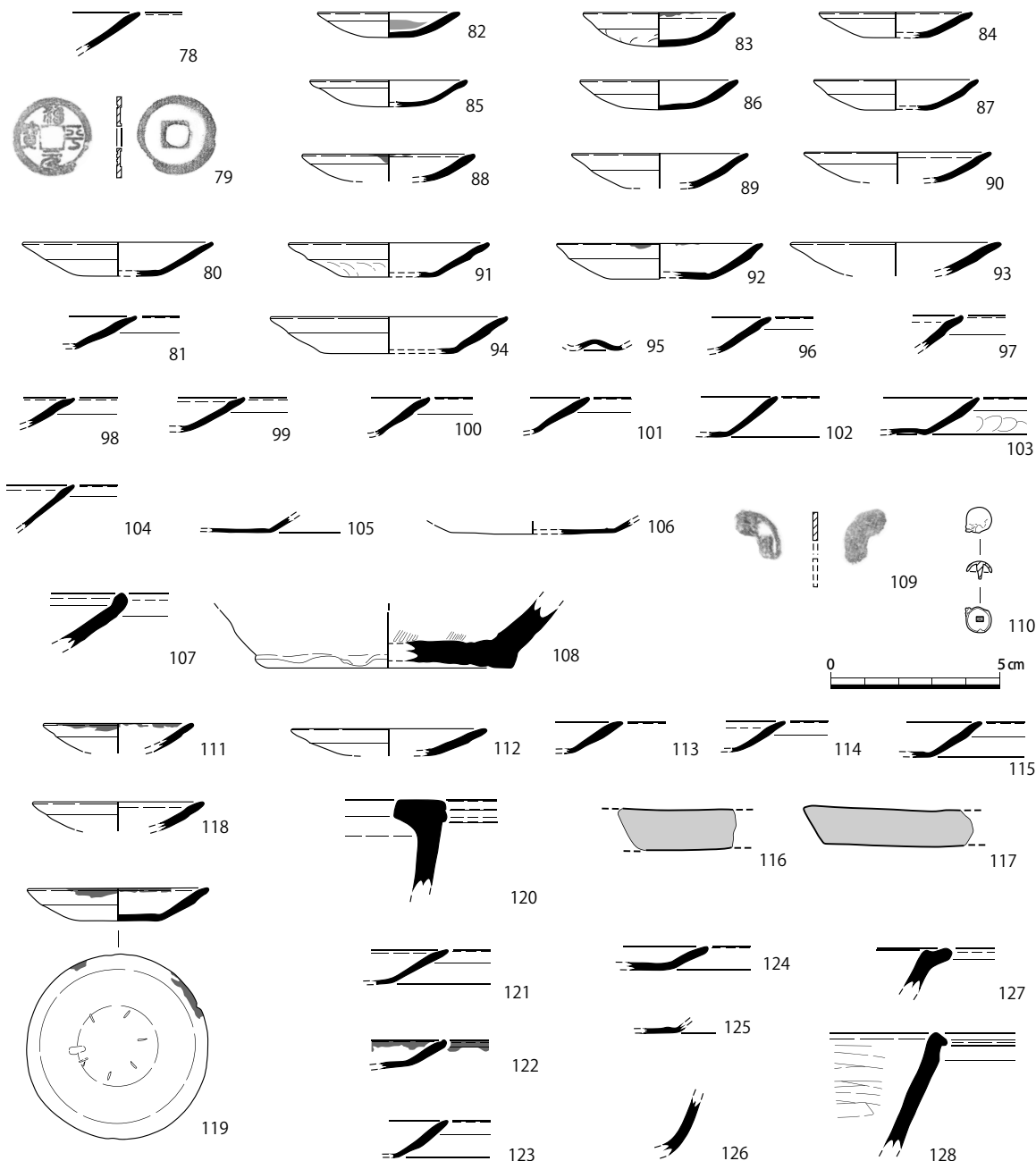
25次 - 土坑11や25次 - 井戸17, 27次 - 土坑7や27次 - 土坑22を中心に整理箱4箱分の遺物が出土した (表14・15)。大半は土器・陶磁器であり, 瓦なども少量出土している。またいずれも小片であるが, 特に遺構に伴ない, 図化できたものを中心に報告する。

25次 - 土坑8 (78・79) 78は土師器皿の口縁部である。79は治平通宝である。直径2.4cm。篆書体で銘が施される。

表14 遺物概要表 (25次)

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器, 瓦質土器, 焼締陶器, 輸入陶磁器, 瓦, 銭, 金属製品		土師器41点, 瓦質土器1点, 焼締陶器3点, 輸入陶磁器1点, 平瓦2点, 銭2点, 金属製品1点	1箱	0箱
江戸時代 ~近代	土師器, 焼締陶器, 施釉陶器, 瓦				
合計		2箱	51点 (1箱)	1箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。



78・79 :土坑8 111~117 :平面精査時
 80・81 :土坑9 118~120 :11層(整地土) 122~126 :井戸17上層(18~21層)
 82~110 :土坑11 121 :12層(整地土) 127・128 :井戸17下層(22~24層)

図105 25次 出土遺物 (1:4, 79・109のみ1:2)

25次 - 土坑9 (80・81) 80・81は土師器皿である。80は口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く収める。底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がり確認できる。81は口縁部は外反し、端部はややつまみ上げる。

25次 - 土坑11 (82～110) 82～106は土師器皿である。破片が多く、口径を復元できたものは少ない。口径が復元できたものの中では、大きく小・中・大の3法量にまとまりがあるものの、法量の分化が認められる。口径は8.2～10.8cmの小皿(82～90)、11.6～12.2cmの中皿(91～93)、14.0cmの大皿(94)である。小皿は底部と口縁部の境が不明瞭で、端部は外反気味に開く。端部は丸く仕上げるものが多い。中皿と大皿は、底部と口縁部の境が明瞭で、口縁部は直線的に開く。端部は、ナデ痕跡が明瞭に残る。この他、破片ではあるが図化できたものは、底部中央を上押し上げた「へそ皿」と呼ばれるもの(95)、口縁端部がややつまみ上げられるもの(97)、直線的に開く口縁端部(102・103)、および底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がり確認できるもの(105・106)などがある。出土した土師器皿は738点確認できたが破片が多く、法量推定が困難なものが76%を占め、この他、判別可能なものとしては、小皿が5%、中皿が7.5%、大皿が11.5%を占める。107は炮烙である。108は信楽焼の播鉢の底部である。内面に4条一単位の摺目が施される。109は銭である。1/4程しか残存しておらず、銘も確認できない。110は飾り金具である。

25次 - 整地土(平面精査時)(111～117) 111～115は土師器皿である。いずれも破片で、口径が分かるものは少ない。111～114は小皿で、口縁部は外反し、端部は丸く収める。115は大皿で、底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がり確認できる。116・117は平瓦片である。摩滅はしているものの、かろうじて布目が確認できる。

25次 - 整地土(11層)(118～120) 118・119は土師器皿である。口径は10.0～10.6cmで、ともに小皿である。119は口縁部が外反し、端部にナデを施す。底部には放射状の圧痕が6か所確認できる。口縁端部に煤が付着しており、灯明皿と考えられる。120は瓦質土器の浅鉢の口縁部である。

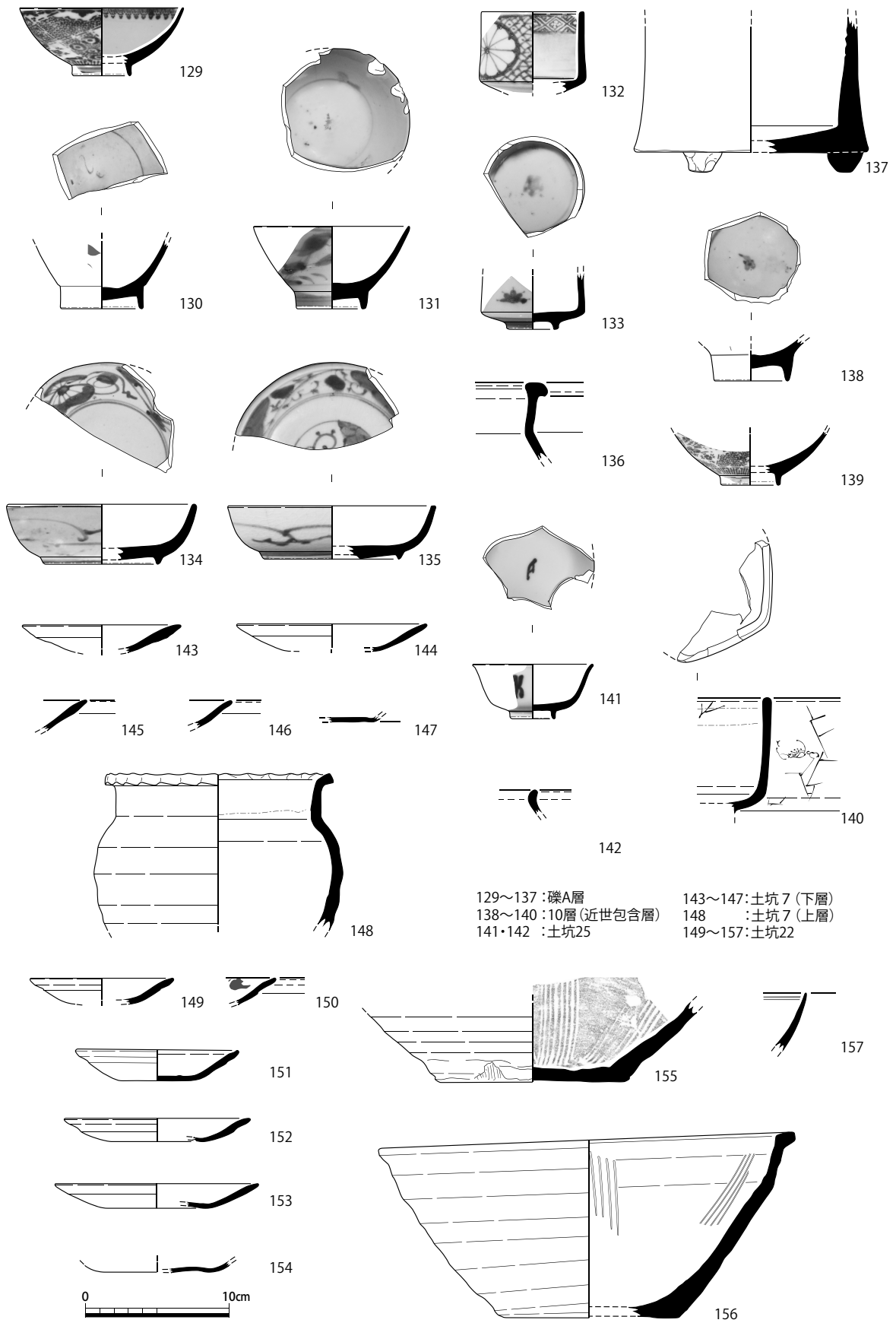
25次 - 整地土(12層) 121は土師器皿である。口縁部は直線的に立ち上がり、底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がり確認できる。

25次 - 井戸17 (122～128) 122～126は上層、127・128は下層から出土した。122～125

表15 遺物概要表(27次)

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
室町時代	土師器, 瓦質土器, 焼締陶器		土師器11点, 焼締陶器2点	0箱	1箱
江戸時代 ～近代	土師器, 焼締陶器, 陶磁器, 施釉陶器, 瓦, 金属製品		土師器1点, 陶磁器11点, 施釉陶器4点		
合計		2箱	29点(1箱)	0箱	1箱

※なお、2次調査報告分(2点)を含めると、Aランクは2箱(31点)、コンテナ箱数は3箱になる。



129~137 : 碟A層
 138~140 : 10層(近世包含層)
 141・142 : 土坑25

143~147: 土坑7(下層)
 148 : 土坑7(上層)
 149~157: 土坑22

图106 27次 出土遺物(1:4)

は土師器皿である。122の口縁端部には煤が付着し、灯明皿と考えられる。125の底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりを確認できる。126は青磁椀，127・128は信楽焼の鉢である。10A期に帰属すると考えられる。

27次 - 礫A (129～137) 129～133は染付の椀である。130・131は広東椀で，131の内面見込みには「寿」を崩した文が施される。132・133は小椀で，133の内面見込みには，コンニャク印判と思われる五弁花文が施される。134・135は染付の皿である。136は施釉陶器の壺の口縁部である。全体に褐色の釉薬が施される。137は土師器の火鉢である。いずれも18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

27次 - 10層 近世包含層 (138～140) 138・139は染付椀である。138は広東椀で見込み内面に五弁花文を施す。140は施釉陶器の椀である。外面に灰白色の釉薬が施される。いずれも18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

27次 - 土坑25 (141・142) 141は染付小椀である。142は施釉陶器の壺の口縁部である。暗褐色の釉薬が施される。いずれも18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

27次 - 土坑7 (143～148) 143～147は下層，148は上層から出土している。143～147は土師器皿である。いずれも破片で，口径が分かるものは少ない。143の口径は10.9cm，器高1.9cmと小皿である。144の口径13.0cm，器高1.9cmで中皿，145～147は大皿と考えられ，底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりを確認できる。これらは10A期に帰属すると考えられる。148は施釉陶器の壺である。口縁部を波状に施し，全体に褐色の釉薬を施す。18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

27次 - 土坑22 (149～157) 149～154は土師器皿である。149は小皿，151は中皿，150・152～154は大皿である。149の口径は9.8cm，器高1.8cm，151の口径は11.2cm，器高2.2cm，152の口径は12.8cm，器高は1.6cm，153の口径は14.0cm，器高は1.7cmである。151・152・154の見込みには，底部内面に口縁部のナデによるかすかな盛り上がりを確認できる。155は備前焼の摺鉢である。8条一単位の摺目が4か所確認でき，12か所に施されていたと想定できる。156は信楽焼の摺鉢である。4条一単位の摺目が3か所確認できる。6か所に施されていたと想定できる。これらは10A期に帰属すると考えられる。157は染付椀の口縁部である。18世紀後半から19世紀前半頃のものと考えられる。

御影堂想定地内 (25・27次調査) の出土遺物の大半が10Aに帰属すると考えられ，また二次焼成を受けた痕跡は認められなかった。このことから，山科本願寺が焼き討ちされる以前の様子を示す遺物と考えられる。なお，明らかに9C期と考えられる遺物は確認できず，造営当初を示す遺物は認められなかった。

3. まとめ

平成30年から令和3年にかけて行った23～25・27次調査では、御本寺の北西部を対象に、土塁（23・24次）及びその内側（24次）、現在の御影堂想定範囲（25・27次）の調査を行った。

焼土について

23次調査では、16～21次調査で確認されているような土塁の内溝や焼亡時の火災痕跡の検出を想定していた。しかし焼亡時と想定できる焼土層は確認できず、また土塁内溝の想定位置では内溝ではなく東西方向の柵、土塁の裾に想定できる範囲では山科本願寺期の土坑と整地土と考えられる土層を確認し、調査区の大半で厚い近世以降の包含層を確認した。25・27次調査でも焼亡時と想定できる焼土層は確認できず、厚い近世以降の包含層を確認した。この包含層についてはこれまでの調査（16・17・18次）でも確認されており、山科本願寺廃絶後の様相を示すものとして取り上げられ²²⁾、焼土面を含む山科本願寺期の遺構面が良好に遺存している傾向があったが、今回の調査区内では、周辺調査同様に、近世以降の整地土直下で山科本願寺期の遺構を確認したものの、焼土や炭化物などは確認できなかった。このため、近世以降に削平をうけたものと考えている²³⁾。しかし、いずれの調査でも確認されているような遺構埋土に焼土や炭化物が顕著に混じる状況も確認できなかった。このため、調査地内で火災が起こっていない可能性を考慮すると、天文元年（1532）の焼き討ち時、御本寺内のすべてが焼き払われたのではない、もしくは、火災痕跡が残るほどの焼土や炭化物が生じるような構造物が対象地内に存在しなかった、ということも考えられる。

土塁について

23・24次調査では、奥田家北側土塁で御本寺の北西隅の北辺部の調査を行い、土塁の形状および断面観察による構造を確認した。土塁の規模は、幅17～18m、高さ4.55～5.0m、頂部には1.8～2.5mの平坦面をもつ。外側の傾斜角度は35～36度、内側は53～54度である。主軸は約10度、北に振る。土塁下層の地山は砂礫またはシルトである。調査では一部地山まで確認した。その範囲内では、地山を掘りくぼめることなく構築土を積み上げる。23次東壁断面30～32層（図85-30～32）は核と思われる。中世における土塁構築で見られる一般的な核は、土塁の中心からやや外側につくられ、核の内側に土を互層になるように積みあげるものが多く、今回の調査でも同じ様相を確認した。また造成時期については、23次調査の土坑42と整地土の重複関係から推測できる。土坑42は地山上面に形成され、埋没後に、整地土で覆われていること、またこの整地土上面でピットが成立することを確認している。この重複関係から、土坑42の形成→土坑42の廃絶→上面を整地→柱穴や土塁などの形成という遺構変遷が想定できる。すなわち土塁の成立時期は、土坑42廃絶以降かつ土塁埋土出土の遺物が示す時期と想定できる。土坑42および土塁構築土出土土器群は、10A期と考えられる。現状の研究では、概ね1500年から1532年の年代観であり、焼亡以前の約30年間に収まるものと考えられる。このほか、23次調査で土塁の断面観察を行なった結果、小片ではあるが遺物が確認できた。土塁出土土器群はいずれも10A期と想定でき、御本寺をめぐる土塁が10A期には完成していたものと考えられる。よって、土坑埋没から整地、柱穴及び土塁形成時期が概ね

1500年から1532年の焼亡以前の約30年の間に想定することができる。これまでも土塁の規模や時期についての検討は行われており、山科本願寺造営当初に土塁が存在しなかったことや、現在の形状になったのが永正年間（1504～1521）ではないかとの指摘²⁴⁾がある。今回の調査では、土塁裾想定位置で土坑42を、かつ上面で整地土を確認していることから、現在の土塁の様相になった時期については、1500年前後以降と考えられ、これまでの見解と矛盾しない成果となった。

主要堂舎について（遺構配置について）

これまでの調査で、本願寺門主の私的空間である「宗主空間」内の様相は少しずつ明らかになっているが、御影堂や阿弥陀堂などの痕跡は確認できていない。今回の25・27次調査では御影堂想定地内での発掘調査を行ったが、当初目的としていた御影堂に直接関わる建物の柱跡などは確認できなかった。しかし、山科本願寺期の土坑や井戸のほか、北側に非常に固く締まった整地土、南側に安定した地盤を確認した。特に土層観察から、25次調査の井戸17は廃絶直後に埋め戻され、南側の安定した地盤の高さ（41.5m）まで整地が行われたことがわかった。また出土した土器の年代から、整地した時期は山科本願寺の焼き討ち前と考えられ、寺の維持管理の一環として、計画的かつ大規模な寺内造成が行われていたことがうかがえる。また27次調査では、近世以降の土坑群が多数確認できるが山科本願寺期に遡る遺構は確認できず、また土坑22から近世遺物とともに山科本願寺期の遺物がいくつか確認できる程度である。このように、今回の調査範囲内では山科本願寺期の遺構密度が希薄であり、御影堂想定範囲の南側では特にその傾向が強い。

また確認した井戸（SE17）は、御本寺内で確認した井戸では6例目となり、最も北に位置し、かつ、標高の高い場所にある²⁵⁾。このあたりは扇状地に位置しているため、これまでの調査でも井戸の深度は3m以上と深く、地下水位が低い場所である。今回の調査でも深度が3.5m以上と深く、底を確認することはできなかった。このような場所に井戸が配置されていることから、付近に水を必要とする施設が存在した可能性が考えられる。調査対象地が現状、御影堂想定地範囲にあたることから、井戸の性格については、今後十分に検討する必要がある。

御影堂は本願寺にとって重要な施設であり、山科本願寺の造営直後に建立が始まっている。建て直しの記述などは認められず、焼き討ちまで存在したといえる。堂の規模は明らかではないが、少なくとも七間以上で、またこれに見合うような広い外陣や施設があったとされている²⁶⁾。そのため、少なくとも山科本願寺期の井戸やその上面に行われた整地が確認できた範囲には、造営当初に建てられたとされる御影堂を想定することはできない。後世に削平された可能性は否定しきれないが、周辺の調査地よりはるかに遺構密度が低いことから、25・27次調査地の辺りは、主要堂舎の周囲の空閑地として利用されていた可能性が考えられ、近接した場所に御影堂の存在を想定することが可能である。

（奥井 智子）

註

- 22) 「IV - 4 山科本願寺跡 No.88・89」『京都市内遺跡試掘調査報告書 平成19年度』京都市文化市民局、2008。柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局、2013。

- 23) 現状、調査対象地内には焼土が広がっていることを想定して調査を行っている。これは、天文元年(1532)の焼き討ち時の様子を記録した多数の文献から想定できるところである。また堂舎のすべてが焼却なのか破却なのかについては、祖像が土中に埋め隠されたとの記録が残ることから、焼却の可能性が高いと考えている。祖像を地中に隠さなければならないということは、行われた「焼き討ち」が、宗教性の象徴を叩くために、主要堂舎や仏像を焼く行為にまで及んでいと想定でき、御影堂や阿弥陀堂などの主要堂舎も焼き払われたと考えられるためである。(植田誠「寺院中核焼き討ち考 - 心性史からのアプローチ -」『日本宗教文化史研究』第24巻第1号 日本宗教文化史学会, 2020。)
- 24) 草野顕之「創建時山科本願寺の堂舎と土塁について」『中世の寺院体制と社会』吉川弘文館, 2002。
柏田有香「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局, 2013。
- 25) 現状、御本寺内での報告事例は7例確認できる。このうち14次調査の庭園関連の2基の井戸は溜井と想定され、湧水層に達する井戸は5例となり、今回は6例目となる。以下に、北から順に事例の概要と出典を示す。この他、15次調査(表1-24)の第3トレンチにて、直径1mの素掘り井戸が1基(井戸27)、確認されている。深さは2m以上とのこと。ただ未報告資料で、時期など詳細は明らかでなく、山科本願寺期の遺構か判別できないため、今回は除外する。

事例概要

- ①18次調査SE3020：直径1.9m、深さ4m以上。底は確認できず。石組が確認できる。炊事関係と推測される。
- ②18次調査SE3080：直径約3m、深さ4m以上。底は確認できず。石は確認できず、抜き取られたと考えられる。風呂関連遺構の構成要素とされる。
- ③14次調査井戸27：一辺約1mの方形石組井戸。深さは0.7mと浅く、そこに粘土が貼っていたことから、溜井と推測されている。庭園に関連するものの可能性が指摘されている。
- ④14次調査井戸10：一辺約1mの方形石組井戸。深さ0.5mと浅く、木枠が組まれていた可能性が高い。溜井と推測されている。庭園に関連するものの可能性が指摘されている。
- ⑤10次調査井戸71：直径2.8mの円形井戸。深さ3mで石組の一部が確認できた。石はほぼ抜き取られているが、石組井戸と考えられる。
- ⑥6次調査井戸：直径2mの円形井戸。2区にて確認。平面図のみの報告のため、詳細不明。
- ⑦7次調査井戸：深さ4mの石組井戸。最下層には枠組みの板材が確認できたことから、井戸底には円形の木枠が据えられていたものと考えられている。近接地に鍛冶場が想定されており、金属生産に関係すると推測されている。底を確認している。

出典

- ①・②：「山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』京都市文化市民局, 2013。
- ③・④：「Ⅶ 山科本願寺跡(4)」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局, 2006。
- ⑤：「Ⅳ 山科本願寺跡(1)」『京都市内遺跡発掘調査報告平成17年度』京都市文化市民局, 2006。
- ⑥：「山科本願寺跡1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1999。
- ⑦：「山科本願寺跡2」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所, 1999。
- 26) 櫻井敏雄「第二節 山科本願寺の宇堂とその類型」『浄土真宗寺院の建築史的研究』法政大学出版局, 1997。